

小阿地

二 あ ち

下墻遺跡、発掘調査報告書
坂ノ上遺跡

1976

秋田市教育委員会

序

秋田市の遺跡三大密集地帯の一つ、四ツ小屋小阿地において、文化財保護の立場から開発に対処してすでに8年を経過した。

前半の6年間は下堤遺跡の調査、そして後半の2年間はその南に隣接する坂ノ上遺跡の調査であった。下堤における調査は、当時の状勢から全面発掘を目指して始まったが、遺跡の状態から5年次以降は、遺跡の分布とその範囲確認方式に切替え、この調査方法を坂ノ上にも採用して調査を行なった。

したがって、遺跡の完全把握には至っていないが、保護を前提として考えた場合、まことに意義深い調査であったことは申すまでもない。

調査の実施にあたっては、国、県、関係機関の指導援助をはじめ、各大学、高校、地元関係者、土地所有者等多くのかたがたの積極的なご協力をいただき深く感謝申しあげるだしいである。

長期間にわたった調査の指導、また、本報告書をまとめるにあたって執筆くださった調査員のかたがたに対し、深甚の意を表するものである。

毎年概報をもって調査報告してきたところであるが、この調査の最終年次にあたって、これまでの調査結果を集大成したのが本報告書である。これが文化財保護のため、さらには研究資料として、広く活用されることを念願するものである。

昭和51年3月

秋田市教育長 佐藤博之

例

言

- 1 本書は秋田市四ツ小屋小阿地に所在する下堤・坂ノ上遺跡の埋藏文化財発掘調査の報告である。
- 2 出土遺物の整理は社会教育課菅原俊行が行ない、県立金足農業高校社会部員の協力を得た。
- 3 掲載写真的撮影・実測図等の作成は菅原俊行が主に行ない、次の諸氏の協力を得た。富樫泰時、五十嵐芳郎、鍋倉勝夫、佐々木栄孝、秋田大学歴史研究室、秋田城跡発掘調査事務所。
- 4 本書の作成にあたり県立博物館富樫泰時氏から指導助言を得た。
- 5 下堤遺跡第Ⅲ章、第4節については、日本作物学会で発表された岡山大学笠原安夫教授の要旨を利用させていただいた。
- 6 下堤遺跡第Ⅲ章、第5節については京都農科大学梅本光郎教授より原稿をいただいた。
- 7 石質については県立博物館渡辺民氏から助言を得た。
- 8 本書の編集は秋田城跡発掘調査事務所の協力を得て菅原俊行があたった。
- 9 原稿執筆者（五十吉順）
五十嵐芳郎、石郷國誠一、大友俊和、庄内昭男、庄内公子、菅原俊行、富樫泰時、中尾一生、鍋倉勝夫、日野久。
- 文責 秋田市教育委員会。
- 10 発掘調査による出土遺物、実測図、写真、その他の記録は秋田市教育委員会が保管する。

目 次

序

例 言

下 堤 遺 跡

第Ⅰ章 調査の概況	1
第1節 遺跡の発見から第2次調査まで	1
第2節 第3次調査～第4次調査	1
第3節 第5次調査～第6次調査	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	5
第1節 遺跡の位置	6
第2節 自然的環境	6
第3節 周辺の遺跡	10
第4節 考古学的環境	12
第5節 結 び	15
第Ⅲ章 下堤遺跡A地区	17
第1節 A地区の概観	17
第2節 住居跡と出土遺物	17
第3節 土壌と出土遺物	46
第4節 下堤遺跡より出土した発芽タデ種子の走査電顕による形態的研究	57
第5節 ハルタデ、イヌタデの葉に含まれるシュウ酸カルシウム結晶パターン	60
第6節 結 び	70
第Ⅳ章 下堤遺跡B地区	71
第1節 B地区の概観	71
第2節 住居跡と出土遺物	71
第3節 結 び	77
第Ⅴ章 下堤遺跡C地区	79
第1節 C地区の概観	79
第2節 住居跡と出土遺物	79
第3節 その他の出土遺物	84
第4節 結 び	86

坂ノ上遺跡	
第I章 調査の概況	89
第1節 調査に至るまでの経過	89
第2節 第1次調査～第2次調査	89
第II章 遺跡の立地と環境	91
第1節 遺跡の位置	91
第2節 自然的環境	91
第3節 周辺遺跡	91
第III章 坂ノ上遺跡A地区	92
第1節 A地区の概観	92
第2節 住居跡と出土遺物	92
第3節 結　　び	109
第IV章 坂ノ上遺跡B地区	110
第1節 B地区の概観	110
第2節 遺構と出土遺物	110
第3節 石棒について	116
第4節 結　　び	117
結　　語	120
発掘調査の組織	123



下堤遺跡
坂 / 上堤遺跡
航空写真

小 阿 地
下 堤 遺 跡

下堤遺跡発掘調査報告

第Ⅰ章 調査の概況

節1節 遺跡の発見から第2次調査まで

下堤遺跡は、秋田市四ツ小屋小阿地字下堤に所在し、地元の人達に土器、石器片等の散在する所として知られていたが遺跡としては、昭和42年、国鉄職員で秋田考古学協会員、五十嵐芳郎氏によって発見された。同年8月、秋田大学、立正大学学生等が同地を踏査した際、庭造り等の土等りの行なわれた場所から土器片、石器とともに石圓いの炉が発見されたのである。その後、土地所有者である秋田土地開発株式会社と連絡をとり、遺跡が破壊されないように協会員が時々現地を観察し、昭和43年9月、土地所有者の承諾を得て第1次の発掘調査を実施し、第1、第2号住居跡を検出したのである。10月には、下堤遺跡の台地の他に、この周辺の台地も宅地化されるおそれがあるということから、周辺一帯を踏査し、その結果、昭和37年の時点での2遺跡しか確認されてないこの地域で約10カ所の遺跡が確認され、うち数カ所の遺跡は破壊の進んでいる所もあった。そこでわれわれは、これらの遺跡を将来、総合調査する必要があると判断し、最初に下堤遺跡を完掘することを第一の目標としたのである。そして昭和44年8月14日～20日まで第2次調査を実施した。この調査には、市内高校生、大学生等の援助があり第5号住居跡まで確認している。

第2節 第3次調査～第4次調査

第3次調査 昭和45年7月25日～31日

第4次調査 昭和46年8月14日～23日

第3次調査から、秋田市教育委員会が事業主体となり、秋田考古学協会と共に、調査を実施した。この調査では第10号住居跡まで確認し、吹上バターン的様相を示す廃棄のある住居跡、県内では初めての三角形土製品等が出土し、諸々の問題点を提示した。

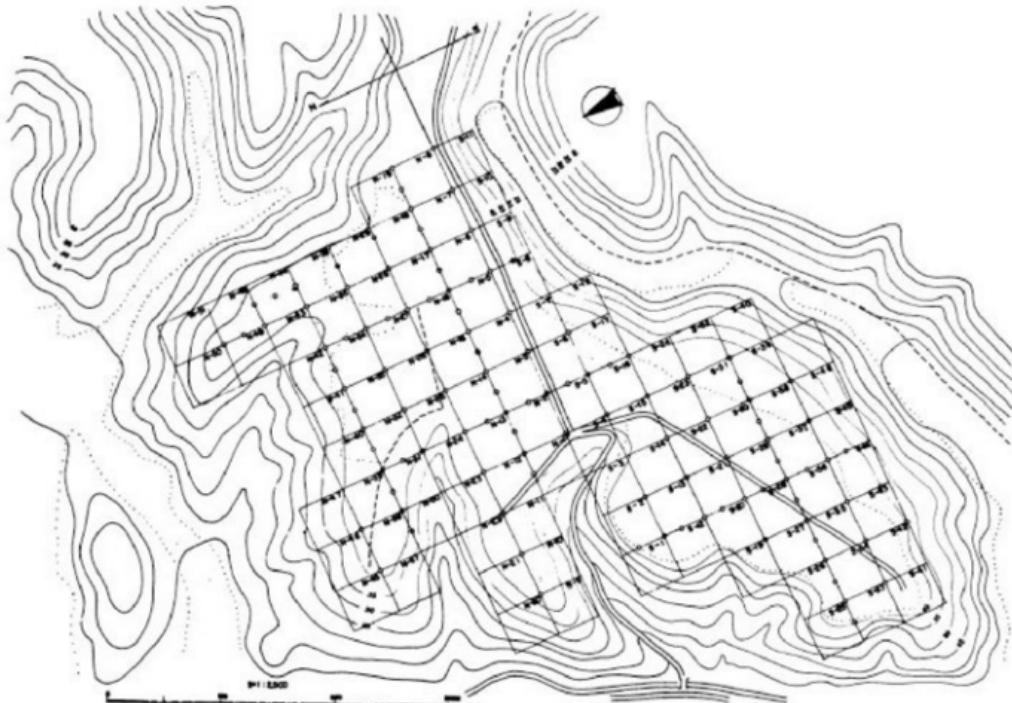
第4次調査は、連日の雨で悩まされた調査で、住居跡は第17号住居跡まで確認し、プラスコ状ビットも4カ所に増え、特に第13号住居跡内のプラスコ状ビットの約30cmの所からは、種子が約50粒ほど検出された。このビットは調査期間の関係で第5次調査で完掘することにした。

第3節 第5次調査～第6次調査

第5次調査 昭和47年7月23日～8月5日

第6次調査 昭和48年7月1日～31日

この調査から遺跡の土地所有者は東京の塙本総業株式会社に変わり、台地の開発計画が進められているとの事であった。われわれは、今まで下堤遺跡、完全発掘の方向を変え、これまで4年次に

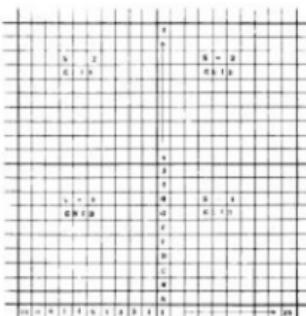


I-1図 グリッド設定図

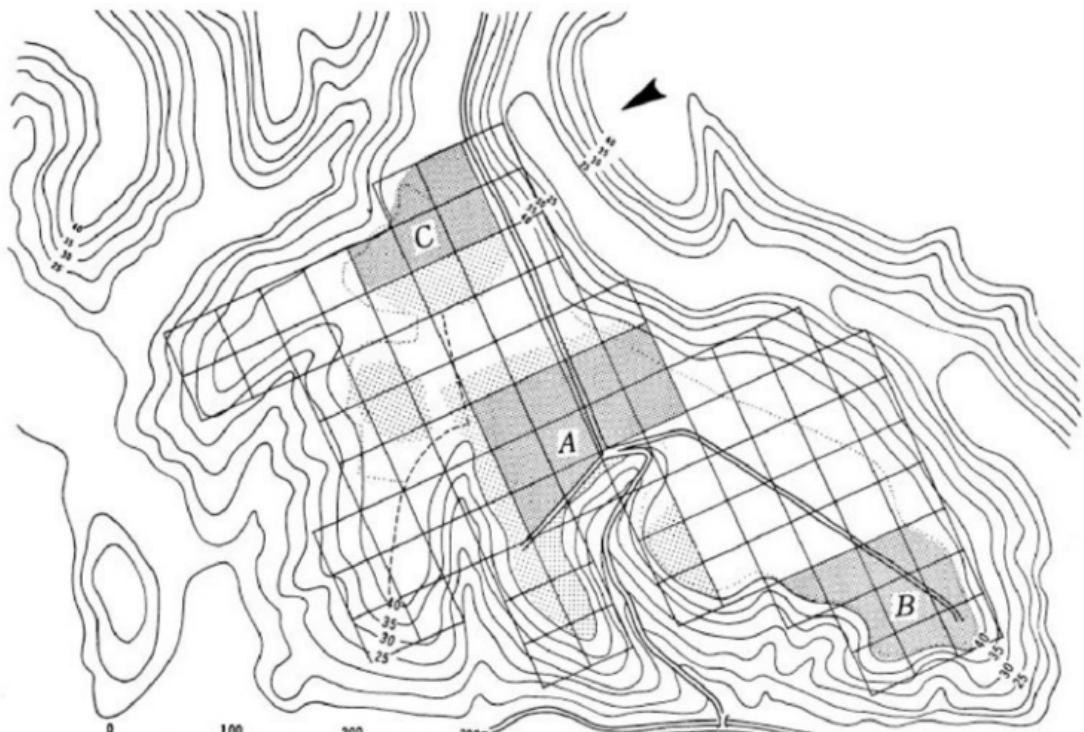
わたる調査をもとに、今年から、この約12haに及ぶ台地に存在する遺跡の範囲を確認する調査を実施することにした。台地全体に40m×40m（大グリッド）を設定し、今まで調査したグリッド、4m×4m（小グリッド）が、この調査のため設定した大グリッドに100個入るようにしたのである。基準は過去の調査の基点（国道から遺跡に向う東西に走る道路が、遺跡中心地で丁字になる。その北隅）とし、それを東西線の基準線として大きくS地区（南側）、N地区（北側）と分けて呼び、それぞれの地区で独立させて名称をつけた。

すなわち、S地区では大グリッドS 1～46まで、N地区ではN 1～51までである。（I-1図）これらの大グリッドの中に設けた小グリッドの呼び方は南北を1～10、東西をA～Jに分け、その組み合せで呼ぶこととした。例えばS 1 A 1と呼んだ場合、S 1 は大グリッドで、A 1 は小グリッドをあらわす。これらの小グリッドを全部発掘することは、この調査目的とかならずしも一致しないので、この発掘調査は小グリッドの東南隅2m×2mとし、それを完全に掘りあげ、遺構遺物の有無を確認し、その地層断面の実測と、遺構のあった場合その実測を行なうこととして調査をした。ただS地区、N地区、3カ所ずつ拡張区を設け住居跡、土壙等を確認した。それと、第4次調査で検出した、第13号住居跡内のフ拉斯コ状ビットの精査をし、7月25日に掘り始め、26日にビット内に温湿度計を入れて観察、29日に全国的に話題となつたタデ科植物の種子が出土し、31日には、この種子は発芽したのである。この調査で、下堤遺跡最初の土師住居跡、繩文時代中期末葉の住居跡が確認された。その結果、今まで下堤遺跡と呼んできた地区をA、中期末葉の住居跡が見つかった地区をB、古代の住居跡のある地区をCとし、これらを総称して下堤遺跡と呼ぶことにした。（I-3図）

第6次調査では、第1次～第4次調査と第5次調査の遺跡範囲確認を主体とした調査によって把握された、A・B・Cの各ブロックの台地における遺跡のあり方と保護対策をより明確化し、遺跡の範囲を具体化するため、各ブロックの予想される遺跡の外郭部端に、巾50cmのトレチを東西に合計8本、南北10本を入れ、遺構の確認を行なった。遺構の確認は、各トレチの中で発見された遺構を $\frac{1}{10}$ の図に詳細に記録していくもので、Aブロックについては巾15cmのトレチで確認している遺構を目安に、各トレチ間を50cm四方の間隔で1300m²の面積にわたりボーリング調査をし、その深浅で探索していくという仕方であるが、特に遺構の存在が予想される深い部分について、その方向がわかる所は、その方向をも示す記号↑↓を用いる方法をとった。その他、トレチとボーリング調査で探索した地区の中でAブロック3カ所、Bブロック1カ所を発掘し、住居跡、フ拉斯コ



I-2図 グリッドの名称



1-3図 遺跡分布図

状ピットを調査した。Cブロックについては、調査期間等の都合で調査できなかった。

第II章 遺跡の立地と環境



第1節 遺跡の位置

下堤遺跡は秋田市四ツ小屋小阿地字下堤にある。すなわち、秋田市から国道13号線を南下し、横山部落を過ぎると三叉路がある。そこから右の旧道に入り西へ1.2kmほど入ると、秋田市街地を一望できる舌状台地（末戸台）の先端に出る。本遺跡はこの台地の先端部にあり、奥羽本線四ツ小屋駅より北東約1km、秋田市中心部より東南約7kmに位置し（II-1図）。本遺跡の南約1.5kmには太平山に源を発する岩見川と奥羽山系に源を発する雄物川との合流点がある。合流点付近の仁井田、四ツ小屋等の集落から末戸台をながめると、かなり平坦な台地である。

この末戸台一帯は畑地として利用されているが、遺跡の位置する付近（下堤台地）は数年前から荳場と化し、不動産会社による開発計画が進められている。



第2節 自然的環境

(1) 岩見川流域の地形・地質概要

秋田平野南東部には標高60～150mの丘陵地が発達しており、これを挟んで北には太平山を中心とする1,000m前後の山地、南には河辺・由利両郡の境をなす300～400mの低い山地があり、段丘がこれらの丘陵を切って流れる雄物川とその支流岩見川沿いに分布している。雄物川沿いでは曲流

の内側に段丘がとびとびに分布しているが、一方、その支流岩見川沿いでは雄物川との合流点近くから内陸部の岩見三内にかけて、特に左岸に階段状に段丘がかなり連続的に分布している(II-2図)。秋田平野周辺では雄物川、岩見川沿い以外には、秋田市街地北東の手形付近から旭川上流沿いに若干の段丘がみられるのみで(II-3図)秋田平野の大部分は沖積低地で占められている。

岩見川流域は第3系の比較的緩い褶曲構造の地域に大部分が含まれ、末戸台周辺を除けば、和田北東の高岡付近を通る北西—南東方向の軸をもつ、いわゆる和田向斜盆地の中に入る。(II-4図)。向斜の中心部には、上部鮮新統鶴川層に対比される地層が分布し、西側に次第に古い地層が出て、岩相も砂岩から頁岩に移行する。一方、末戸台付近はほぼ南北方向の背斜部に当り、中部中新統女川層まで露出している。和田盆地から北東へ、太平山地に向って女川層などを経て下部中新統門前層まで出ており、太平山地の先第3系花崗岩に断層で接している。太平山地から南西流して来た岩見川はこれらの構造を横切って流れている。



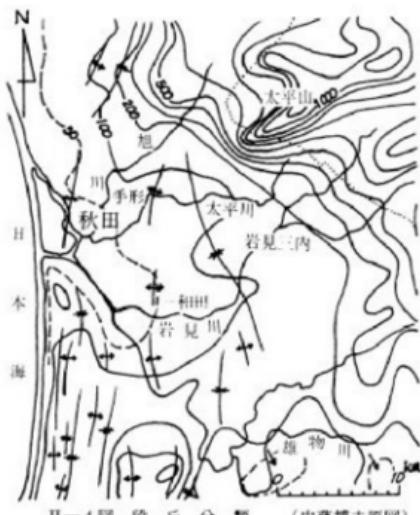
II-2図 堆物川下流部および岩見川沿岸の段丘面分布 (内藤博夫原図)

(2) 末戸台周辺の地形・地質

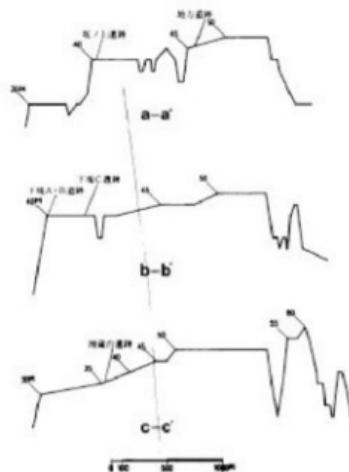
末戸台付近の地形を大別すると、和田丘陵と末戸台台地に分けられる。和田丘陵は平坦面をあまり持たない。しかし、定高性を持った標高60~150mのかなり開析を受けた老年期地形を示し、地



II-3図 手形山周辺の段丘面分布図
(内藤博夫原図)



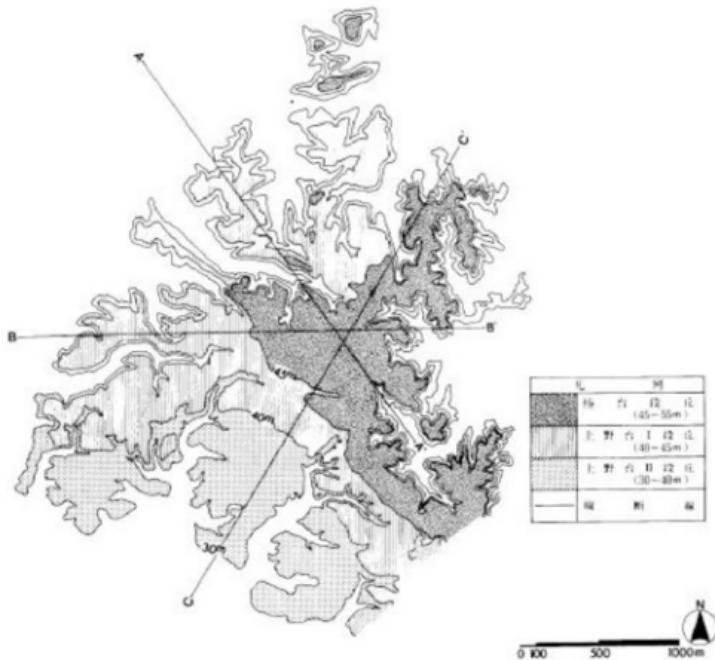
II-4図 段丘分類
(内藤博夫原図)
接平面と褶曲構造 点線は太平山周辺の花崗岩分布地域界。秋田県鉱務課(1957)による。



II-5図 地形断面

① 梯台段丘

岩見川右岸末戸台地では45~50m強の標高をもつ、いわゆる梯台面をその堆積面とする梯台層が、厚い疊(最



II-6図 段丘

大径10cm前後)・砂・粘土の互層で構成されている。ただ基底高度はわからない。岩相は最上部に1~2mの褐色の粘土質火山灰層があり、次に礫・砂・粘土の互層で、砂礫の部分ではしばしばクロス・ラミナ(斜交葉理)がみられ、砂土あるいはシルトは水平な細い層理をなすことが多い。層厚をみると、礫層はうすく、砂・粘土層が厚い。その下部は第3系の泥岩(船川層)や砂質シルト(笠岡層)となっている。

② 上野台段丘 I

末戸台台地で椿台段丘の南側に標高40m強でついている段丘が、上野台段丘 Iと呼ばれている。⁴⁾表層の1~2mの粘土質火山灰層を除くと、段丘堆積物は最大径20~30cmの礫を含む礫層であり、厚さは5m程度でその下部は第3系となっている。下堤遺跡は、この上野台段丘 Iに位置する。

③ 上野台段丘 II

末戸台台地では上野台段丘 Iとの比高が5m強である。段丘堆積物の岩相は上野台段丘 Iとはほぼ

同様で、層厚は5m前後である。内藤によれば、厚い礫層の下部は椿台層に当たるとしている。⁵⁾

④ 宝電崎段丘

末戸台地の北縁の宝電崎付近に分布し、他の段丘との関係を判然とさせる。標高20m前後である。段丘堆積物の厚さは約8mで上部1m前後は砂疊りシルト、以下は砂疊層で砂の多い部分と疊の多い部分とが層理をなす。疊は最大径15cm弱で上野台Ⅰ・Ⅱ段丘の段丘礫層に比べて小さい。基底には50cm以下の泥岩の塊が点在する。内藤によれば⁶⁾ 基盤は椿台層の砂層であり、不整合面はほぼ水平であるとしている。これに対比されうる段丘およびそれより若干低い段丘が雄物川沿いで発達がよい。

第3節 周辺の遺跡

(1) 小阿地古墳群

秋田市四ツ小屋小阿地字坂ノ下22

古墳発見の正確な日時は不明である。遺物の出土は、鉄道施設工事及び四ツ小屋駅敷地埋立工事の際、土取り作業中で、奥羽線、和田駅～秋田駅間の開通が明治36年、四ツ小屋駅の開業が大正6年8月であるから二度にわたっている。後者については、後藤守一氏の「東北地方に於ける奈良時代の一墳墓」(人類学雑誌 第13卷4号大正11年)に破壊後の状態が述べられている。「先年四ツ小屋停車場修築の為め、之を崩して土を運び去りしを以って、今は原形の大半を失へり、而して遺物は、その工事中に発見せられしものとす。取崩されし断崖についてその断面を見るに表面3、4尺ばかりの腐蝕土一帯に心土をなす粘土層を覆へり、取崩工事は、土工の手によって行なわれしを以て遺跡の殆んどすべては無意義に破壊し去られしも、武藤氏は當時実見せられことあり、幸い余の実査の際、その断崖の一部に遺跡の片影を示すものを看取すること得しを以て之を記さんに図に示す如く、上述せる表土が怪1尺5寸及至3尺、深さ3尺余の粘土層に穿てる豈穴を壊むを見る、而してその豈穴中の黒土を見るに木炭塊の所々に散在せるあり、縄文式土器残片亦夾雜せり(II-7図)……武藤氏は遺物の殆んどすべてが、この豈穴式遺跡より発見せらしものなることを教えられたなり」

出土遺物

八花鏡…径2寸3分 白銅製 …武藤一郎蔵内区双葉双草 外区魚子地雲形唐草文

明治7年10月、奈良興福寺金堂須弥壇下発見の八花鏡と全く同じもので、小阿地発見のものが稍佳品、又正倉院御物にこの種、鏡あり。

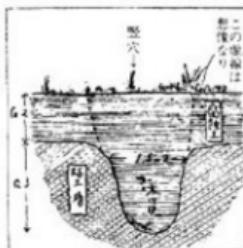
刀装具…柄頭、鞘尻、金具、鈔、…京都大学蔵

刀身…現在長1尺 基長4寸4分、…武藤一郎蔵

刀身…残片4個 …三浦久吉蔵

戰刀…全長2尺1寸6分、柄長4寸4分、…古四王神社蔵

鉄斧…2個、長径5寸、巾2寸5分、…武藤一郎蔵
 馬具…鉄製、轡残片 …武藤一郎蔵
 曲玉…白色石英製、長1寸1分 …武藤一郎蔵
 曲玉…白色石英製、長1寸2分 …武藤一郎蔵
 管玉…緑色蛇紋石製、長7分余、徑3分、…武藤一郎蔵
 管玉…緑色蛇紋石製、長6分余、徑2分6厘、…武藤一郎蔵
 管玉…黒色蛇紋石製、長8分、徑4分、…武藤一郎蔵
 丸玉…瑠璃色玻璃製、徑3分、…武藤一郎蔵
 土器…コップ形、高3寸2分、徑2寸5分、…武藤一郎蔵
 土器…糸底、高6寸、徑3寸8分5厘、…三浦久吉蔵

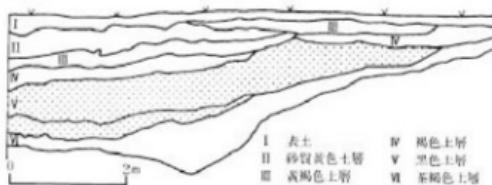


II-7図

(2) 小阿地23遺跡

秋田市四ツ小屋小阿地字坂ノ下23

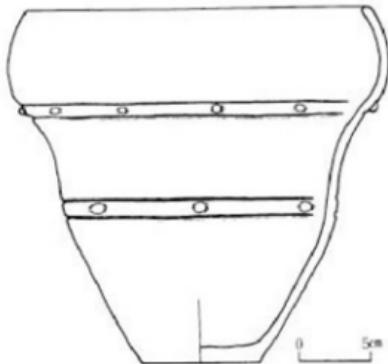
この遺跡は、もともと小阿地古墳群のあった台地上に所在したと考えられるが、鉄道建設のための土取り、戦後の宅地化で段丘の一部が削り取られ長い間に序々に破壊されていた。現在、数軒の家が建



II-8図

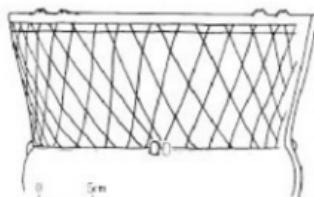
っており、家の建築の際にも厚い黒土層を削り、多量の遺物が出土したということである。

昭和43年9月、僅かに残っていた遺物包含地付近で、ショベルロードが動き回っているのを見発し、遺跡の破壊を確認した。新築するための土取りで、作業員に遺跡であることを話し、土地所有者に承諾を得て、9月27日～30日、10月5日～6日に調査を実施した。僅か30m²の調査に過ぎなかったが、第5層黒色土（II-8図）の中間、現地表面から1m50cmの部分から、かなりまとまった遺物が出土した。出土遺物は復元

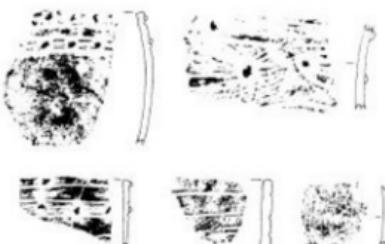


II-9図 図版2-1
可能な土器3個体、石器8点、その他土器片等で、時期は縄文時代後期の貼コブのある土器の時期

から晩期大洞C₁式の時期の土器を出土する。器種は深鉢、浅鉢、台付、注口、皿状土器である。石器は石錐、石錐、石匙、石棒（破片）砥石等が出土している。（II-9, 10, 11図）



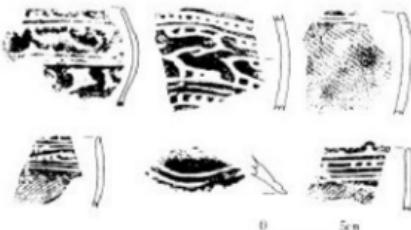
II-10図



(3) 地蔵台遺跡

秋田市四ツ小屋末戸松本字地蔵台

昭和44年、周辺遺跡踏査の際、発見された遺跡で、末戸松本部落の東側の堤の左手に位置する台地に所在し、この台地に登る山道の斜面に土器が発見された。ほぼ完形で発見されたこの土器（岡版2-2）は、口縁部は欠損しているが現在高約40cmで、胴部は單節斜織文が施され、口縁部は三段に



II-11図 小阿地23遺跡出土土器

沈線で区切り、その中に沈線で锯歯状文を描き、下部を磨消している。口縁は外反する彎である。土器内面下部に条痕が見られ、県内では志藤沢式に近いが、全体的に田舎館式に比定できる。他に石匙が一点出土し、台地上からはアメリカ型石錐が発見されている。

(4) 地方遺跡

秋田市上北手字地方

この遺跡は、御所野台を通る国道13号線の東側で、沢にのぞんだ舌状台地の先端に位置する。もともと畠地であったが、現在は荒地と化している。畠地であった頃は数多くの遺物を採集している。土器は縄文時代晩期大洞C₁, C₂を主体とし、石錐、石匙、石錐、磨製石斧、石製品（勾玉状石製品、子玉等）等が出た。（II-12図）

第4節 考古学的環境

秋田市南東部を流れる岩見川沿いの末戸台に形成された4つの段丘の発達過程を地史学的に明らかにし、さらにこれらの段丘上に立地した下堤遺跡等の立地環境の若干の考察を試論的に行なう。

(1) 段丘堆積物の特徴

前述の4つの段丘のうち、上野台Ⅰ・Ⅱ面では最大径30cm前後の亜円礫を主体とするほぼ一様な礫層をもつ。また、椿台面、宝竜崎面では礫・砂・粘土の互層で比較的細粒であり、垂直・水平方向に変化が大きい。ゆえに、上野台Ⅰ・Ⅱ面は明らかに河川堆積物で、厚さも加味すると、岩見川などによる河成の浸食段丘面と考えられる。これに対し、椿台面と宝竜崎面は上野台Ⅰ・Ⅱ面よりも運搬力の弱い環境下で堆積したことは明らかで、岩相を加味すると、浅海性ないし河口性堆積物と考えられる。(II-13, 14図)

また、宝竜崎面を除く椿台、上野台Ⅰ、Ⅱの各面をおおっている層厚1~2mのシルト分を含んだ粘土質火山灰層は、経済企画庁の土地分類基本調査⁷⁾、秋田県教育委員会の『八郎潟の研究』⁸⁾及び村山林などの研究調査をもとにすると、男鹿半島の寒風山が起源と一応考えられている。(II-15, 16図)

この粘土質火山灰層の表層細粒物質の風化状態をみていくと、椿台面、上野台Ⅰ・Ⅱ面では黒色土の下の細粒物質のうち、上部50~100cmが明褐色を呈し、下部は灰白色で、境は漸移する。また、土壤断面をみると、椿台、上野台Ⅰ・Ⅱ面をおおう土壤は、いわゆる高岡2統に属していると考えられ⁹⁾、比較的大きい円礫を混入して

いて、黒色土層を厚く堆積させていく。この層中には火山がラスを混入

しており、火山灰が関係しているものと推定される。椿台、上野台Ⅰ、Ⅱ段丘上で現在栽培されている特徴的な農作物をみると、大根、キャベツ、じゃがいも、豆類等であり、比較的酸性が強く塩基が少ない土壤に育つ農作物であり、火山灰の関係をうかがわせる。

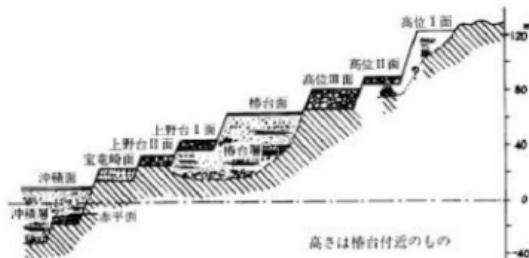


II-12図 地方遺跡出土土器



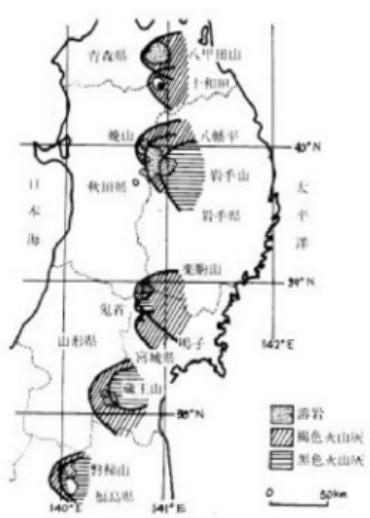
II-13図 岩見川沿いの段丘面縦断面図

(内藤博夫原図)



II-14図 段丘模式断面図

(内藤博夫原図)



II-15図 脊梁山脈上における火山灰の分布
(村山原図)

一方、宝亀崎面での表層細粒物質の風化状態をみると、灰白色に若干褐色を帯びることが多く、ところにより明褐色を呈する。土壤断面をみると、宝亀崎段丘は高岡1統系に近く、火山ガラスはほとんどみられず、雲母が比較的多い。しかし、有色鉱物は一般に少なく、石英・長石が主体をなし、火山灰の影響は認められない。(II-17回)

(2) 東戸台周辺の地形発達史

以上のような段丘面形成過程を、内藤¹³³⁾は相対的な海進海退と結びつけ、次のような地形発達史を考えている。

- ① 標高80m以下の谷が切られる。
 - ② 海進があり、この谷を埋めて礫・砂・粘土互層が堆積し、おそらく堆積面として岩見川左岸に高位Ⅰ面（高位段丘Ⅰの段丘面）(120m)が形成される。
 - ③ 海退があり、岩見川が伸び出し、下刻を行い、その間の若干の河床安定期に、岩見川左岸に



II-16図 東北地方の火山 (半沢正四郎「日本地方地質誌」による)



II-17図 東北地方における最多風向による流線図(10時)
(区内観測所資料により設案対原図)

高位II面(90m)、高位III面(80m)が形成される。さらに下刻が進み、椿台層基底の谷地形ができる。

④ 海進にうつり、溺れ谷を埋めて椿台層が堆積し、堆積面として椿台面が(岩見川左岸で60m、右岸の末戸台で45~50m)が形成される。

⑤ 再び海退が始り、岩見川の下刻がすみ、その間の河床定期的に上野台I面(岩見川左岸で45m、右岸の末戸台で40m)、上野台II面(35m)が形成される。若干の海進(ないし海退の停止)があり、宝竜崎面(20~25m)が形成される。さらに、海退がつづき、赤平面(-10m?)、沖積層基底の谷底(-30m、秋田市街地では-70m)ができる。

⑥ 海進にうつり、溺れ谷を埋めて沖積層が堆積し、堆積面として沖積面が形成される。
さらに、内藤は太平洋沿岸各地に発達する段丘について、その性質から、各地に共通にI~V面の5段に分けられるとした中川の段丘類型を岩見川沿いの段丘にあてはめた。すなわち、赤平面³⁴⁾、上野台II面、上野台I面が中川の氷期に形成されたより勾配の大きい河成面であるII面とし、椿台面がリス・ヴェルム間氷期に形成されたIII面とし、高位III面、高位II面がIV面に(氷期に形成された河成面)あたるとし、やや疑問があるが高位I面がV面(ミンデル・リス間氷期に形成された面)³⁵⁾に該当させている。ただし、宝竜崎面だけははみ出るとしている。

下堤遺跡の立地環境を考える上で、特記すべきことは、内藤が椿台面を関東の下木吉面に対比させていることである。

第5節 結　　び

下堤遺跡は、舌状台地である末戸台地の先端部に立地しており、縄文中期の集落が通例立地している場所である。この場所は河岸段丘上の広い平坦面であり、段丘崖下には必ず日照りにも枯れることのない清涼豊富な湧泉があり、当時の人々は砂礫層から湧き出す泉を利用していたと考えられる。

末戸台地上には有史から縄文までの遺跡が立地しており、この台地上が古くから重要な生活空

間として利用してきたことは“土地に刻まれた歴史”として今に残されていることで容易に理解できる。

参考文献

- 1) 経済企画庁土地分類企画調査「秋田」 1966
- 2) 内藤博夫 「秋田県岩見川流域およびその周辺の段丘について」 第4紀研究第4巻第1号 1965
- 3) 1)に同じ
- 4) 2)に同じ
- 5) 2)に同じ
- 6) 2)に同じ
- 7) 1)に同じ
- 8) 秋田県教育委員会 「八郎潟の研究」 1965

寒風山噴火史の推定

須恵・土師時代小噴火(?)
統繩文・弥生時代大噴火降灰・溶岩流出
縄文晚期 後期1~2回噴火
中期	
前期噴火降灰
早期	
潟西層噴火(?)
潟西層 以前(?)

八郎潟の研究 S40 (秋田県教育委員会)

- 9) 村山 馨 「火山活動と地形」 大明堂
- 10) 林 宏 「秋田県男鹿半島一の日潟周辺の火山拠出物について」 地質学雑誌第61巻第217号 1955
- 11) 1)に同じ
- 12) 1)に同じ
- 13) 2)に同じ
- 14) 中川久夫 「本邦太平洋沿岸地方における海水準静的変化と第四紀編年」 東北大地古生邦報 54 1961
- 15) 2)に同じ
- 16) 2)に同じ

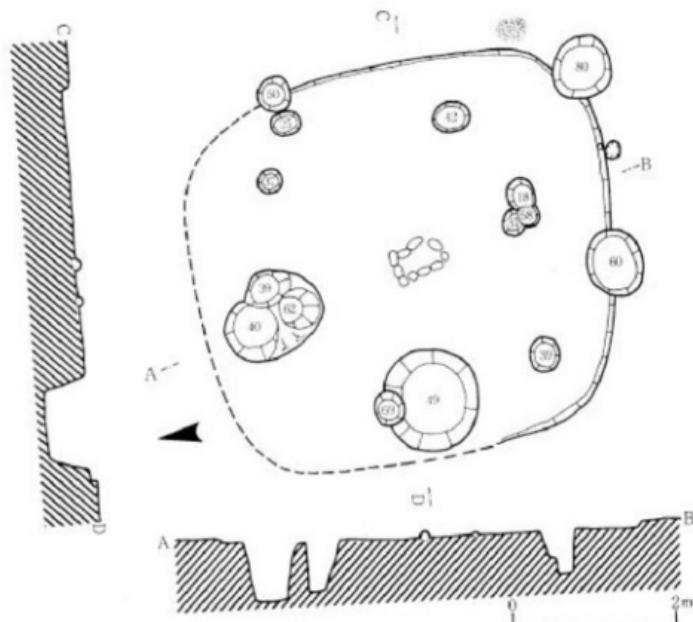
第三章 下堤遺跡 A 地区

第1節 A 地区の概観

この地区は、縄文時代中期中葉の遺跡で、出土土器の型式は大木7b式～8b式および円筒上唇b式～c式に比定される地区である。その範囲は、N 1, 2, 3, 12, 13, 14, 23, 24, 25, S 5, 6, 16, 17の13大グリッドに及ぶ、南北約200m、東西約120mほどの範囲で、B, C 地区に比べ広範囲に分布する。西および北側にかけ四つの突出する舌状部をもつ台地が東から西にのびている。ほぼ、その中央部の見晴らしの良い地区である。住居跡22軒、土壙(フラスコ状ビット等)七つ確認し、住居跡プランの多様性、東西南北線に沿った住居の動き(新旧関係)、住居廃棄のあり方等、フラスコ状ビットの機能など多くの問題点をかかえた地区でもある。

第2節 住居跡と出土遺物

第1号住居跡 (III-1図)



III-1図 第1号住居跡

第1号住居跡は前述したように、秋大生等が踏査した際、発見したもので、調査区で言うと1B、1C、2B、2Cにわたるものである。プランは隅丸方形か台形のものと推定される。というのは1C、1Bグリッドの住居跡の南、東の壁はわかるが、北側半分の壁がはっきりしないためである。大きさは南北約5.08m、東西4.7mと推定される。床面は炉の付近は、かなりしっかりしているが、壁に近づくにしたがってはっきりしない。また柱穴は炉を中心にはば等間隔にあり、6本の柱があったと考えられる。その他、住居跡内の北西壁に近い所にある大きな穴からは遺物が多量出土した、この穴は柱穴以外の働きをもつものであろう。また東南隅と南壁にある穴はこの住居跡より新しいもので、他のどの造構と結びつかず、はっきりしない。炉は石開いのもので、この中に焼土は殆んどない。

出土遺物

土器 (III-2図)

9はほぼ完形の楕円形土器で、胴上部に外面から穴が二つ穿たれ、反対側にも対称的に2穴がある。器面は磨かれて無文で、胎土、焼成は良好で黄灰色である。

1、4は口縁部に撚糸圧痕が施されている。2は口縁部に波状に粘土紐をつけ刻目を施してある。3、5は深鉢形土器の口縁部、胴部で纏文はR L。6、7は円筒上層式土器の頸部で、7は粘土紐の間に「C」字状の撚糸圧痕がある。8はいわゆる北陸系土器である。

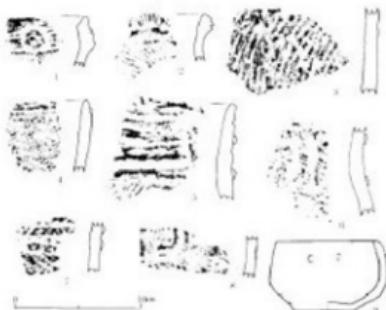
第2号住居跡 (III-3図)

第2号住居跡は第1号住居跡の北側に発見されたもので、調査区で言うと3Bを中心に2B、3C、4Bグリッドにあたる。この住居跡のプランは壁がはっきりせず不明であるが、不整円形と思われる。西南方向に入口施設と思われる遺構が認められた。それは壁で段がつかず、スロープ状になつて床面に連続している。炉は3Bグリッドの南側にあるものと思われる。土器が2個埋められていて、焼土が非常に厚いものである。その他2カ所に焼土があるが、これは住居跡が複合していて、その点とも考えられるがはっきりしない。また、2Bグリッドの穴のすぐ東に土器が立てて埋められていた。

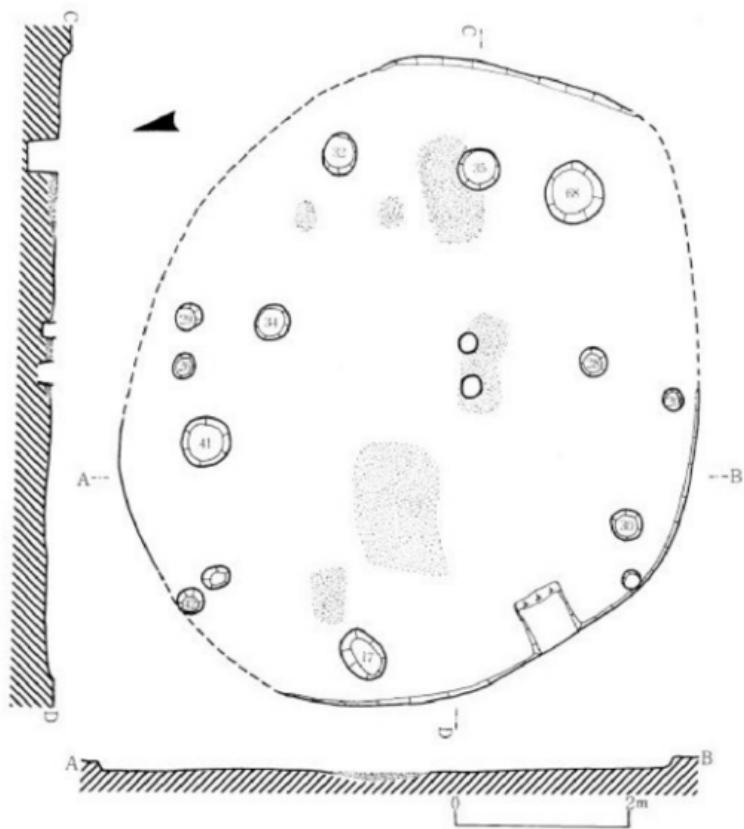
出土遺物

土器 (III-4図)

1は2条の撚糸圧痕が口縁部に施された深鉢形土器である。2は3条の撚糸圧痕が口縁部にめぐ



III-2図 第1号住居跡出土遺物



III-3図 第2号住居跡

り、下位の撫糸圧痕は「Y」状をなしている。3は小形浅鉢形土器口縁部で撫糸圧痕による満巻文がみられる。4は深鉢形土器脛部で結束のあるRLの縦文である。

第3号住居跡（III-7図）

第3号住居跡の発見された場所は調査グリッドで言うと6B, 6C, 7Cグリッドで、東側は第4号住居跡で、また、西側は第5号住居跡によって切られていて、その全体を明らかにすることはできない。床面は発見されたどの住居跡よりもしっかりとしており、7Cグリッドで発見された穴はこの住居跡の柱穴と思われる。また、この柱穴に接して土器が発見された。この柱穴の近くに埴土

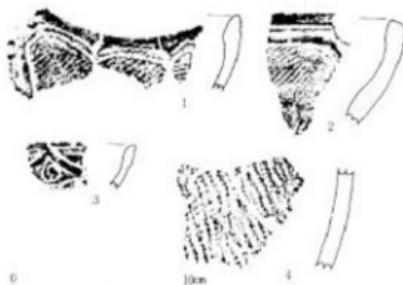
があるが、これはこの住居跡の炉とは考えられない。

出土遺物

土器 (III-5, 6図)

器高47cmで口縁は外反し、四つの弁状把手をもつキャリバー形の深鉢形土器で口唇部に粘土紐を貼りつけ刻みを入れてある。

口縁部の隆帯文は粘土紐を貼りつけ、隆帯に沿って撚糸压痕が施され、頭部までの地文はLRの單筋斜繩文で、胴部もLRの單筋斜繩文である。1は口縁部で一条の撚糸压痕がめぐっている。2は口縁部に二条の平行沈線を施し、その間に多截竹管状の工具で右方向へ刺突している。3, 4は深鉢形土器脇部である。



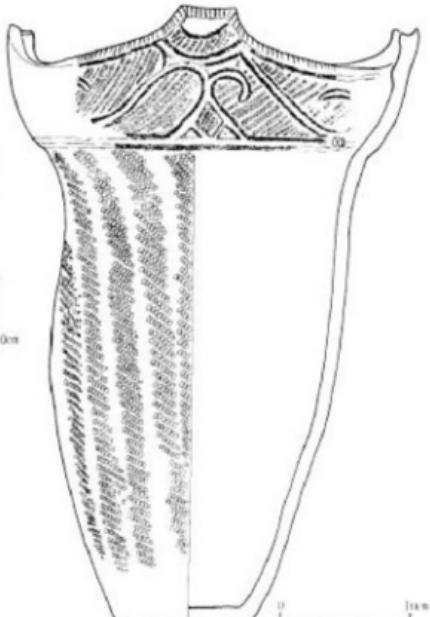
III-4図 第2号住居跡出土遺物



III-6図 第3号住居跡出土遺物

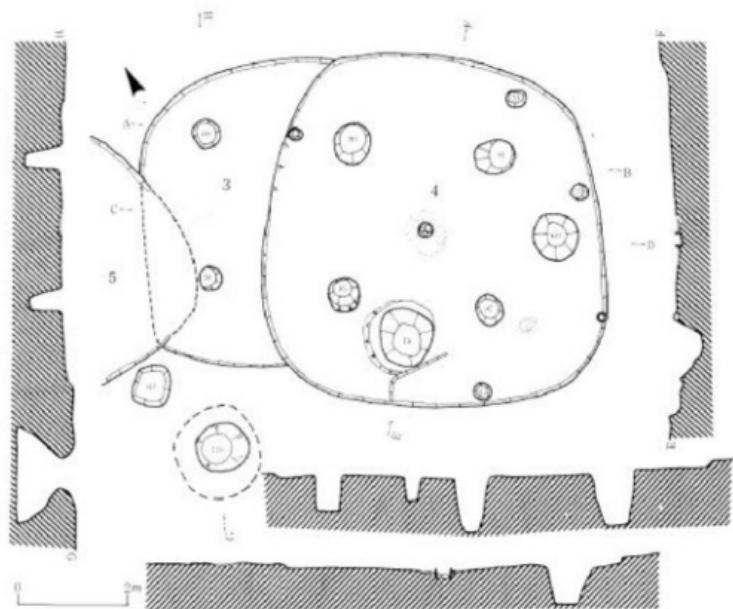
第4号住居跡 (III-7図)

第4号住居跡は、第3号住居跡の東に発見されたもので、調査グリッドで言うと5C, 5D, 6C, 6D, 7C, 7Dグリッドにわたるかなり大きな住居跡である。また、もっとも完全な形で残っていた住居跡である。中心には炉があり、中に土器が埋められていた。床面は住居跡内の西側がかなりしっかりしているのに反し東側はやわらかいものであった。柱穴は4本で、柱穴の他に住居跡内にいくつかの穴があり、その



III-5図 第3号住居跡出土遺物

一つには壁に沿って3個の小さい穴がある。これは浅いもので、少し内側に傾斜のついたもので支柱穴ではないかと思われる。また、他の一つは東壁と南壁に近い所に柱穴と思われない大きな穴があるが、中から特別注目するような遺物は出土しなかった。柱穴とは異なった用途のものである。特に南側の穴の周囲が少し盛り上っていたことは注目してよいであろう。

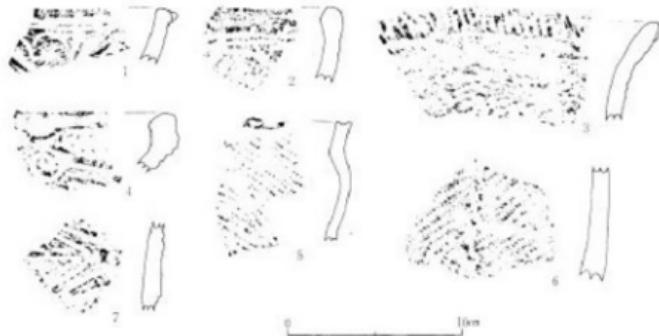


III-7図 第3・4・5号住居跡

出土遺物

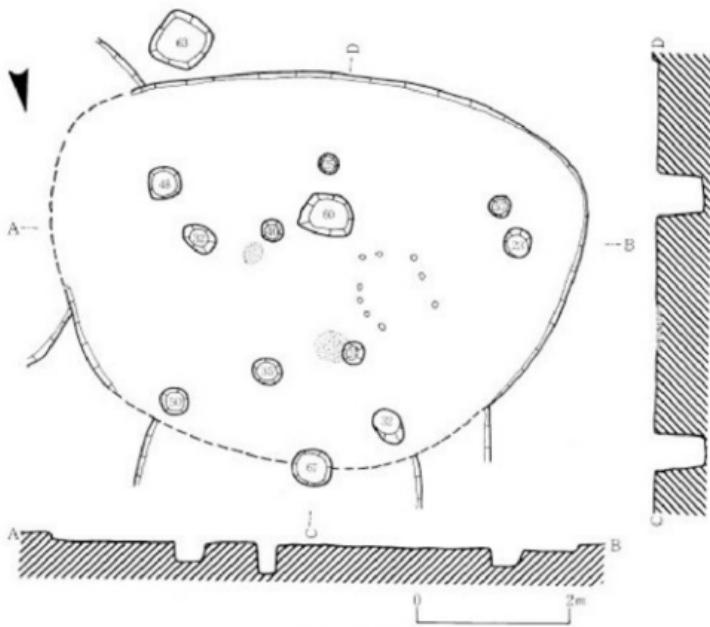
土器 (III-8図1~8)

1, 2は口縁部で粘土紐の貼りつけと二条の撫糸圧痕をめぐらし、その下の撫糸圧痕は「Y」状に施文されている。3は口縁が外反する深鉢形土器の口縁部で口縁部に太い粘土紐による隆帯をめぐらし、撫糸圧痕による刻みがある。4は浅鉢形土器の口縁部で横円形に区画された中に半截竹管による連続刺突文があり、下に渦巻文をもつ沈線がある。5はLRの単節斜纏文が施文された深鉢形土器の口縁部である。7は頸部で沈線で区画され、その集結部に隆部をつくっている。6はRLの単節斜纏文を地文とし綾格文が施されている深鉢形土器の胴部である。



III-8図 第4号住居跡出土遺物

第5号住居跡 (III-9図)



III-9図 第5号住居跡

第5号住居跡は第3号住居跡の西に発見されたもので、調査グリッドで言うと6B, 6A, 7A, 7Bグリッドである。

若干、西南部が張り出している不定形な、南北5.7m、東西6.3mを測る台形状のプランを呈し、その炉跡はほぼ円形の厚い焼土が見られた。柱穴はこの住居跡の北部に近接して構築されている第8、第9号住居跡との関連から不明瞭である。ただ、この住居跡も後述する第7号住居跡、第2号住居跡と同様に2本の主柱と、それを支える支柱とで構築されていたものと推定するのが妥当であろう。

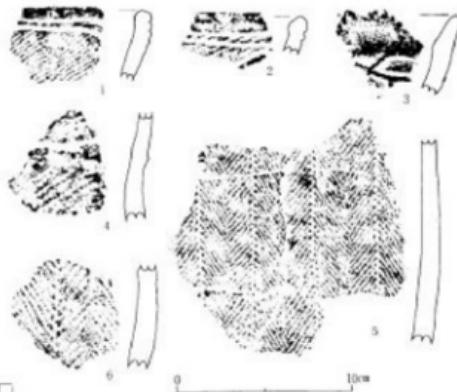
出土遺物

土器（III-10図1～6）

1, 2, 3は口縁部に撚糸圧痕文、粘土縫による隆帯があるもので、5, 6は深鉢形土器の脇部で地文は擬挺の羽状縹文である。

第6号住居跡（III-11図）

第6号住居跡は第1号の北西、第2号の西南部に位置し、調査グリッドは2Aを中心にして1A, 3A, 1F, 2Fの5グリッドにまたがる住居跡で、北部の周



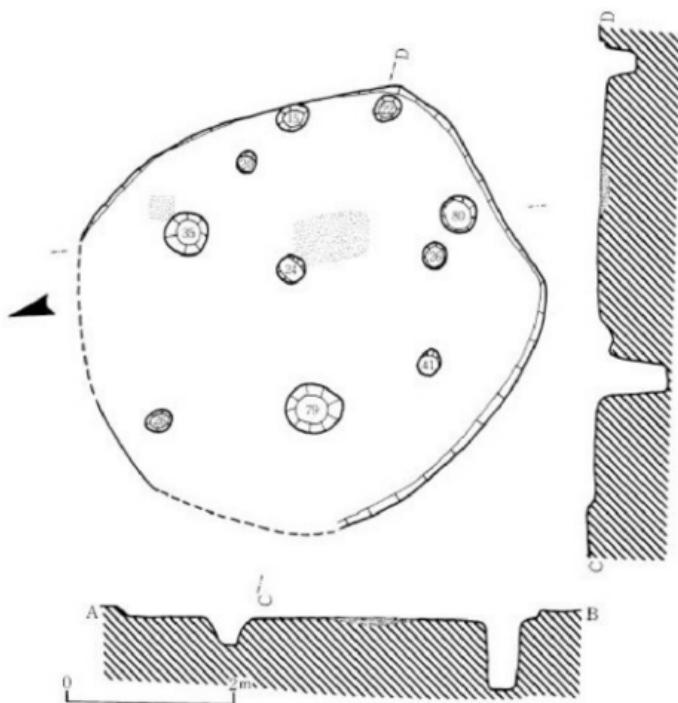
III-10図 第5号住居跡出土遺物

壁が約4mにわたって不明瞭であるが、これは長年に渡るこの台地の客土作業のため極端に深掘りされ、土を持ち去られた人為的被害のためである。しかし、残り三つのコーナーは幸いにも残存しているため推定ではあるが、南北5.8m、東西4.9mの若干、小規模でやや方形に近いプランを呈するものである。炉跡は2Aのはば中間に55×10mの長方形から成る焼土のみによって構成されているが、住居跡全体から考察すればやや東よりの中心部となっている。床面は良好で比較的硬く、柱穴は深さが異なる主柱穴が三つ検出されたにとどまり、その他、小柱穴が東部に密集中して存在している。したがって、4本柱の住居跡とは考えられない。しかし、これと前述した被害の点を考慮に入れれば断定することは困難である。

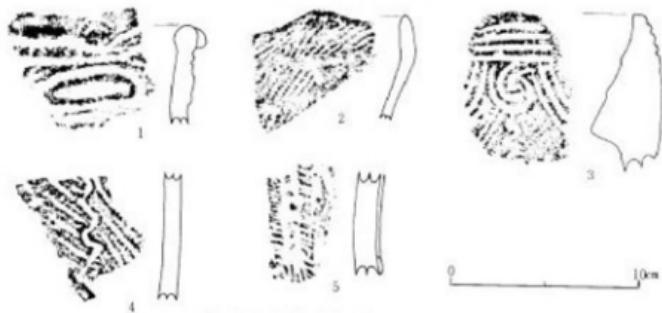
出土遺物

土器（III-12図1～5）

1は口唇部に隆帯をつくり下に二条の撚糸圧痕を施し、口縁部は稍円形に区画された隆帯の周に撚糸圧痕を施している。2は山形の突起をもつ、やや内反する口縁部でR.Lの単節斜縹文を施している。3は深鉢形土器の弁状把手で四条の平行沈線が横位に、三条の沈線が「八」字状に走り中



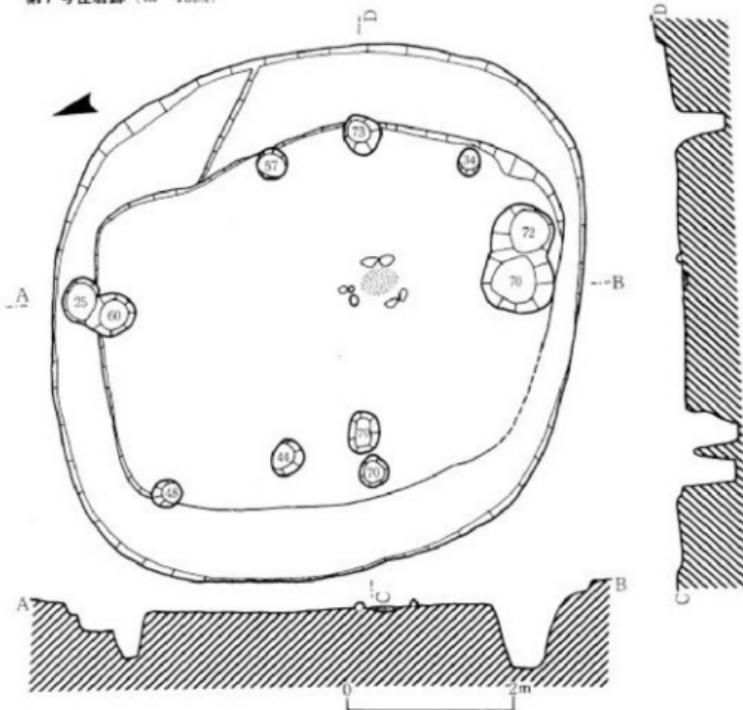
III-11図 第6号住居跡



III-12図 第6号住居跡出土遺物

に二重の沈線による渦巻文があり、渦巻文から垂下する波状の沈線がある。4はL Rの単節斜縞文を地文とする頭部で、波状の沈線文が垂下している。5は円筒上層b式土器の頭部と思われる。

第7号住居跡 (III-13図)



III-13図 第7号住居跡

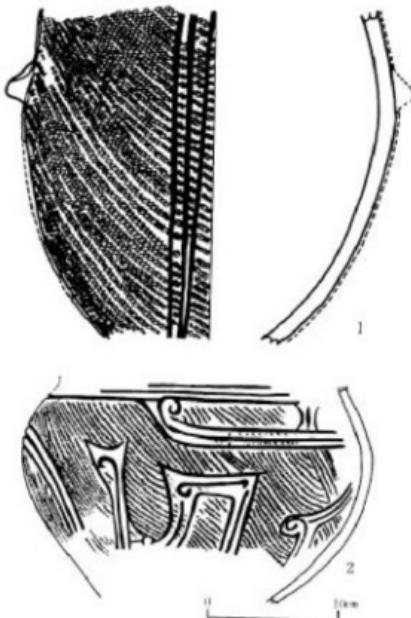
この住居跡は、第2号住居跡と第5号住居跡との間に構築されたもので5Aグリッドを中心にして4A, 6A, 4F, 5F, 6Fと5Bグリッドの西側一部の広範囲に渡る住居跡で、これまで確認した本遺跡で最も深い地点に存在し(地表下65~70cm)、その断面は鍋底状を呈して、柱穴の有り方等にも明らかに特色を持っている。つまり、南北、東西とも6.2mの隅丸方形のプランの中に、その壁面より60~90cmを測る地点に南北5.2m、東西4.4mの不整形なるプランを示す輪郭部がある点が第2の特質である。すなわち、拡張もしくは縮少作業の過程を経たところの二段住居跡としての意味あいが強い住居である。次に石團炉であり、その中心には小形壺、浅鉢狀の土器が2個埋設されており、同住居跡が最初で(5個の川原石によって構成、80×60cmの範囲、焼土の厚さ6cm)、この

ことは第1号住居跡の石囲炉(焼土、土器埋設なし)とは、根本的に異なる性格を持っている。第4の特質は、柱穴の位置する場所で、すなわち、南北に比較的大きな柱穴を有し東西には略々等間隔に3~4本の支柱的穴を設けて屋根の架設をしたと判断できることで、つまり現在の民家における切妻系統の架設方法が考えられる。

出土遺物

土器(III-14図1~2、III-15図1~6)

III-14図1、2とも第7号住居跡の炉跡に並んで出土した土器で1はL Rの縦文に4単位、三条の沈線が垂下し、沈線間に二条の粘土紐を貼りついている。向いあう二つの隆帯文は途中で粘土紐が渦巻文をつくり突出する。2は口縁部はないが、やはり口の開く小形の壺に近い土器で、沈線による文様表出が行なわれ、いわゆる刺先状渦巻文が施文されている。器厚は4mm程度である。III-15図1、2は沈線と粘土紐の貼りつけで施文され、1はキャリバ一形の土器で磨消しがみられる。3は



III-14図 第7号住居跡出土遺物

粘土紐貼りつけによる。4は沈線による渦巻文、刺先状渦巻文が施文されている。5は深鉢形土器の脇部で6は粘土紐貼文の間を磨消している。大木8b期に比定される。

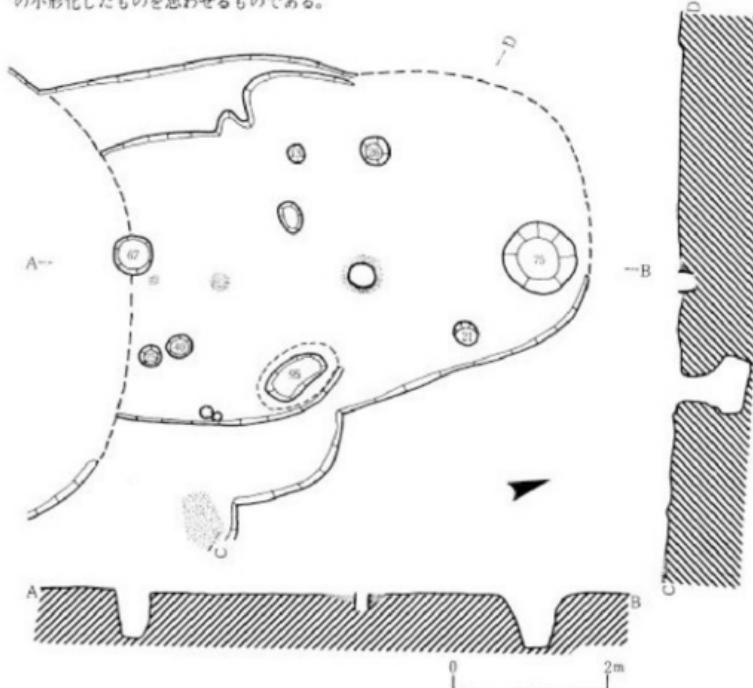
第8号住居跡(III-16図)

第5号住居跡の北側に位置するこの住居跡は、7A、7B、8A、8Bグリッドに渡っての南北4.9m、東西4.4mの隅丸方形を呈する。第5号との新旧関係は第8号住居跡が前者を切っている点が明瞭であるため、第5



III-15図 第7号住居跡出土遺物

号が古いことになる。炉は7Bグリッドの西側と7Aグリッドの東側とに、いずれも20~30cm程度の円状を呈するものが3カ所ある。北東隅には70×35cmの長方形のピットがあり、粘土と小礫がぎっしり埋設されていたことは特別の理由があったためだろうか。(第7号住居跡南端のピットと同様)しかも、その断面はラスコ状の様相を示し、5Bグリッド東隅に設置していたラスコ状ピットの小形化したものと思わせるものである。

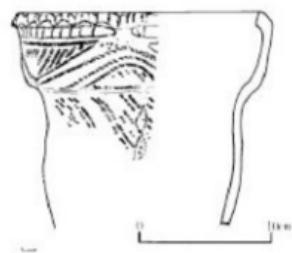


III-16図 第8・9号住居跡

出土遺物

土器(III-17図, III-18図1)

底部は欠損しているが、キャリバー形の深鉢形土器で口唇部に粘土紐を波状に貼り、撚糸圧痕で割みを入れ、その下に二条の撚糸圧痕を施し、間に「C」字状の撚糸圧痕があり、四条の撚糸圧痕と一条の隆帯で四単位の波状文がある。口縁部はR L、胴部はL Rの単節斜纏文で鎖状の撚糸圧痕文がみ



III-17図 第8号住居跡出土遺物

られる。III-18図1はキャリバー形の深鉢形土器口縁部で、沈線による四単位の渦巻文が配されている。

第9号住居跡（III-16図）

この住居跡の調査グリッドは7A, 7B, 8A, 8Bに渡り、いわば第8号住居跡の外側に存在する住居跡である。第8号住居跡との新旧関係は同住居跡の北部周壁の付近にこの第9号住居跡の炉跡（50cmのほぼ円形の焼土中に直径25cmを測る大形土器が埋設されている）が位置している点から第8号住居跡の方が古いと考えられる。したがって第5, 8, 9号住居跡の新旧は第5号→8→9号住居跡へと変遷したものである。また、

この付近に連続してある第3号を中心とする5軒の住居跡は9→8→5→4→3号住居跡の順で次第に古くなるわけであるが、特に第8号と第9号との柱穴の問題はひとつの柱穴を両者が使用していたと考えられ一概に決定的な所属柱穴は判断しかねるものである。このことは別の観点から言えば前述した5軒の住居における移動変遷が、かなり短期間に行なわれたことが考えられる。なお、この調査グリッドの第2層（黒色土層）～第3層（黄褐色土層）にかけて小礫が多く含まれている点から、ある意圖のうえで家屋遺棄が行なわれたものと解釈することが可能である。

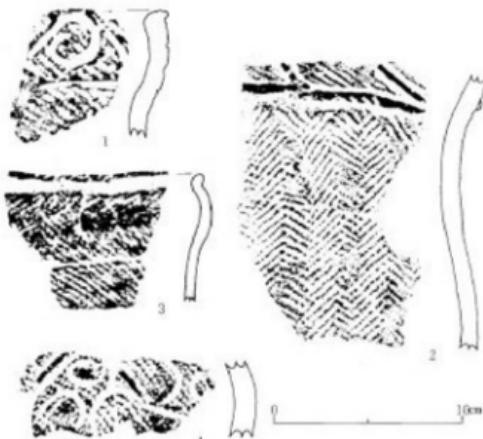
出土遺物

土器（III-18図2, III-19図）

2は深鉢形土器で胴部は結束のない縫合の羽状縞文である。III-19図は浅鉢形土器で、口縁部は長楕円形の区画で撲糸圧痕を施し、胴部には垂下と横にひらく撲糸圧痕が交互に施されている。

第10号住居跡（III-20図）

この住居跡の調査グリッドは、7A, 7F, 8A, 8F, 9A, 9Fグリッドで南北6.6m, 東西4.5mの階円形プランを呈する住居跡である。炉は埋甕炉2, 石圓炉1の計3カ所あり、住居跡中央部に焼土が分布しており、約

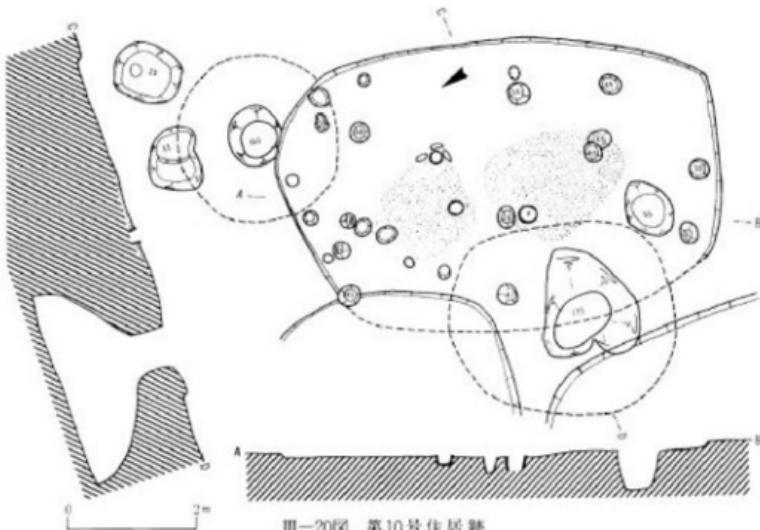


III-18図 第8・9・10号住居跡出土遺物



III-19図 第9号住居跡出土遺物

半分の面積にわたって焼土が床面に縦横している点から、かなりの長期にわたる家屋存続を成した住居跡でなかっただろうか。柱穴は間壁に沿って8本であり、南西に深さ55cmの大ピットがありまた、北部と南西周壁付近に入口をもつフ拉斯コ状ピットと二つの大ピットは第10号を始め第11、第15号とかなり有機的性格をもつ遺構であろう。前者遺構の口縁周間に若干の盛り上りと、第10号西側床面の凸凹の激しさと軟弱さとから考えれば、第10、第11号住居跡構築後に設置されたものと考えていいであろう。本住居跡は第13号住居跡によって切られているため、両者間ではこの第10号住居跡の方が古いことは言うまでもない。



出土遺物

土器 (図-18図3~4)

3は小形のキャリバー形土器の口縁部である。4は深鉢形土器の胴部で粘土縁と撫糸圧痕文である。大木B期に比定される。

第11号住居跡（図-23図）

第11、14、17号住居跡の一群中、最も新しい住居であることは第14号を切って（第14号より約4～5cm深い）ことから明らかである。7F、7G、8F、8Gグリッド内にあるこの隅丸方形のプランを呈する住居跡は南北6.9m、東西5.3mの規模で、第14号住居跡と南西隅で接触している部分を除けば壁はローム層を10～15cm切り込んで良好な状態である。炉は9個の小碑で構成されている石圓炉で、柱穴は第14号と併用しており8本で、床面は硬く良好であった。

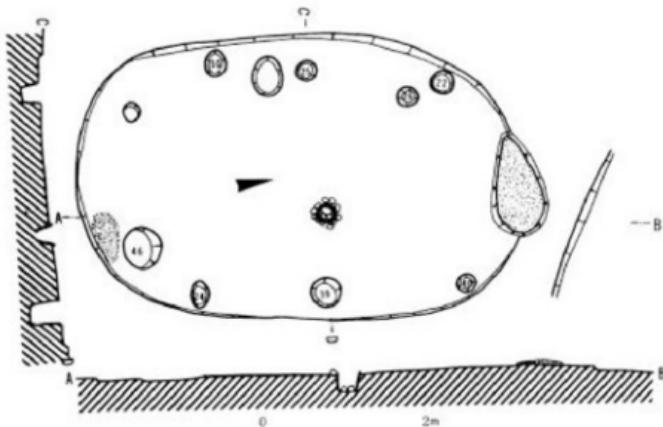
出土遺物

土器 (III-24図, III-25図1~8)

1は口縁部に四条の撫糸圧痕のある深鉢形土器で、地文はRLの単節斜繩文。2はキャリバー形の深鉢形土器の口縁部で粘土紐貼りつけによる刺先状の文様を施している。3は外反する口縁をもつ深鉢形土器で一条の粘土紐をめぐらし、頸部は無文である。4はキャリバー形土器で沈線による区画がされている。5は口縁部に二条の平行沈線間に連続する刺突文があり、下の隆帯に刻みを入れている。6は口縁が内反する深鉢形土器で、口唇部に「U」字状の粘土紐を貼りつけている。地文はRLの繩文である。7は深鉢形土器の胴部で8は円筒上層C式の土器で多截竹管状の工具による刺突が施文されている。

第12号住居跡 (III-21図)

地表下約15~20cm前後のローム層上にある黒色土層より発見された住居跡であるにもかかわらず比較的周壁の明確な楕円形(小刺形)のプランを呈している。中央に11個の小礫を円状に配した石圓炉をもち、南北5.6m、東西3.5mの規模の住居跡である。柱穴は東西に25~40cmの深さをもつ6本と判断され、北周壁部にある焼土(130×70cm)は床面より高い状態であった。



III-21図 第12号住居跡

出土遺物

土器 (III-22図1~3)

1は浅鉢形土器口縁部で粘土貼りつけによる突出がある。2は「く」字状に外反する深鉢形土器の口縁部で口唇部に粘土紐を波状に貼り、撫糸圧痕の刻みを入れ、くびれの部分と隆帯文の間に竹管

の刺突文がめぐらしている。

第13号住居跡（III-26図）

第10号住居跡北西部を切って第11号住居跡北部に位置しているこの住居跡は、8F, 8G, 9F, 9Gグリッド内にあり南北4m, 東西4.9mのやや不整形な隅丸方形のプランを呈する。川原石10個を使用したコの字型石圍炉は北を焚口とし、家屋廃棄時に炉中に埋設していた土器を抜き取った形跡がみられた。また、炉の西側に約10~20cm前後的小ピットが南北方向に配列している状態から、この住居を2分する間切り的施設の存在を考えてしつかえないであろう。さらに北部にフ拉斯コ状ピットが確認されている。

出土遺物

土器（III-27図, III-28図1~4）

1は深鉢形 □

土器の胴部で

二条の粘土紐

の貼りつけに

よる文様構成

である。2, 3,

4は二, 三条

の沈線で幾何

学的に区画さ

れている。

第14号住居跡（III-23図）

7H, 7G,

8H, 8Gグ

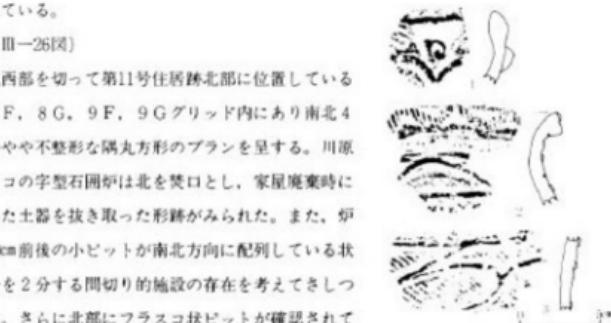
リッド内にあ

り、第17号住

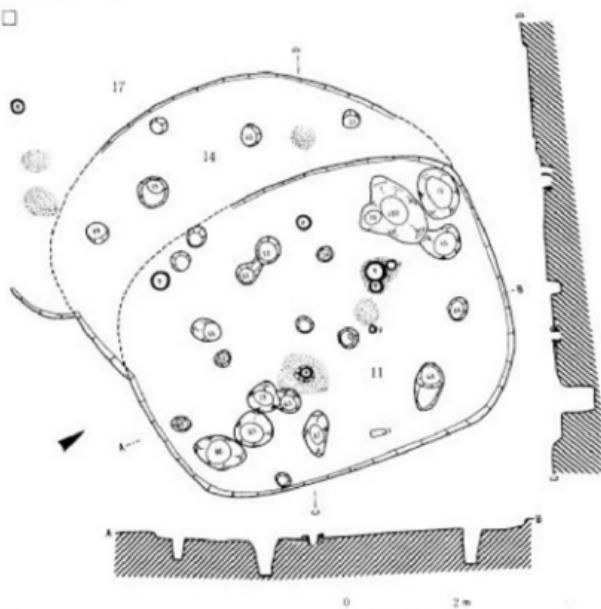
居跡を切り、

構築された隅

丸方形のプランを呈する。

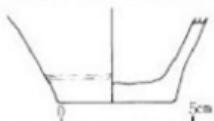


III-22図 第12号住居跡出土
遺物



III-23図 第11, 14, 17号住居跡

その規模は南北 6.9m、東西 6.0m で、炉は北西部の焼土と第11号住居跡内の北寄りにある埋甕がとの併用であり、付近にある大きいピットもこの住居の貯蔵用施設として利用したものであろう。柱穴は50cm前後の深さを測る 6 本と考えられる。

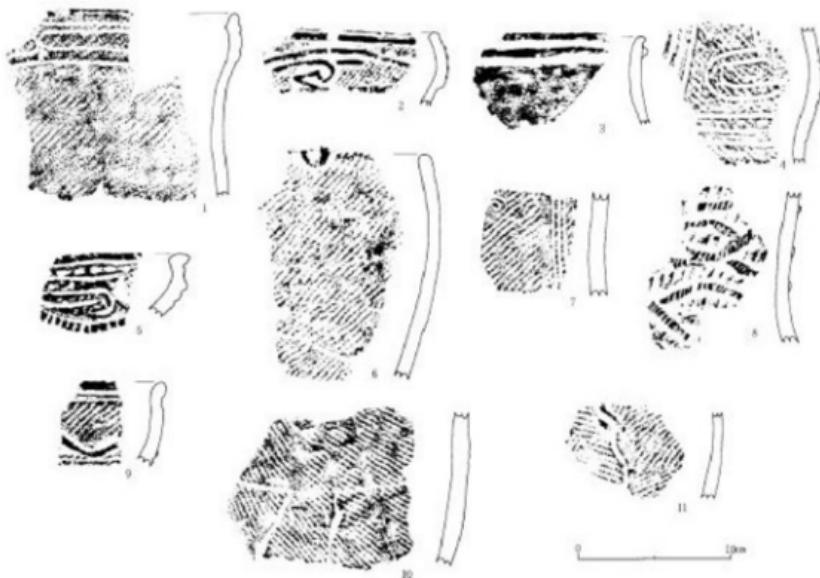


III-24図 第11号住居跡出土遺物

出土遺物

土器 (III-25図 9~11)

9はキャリバー形土器の口縁部である。10は深体形土器の肩部で L.R の単節斜繩文である。11は沈線による懸垂文が肩部に施文されている深体形土器である。



III-25図 第11・14号住居跡出土遺物

第15号住居跡 (III-29図)

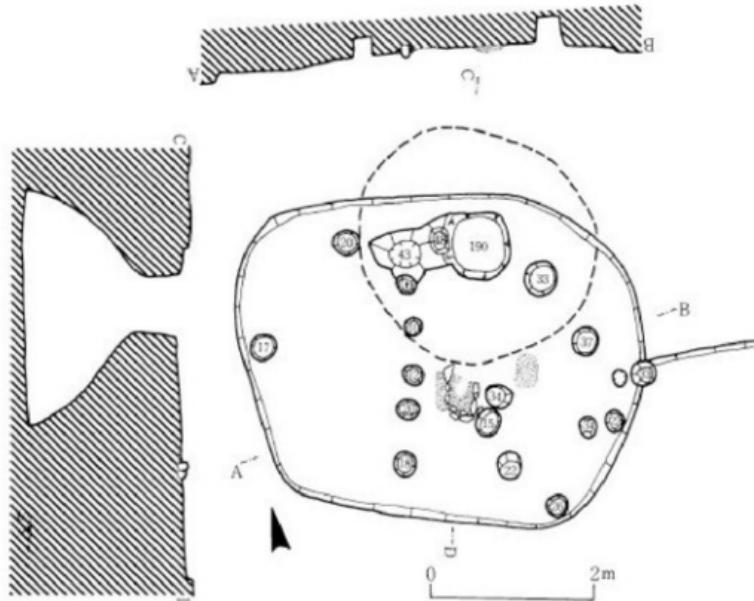
10A、10F グリッド内にあり、北側は第16号住居跡同様に完掘されていないが、推定、南北 8.8m、東西 5.5m の不整規四角形のプランを呈する住居跡で、炉は第16号住居跡内の埋甕炉と考えられる。柱穴については、はっきりしない。東側周壁はローム層を10cm程掘り込んだ明確な壁を成して

いるが、床面は全般的に軟弱である。

出土遺物

土器 (III-30図, III-32図1~6)

III-30図は小形の土器で、底部中央と胸部に穴があけられている。1は深鉢形土器の口縁部で、太い粘土紐を波状に貼りつけて地文と同原体で割みをつけている。胸部はLRの繩文である。2はキャリバーフォームの深鉢形土器の口縁部で枯土紐貼りつけと撫糸压痕による文様構成で口縁部の繩文はLRである。3は二条の沈線で文様を区画し、その上に四単位と思われる枯土紐を貼りつけ、指で押圧している。4は半截竹管状の工具で沈線を施し沈線間は波状に同じ工具で施文している。5は沈線と枯土紐を貼りつけ垂下させている。



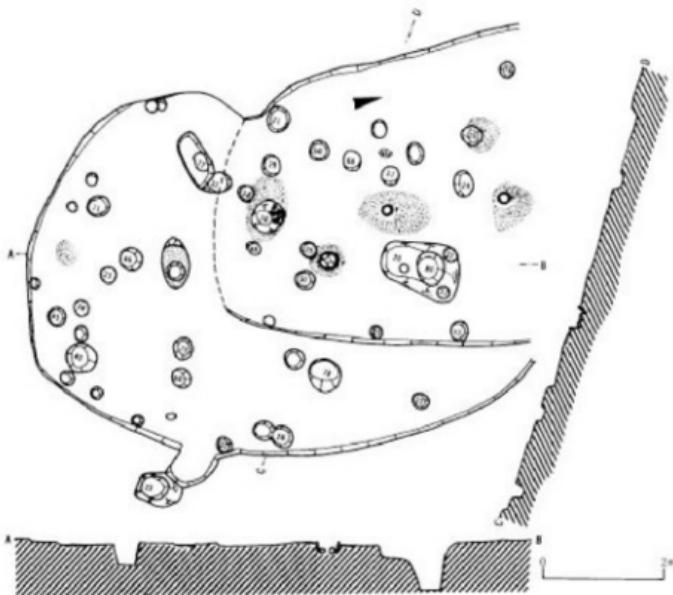
III-26図 第13号住居跡



III-27図 第13号住居跡出土遺物



III-28図 第13号住居跡出土遺物



III-29図 第15・16号住居跡

第16号住居跡 (III-29図)

第15号住居跡を切り込んでいるためこの住居跡が新しい。推定、南北6.8m、東西4.6mの楕円形のプランを呈する住居跡であろう。中央および北寄りにそれぞれ埋甕があり、その他、西、南にも焼土がある。柱穴は北側完掘を得たねばならないが、おそらく南北に各々、比較的深みのあるピットを相対させ、東西側に添木柱を多く配置させる方法を探っていると思われる。

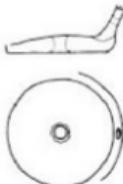
出土遺物

土器 (III-31図1~2, III-32図8~10)

2は深鉢形土器で口縁部から胴部中程までL.Rの単節斜縞文が施されているが、はっきりしない。8は口がやや外反する深鉢形土器の口縁部で三、四条の撚糸压痕をめぐらし、下方に「人」字の撚糸压痕を二条配している。9は深鉢形土器の弁状把手である。10は大形のキャリバー形深鉢土器で、沈線と粘土紐の貼りつけで文様を構成し、四单位の沈線による渦巻文がある。大木8a期に比定される。

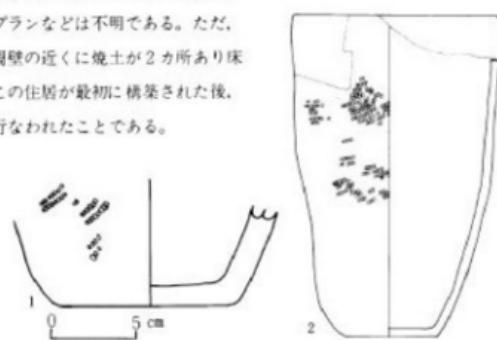
第17号住居跡 (III-23図)

本遺跡中、最も西寄りに位置している住居跡で、第12号住居跡と略々同レベルにある。長期間に

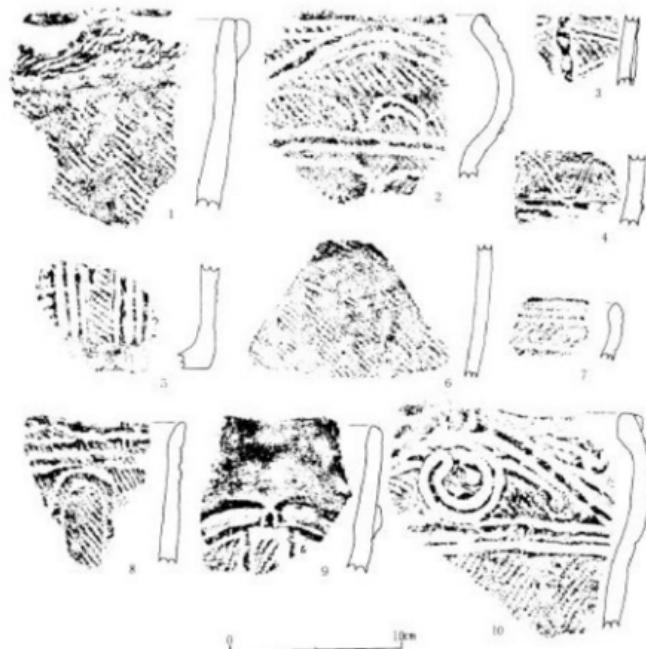


III-30図
第15号住居跡出土
遺物

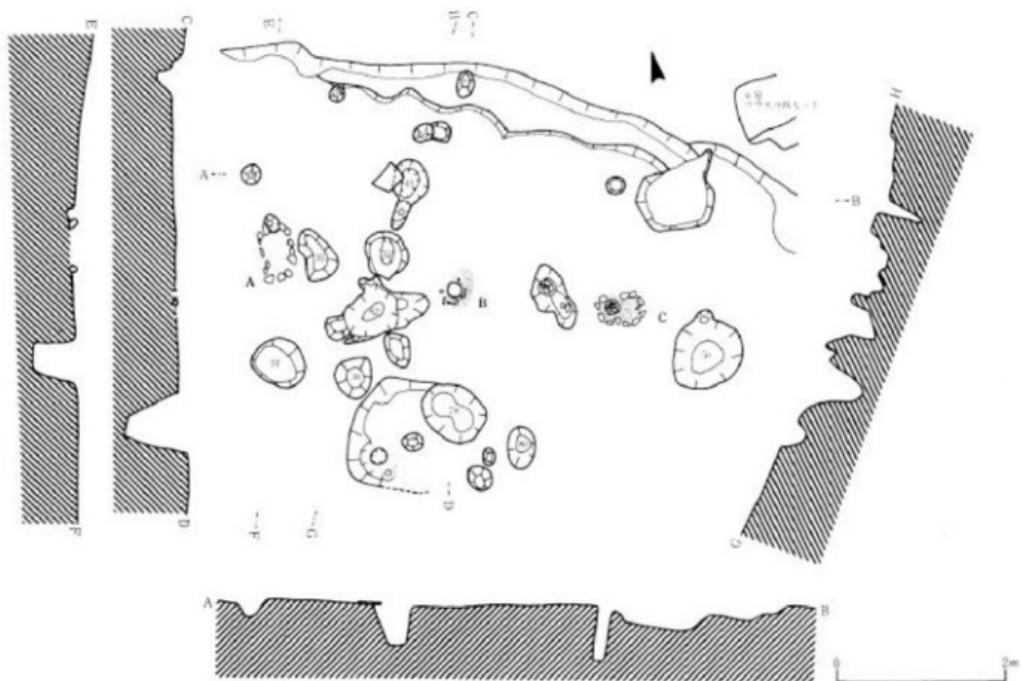
おける客土作業に加え、北西に走る農道により小破等が多く、南東部を除いた周壁及び全体プランなどは不明である。ただ、明らかなことは第14号住居跡周壁の近くに焼土が2ヵ所あり床面に接して土器が発見され、この住居が最初に構築された後、第14号→第11号の家屋変遷が行なわれたことである。



III-31図 第16号住居跡出土遺物



III-32図 第15・16号住居跡出土遺物



III-33図 N23 E 10住居跡

A地区の最北端の拡張区で、N23 J 1 土壇、袋状ピットの隣接地である。

包含層は床面近くまで、畑の耕作により擾乱を受け、ほぼ東西に二段のレベルの異なる住居跡の壁と考えられる遺構は残っているが、複合している住居跡のそれぞれのプランは不明である。

この複合住居跡を西から順にA、B、C住居跡と仮りに呼ぶことにする。床面のレベルはA、B、Cの順に低くなっている。A住居跡は南北に長軸の石圓いが²(70cm×40cm)をもち、がの南側に埋甌(大木8 b式土器)が配され、内部に焼土が入っていた。

B住居跡は、やはり石圓いがをもち、がを中心には焼土が広がり埋甌(大木8 b式土器)がある住居跡で、この石圓いがの西側に不規則な形のピットが連なっている。

C住居跡はB住居跡の数cm下に床面があり、(C住居跡の上にロームを貼ってB住居跡の床がつくられている)石圓いが²(50×45cm)が配され、がの内部に小穴が掘られ中に河原石が詰められていた。このがの西にピットがあり、このピットにも河原石が数個詰まっていた。焼土はがの内部とピットに検出された。他に焼土が2カ所みられ、拡張グリッドの北東隅にフ拉斯コ状ピットがあり、フ拉斯コ状ピットの北側半分を調査した。フ拉斯コ状ピットの入口に多量の焼土が捨てられた状態であり、内部からもブロック状の焼土、炭化物、土器片(大木、円筒系土器)、石等が検出された。住居跡から、北陸系の土器片が出土している。A、B、C住居跡の新旧関係、フ拉斯コ状ピットがどの住居跡に付設するかは、はっきりしないがB住居跡はC住居跡より新しいようである。

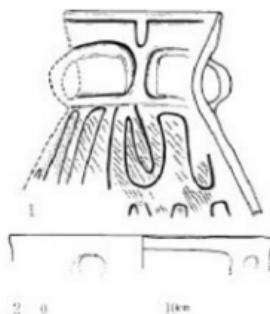
出土遺物

土器 (III-34図、III-35図1~2、III-36図1~13)



III-34図 N23 E 10住居跡

B住居跡出土遺物

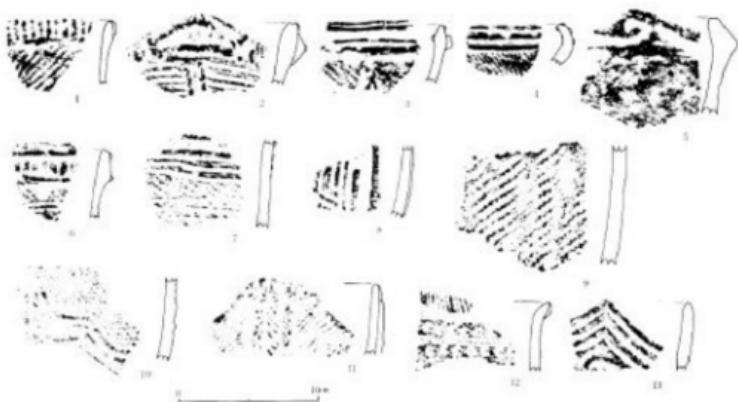


III-35図 N23 E 10住居跡出土遺物

III-35図1は頭部に橋状の把手をもち、胴部は細い擦糸

III-34図の土器はB住居跡のがに使用されていたキャリバーフorm形の深鉢形土器で、口縁部に波状の接する粘土紐を貼りつけ下位に三條の粘土紐をめぐらして

いる。地文はRLの単節斜繩文である。図版14-4はA住居跡のがに使用されていた深鉢形土器の胴部で地文はR Lの繩文で、粘土紐を貼りつけた先が丸い鉤状文を配している。III-35図1は頭部に橋状の把手をもち、胴部は細い擦糸



III-36図 N23E10住居跡出土遺物

文とし沈線で区画する、いわゆる十腰式の壺形土器で、胎土に小礫を含み焼成は良い。2は器台で中央部がわずかにくぼみ、器面は良く磨いてある。台部は欠損しているが丸い窓が四つ配されていたものと思われる。胎土は小礫が多く含み荒い。III-36図1は「く」字状に外反し側が膨らむ深鉢形土器の口縁部で口唇部に粘土紐を貼り、撲糸圧痕の刻みを施している。2は山形の口縁部で、上にのびる楕円形で区画し中は無文で、頸部は数条の沈線がめぐり、二条の縦位の粘土紐で断続する。3は口縁部に二条の粘土紐による隆帯をつくり、下位の隆帯は中央がくぼむ太いもので、内側にも一条の粘土紐を貼りつけている。5は山形の突起をもつ口縁部で、沈線による溝巻文を施文し、頸部は無文帶である。6は口縁部に二条の粘土紐による隆帯をつくり、間に縦位の沈線を施している。8、10は半截竹管による隆帯文と沈線と多截竹管状の工具で格子状に施文する、いわゆる北陸系土器で胎土は大木、円筒系土器のものと明らかに異なる。13も北陸系の深鉢形土器口縁部で内側に機物が付着している。11は深鉢形土器の把手部で粘土紐を波状に貼りつけ、下方に直線と波状の粘土紐を貼り、上に地文と同原体の繩文を施している。12は口縁が外反する円筒上層式の深鉢形土器口縁部で横位の撲糸圧痕文の間を「C」字状の撲糸圧痕文が連続する。

N13E 1住居跡 (III-37図)

第2層目の茶褐色土層からローム面まで、多量の土器片、石斧、石鎌、石匙、石錐の他、かなりの小礫(5~8cm)が一塊となって発見されたこのグリッド内から、複雑に絡みあった住居跡が確認され、この一帯の住居群の範囲は、更に東へ拡大されていることが明らかとなった。即ち、グリッド内の北東と南西隅とに2ヵ所、住居の壁と考えられる切り込みが見られ、その中間には埋甕炉が南北94cm、東西64cmの楕円状の焼土中に設置されている住居跡の三軒とである。後者住居跡の柱穴は、その形状から判断すれば、径30~50cm、深60~70cm前後の4本柱が主柱となっていたと考えら

れ、その位置は、炉を中心に約3m間隔の正方形の配置を成し、床面はかなり硬く良好であった。

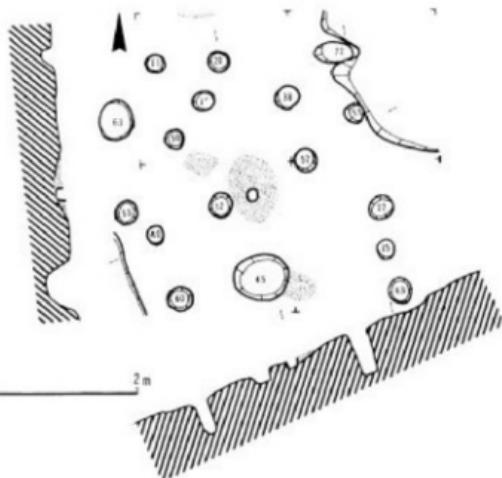
これらの複合住居跡は、地表下80cm地点で発見されているが、グリッド隅に検出した住居は、中央の床面より12~14cm程深い。なお、炉跡南部にあるピット(深さ45cm)の上部に約12cmのロームがはらされている点や、

若干の焼土分布、更に北の一部に、かなり厚みのある焼土範囲の確認がなされ、住居跡の存在とも考えられたが、周辺グリッドの拡張と精査をしなければ、これら複合住居跡の新旧関係は、不明である。

出土遺物

土器(III-38図、III-39図1~6)

住居跡、炉から出土した埋甕、粘土



III-37図 N13E 1 住居跡

紐を貼りつけ、間に「C」字状に撚糸圧痕を施し、胴部は結束のある横位の羽状織文で、円筒上層式の土器である。1は七条の撚糸圧痕をめぐらし、五、六条の間に粘土紐を貼りつけた口縁がやや外反する深鉢形土器である。2は口縁がやや外反し、撚糸圧痕の割みを入れている。地文はR Lの單筋斜織文である。3は「M」字状の弁状把手をもつ円筒上層式の深鉢形土器である。4は口縁が外反する深鉢形の土器で口唇部と頸部に粘土紐を貼り、撚糸圧痕による割みを施し、中に「C」字状の連続する撚糸圧痕を配している。6は半截竹管で隆帶文をつくり沈線による格子状文のある北陸系の土器である。5は口縁が外反し、撚糸圧痕と粘土紐を貼りつけ、竹管状の工具で刺突し波状の文様をつくっている。補修孔のある土器で五領ヶ台式に比定されよう。胎土、焼成は良好である。

S 6 E 10 住居跡 (III-40図)

A地区、南端の拡張区の住居跡で、円形プランを呈する直径約3mの小規模な住居跡である。

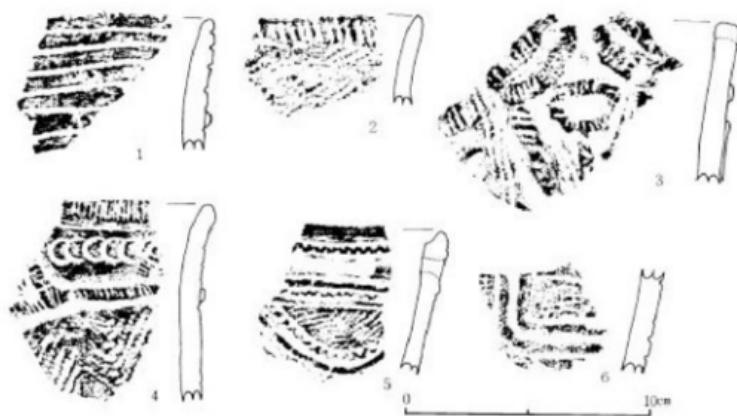
床面は、ゆるやかな鍋底状で、住居跡内には炉および焼土等は見られなかった。柱穴は、住居跡



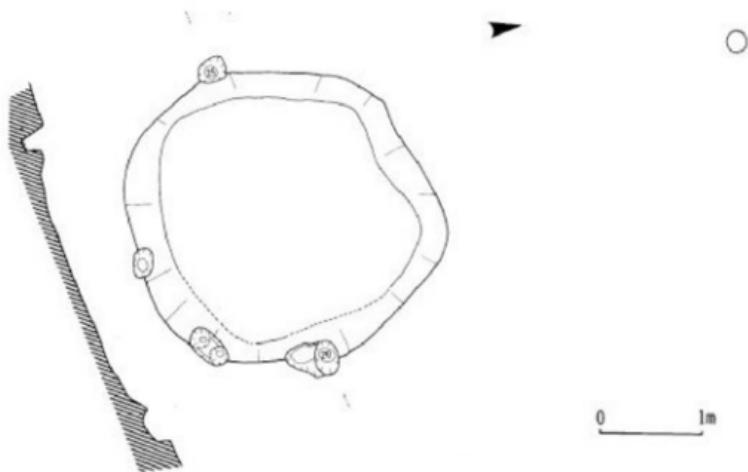
III-38図 N13E 1 住居跡出土遺物

周壁部に四つ確認できた。それぞれ20cm前後の深さのものである。

この住居跡の北方向 4.5m(住居跡中心から)に埋納土器が一個体発見された。しかし、この住居跡との関連については不明である。



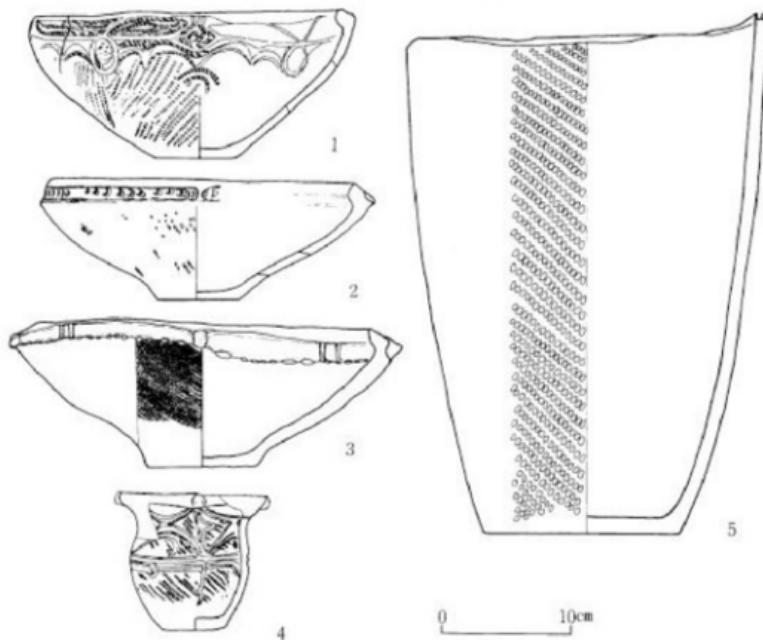
III-39図 N13 E 1住居跡出土遺物



III-40図 S 6 E 10住居跡

下堤遺跡A 地区出土遺物

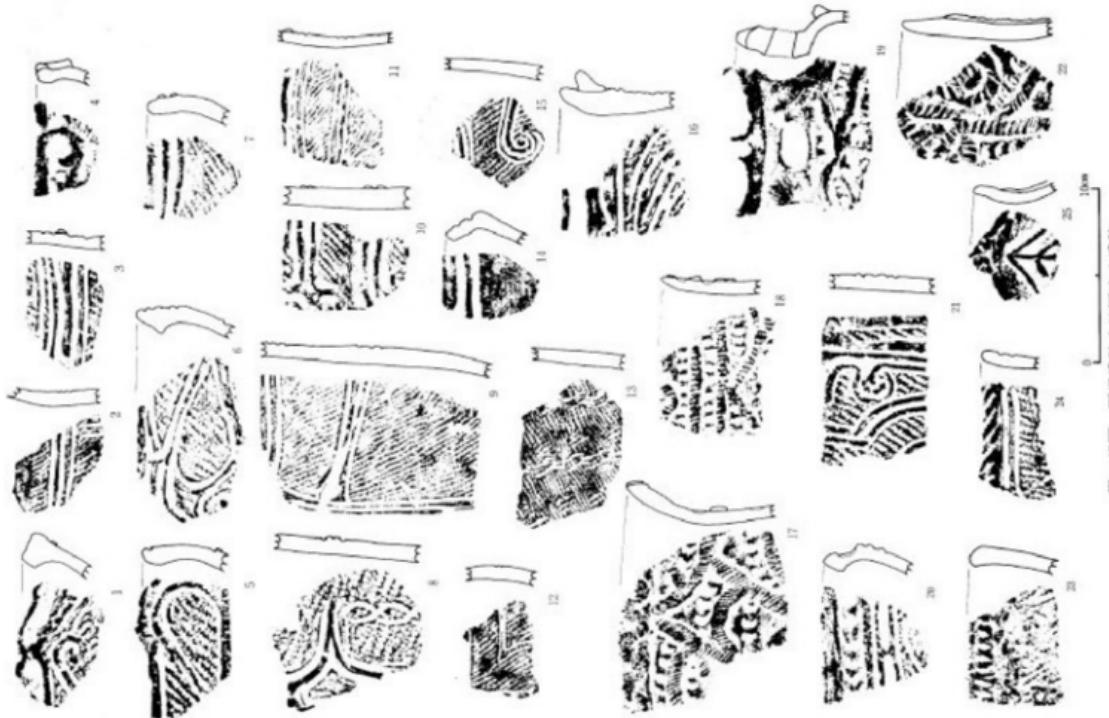
土器 (III-41図-1~5, III-42図1~24, III-43図1~25)



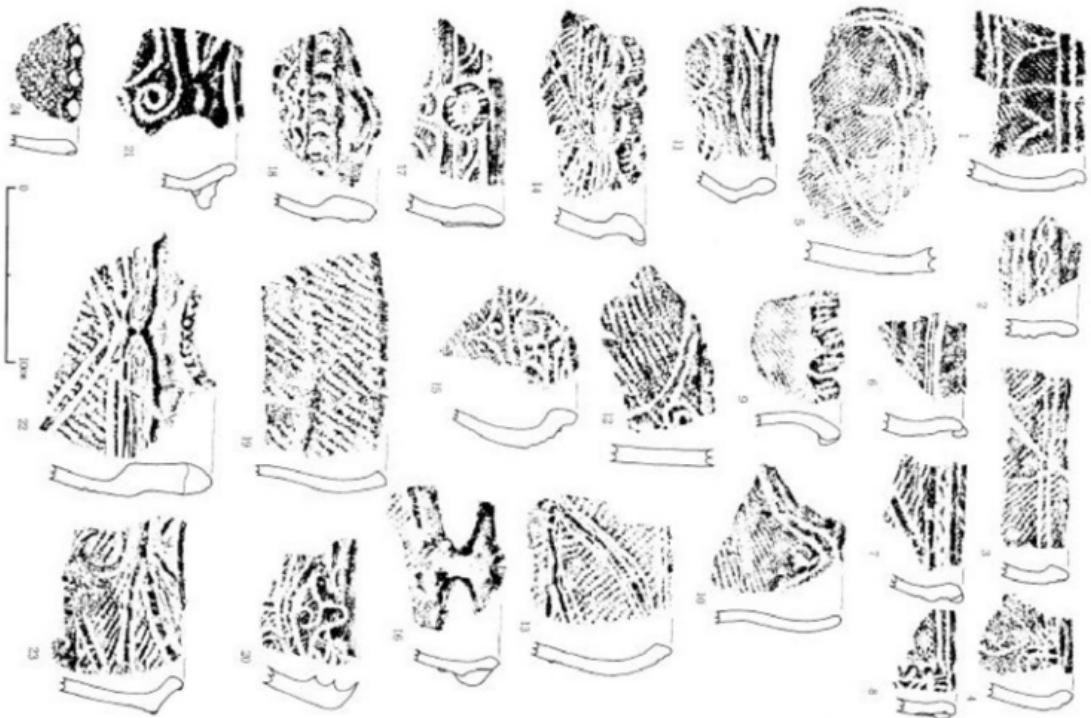
III-41図 下堤遺跡A地区出土遺物

III-41図、1、2、3はほぼ完形の浅鉢形土器で文様の構成は4単位である。1は単節斜縞文の地文に粘土紐を貼りつけ、区画した部分に撚糸圧痕を施している。下方には山形の撚糸圧痕を施している。2、3は長楕円形に区画した間に四つの突起をもつ。2は区画した中に半截竹管状の工具で「C」字状の連続刺突文をめぐらしている。3は区画した部分に縦に2本の粘土紐を貼りつけ、下方は押圧文がめぐっている。2を除いて胎土は良好である。4は胴部が脹る小形の深鉢形土器で4単位である。口縁部に四つの突起をもち、地文の単節斜縞文の上に沈線によって文様を表出している。5は円筒形を呈する土器でRLの単節斜縞文が全面に施文されている。

III-42図、1~15、18、20、21は撚糸圧痕文を主体とした土器で、いずれも深鉢で単節斜縞文を地文としている。1、3、4は口縁部に二条、あるいは一条の撚糸圧痕を施している。下部には「U」字状の撚糸圧痕を施している。9、14は口縁に波状に粘土紐を貼りつけ、その上に撚糸圧痕を施す。14は下部にも縱横に撚糸圧痕がみられる。9は口縁部がやや外反し、胴部が脹る深鉢形土器と思わ



III—43图 下姚遗址A地区出土遗物

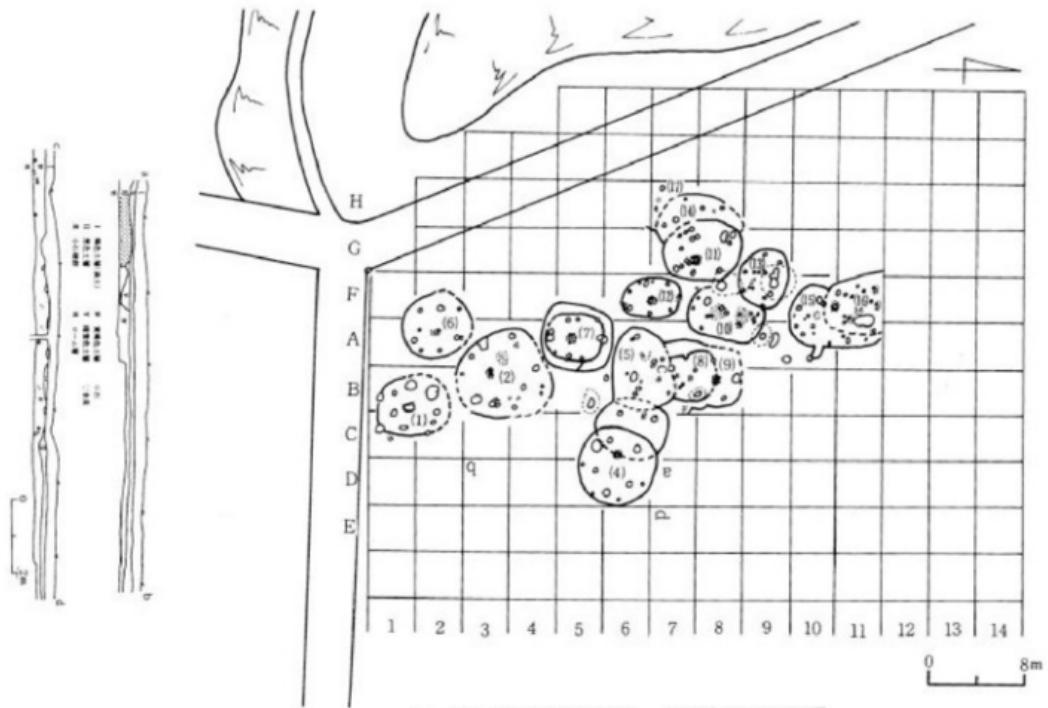


III—42图 下姚遗址出土遗物

れる。10は弁状の口縁部で、口縁に沿って撚糸圧痕を施し、中心部に撚糸圧痕による渦巻文を施している。13は口縁に二条の撚糸圧痕、下部には粘土紐を貼りつけ、それに沿って撚糸圧痕を施している。15は粘土紐を貼りつけて区画し、その中に撚糸圧痕によって「フ」字状、渦巻文を配している。17は口縁をきれいに磨き、下部には粘土紐を円形に貼りつけ、その上に撚糸圧痕を施している。18は口縁部に「C」字状の撚糸圧痕を施している。19はキャリバー形を呈する深鉢形土器の口縁部である。縄文はL Rである。22は弁状把手をもつ深鉢形土器の口縁部である。口縁に刺突を施し、無文帶の下方は沈線で楕円形に区画し、中に刺突文を施しうめている。23は口縁部が内反する深鉢形土器で粘土紐を貼りつけて区画した中に、二列の刺突文を施し、体部は粘土紐による渦巻文がみられる。24は口唇部に指によると思われる押圧文を施している。

III—43図、1は波状口縁を有する深鉢形土器である。口唇部には刺突が施され、体部には沈線による渦巻文がみられる。2は深鉢形土器の頭部破片で単節斜縫文の地文に三条の平行沈線文を施している。3は深鉢形土器の破片で粘土紐を貼りつけ、その上下に三条、二条の沈線を施している。4は深鉢形土器の口縁部で、粘土紐を貼りつけて渦巻文を施している。5は波状口縁でキャリバー形の深鉢形土器である。口縁に沈線をめぐらし、口縁部と胴部をわかつ部分に粘土紐を貼りめぐらし、間に楕円形に粘土紐を貼りつけている。6は深鉢形土器の口縁部で単節斜縫文の地文に曲線的に沈線を施している。7は深鉢形土器の口縁部で2本の粘土紐を貼りつけ、その間をヘラ状工具によって整形している。8は深鉢形土器の胴部破片で、単節斜縫文の地文に、沈線と隆帯によって文様を表出し、縁位に頸状文を施文している。9は深鉢形土器の胴部破片で、三条単位の沈線を施している。10は深鉢形土器の胴部破片で粘土紐を貼りつけて、棘状、渦巻文を施している。11は深鉢形土器の胴上部破片で、粘土紐を貼りつけた隆帯を1本めぐらし、下方には平行沈線文、「フ」字状の棘状文を施している。12は壺形土器の胴上部破片で一条の沈線をめぐらし、下部には沈線による「フ」字状の棘状文がみられる。13は深鉢形土器の胴部破片で、縁位に被結文を施している。14は口縁部に二条の平行沈線を、体部は磨きが施され無文帶となる。15は胴上部で器厚は比較的薄い。単節斜縫文の地文に沈線によって渦巻文を施している。16は深鉢形の土器で、口縁に粘土紐による隆帯をめぐらし、下方には沈線文が施されている。17、18、22は円筒上層式の土器で、いずれも深鉢形の土器である。22は弁状把手を有する。17、22は粘土紐を貼りつけ、その上に撚糸圧痕を施し、間には「C」字状に、撚糸圧痕が施されている。18は粘土紐を貼りつけ、その上に刺みを入れ、間には半截竹管状の工具によって「C」字状の刺突を施している。19は弁状の把手をもつ深鉢形土器の口縁部で、口唇は楕円形に二つに分かれ、中央に孔を穿っている。粘土紐を貼りつけた間には竹管状の工具によって刺突文がみられる。20は口縁部に「C」字状の刺突を、下方は沈線によって区画し、間には竹管状の工具による刺突文がある。21は深鉢形土器の胴部で沈線と隆帯で文様を表出して、渦巻文がみられる。23、24は深鉢形土器の口縁部で口唇部に刺みを入れている。24は二条の平行沈線を施す。23、24は最花式に比定される土器を考えられる。25は波状口縁を有する深鉢形土器で、

III-45図 土壌断面図



III-44図 下総道路A地区グリッド設定および住居跡図

無文の上に口縁に沿って葉脈状に粘土紐を貼りつけている。

第3節 土塙と出土遺物

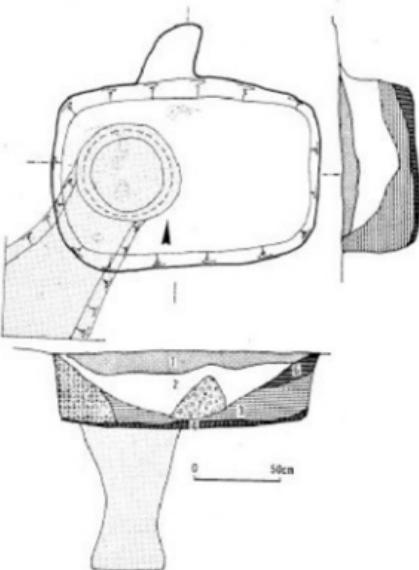
土塙は小豎穴状のもの、袋状のもの、そしてフラスコ状のものが発見されている。中でもフラスコ状のピットが多い。このピットについては袋状土塙、豎坑、豎穴、豎坑状遺構などと呼ばれているが、これらの土塙を総称して袋状ピットと呼んでおきたい。その中で時期、地域により差がある、形が少し異っているものと考えられる。ここではその縦断面が理科実験用具のフラスコにもっとも近い形をなすので、フラスコ状ピットと呼ぶことにしたのである。

フラスコ状ピットを説明する前にその名称について約束しておきたい。下堤遺跡で発見されたフラスコ状ピットはIII-59図のような形をなしている。これを遺物に例えてAを口縁部、Bを頭部、Cを胸部、Dを底部(床面)と呼ぶこととし、以下この名称を使って説明する。

土塙・袋状ピット (N23 J 1)(III-46図、図版8)

土塙

この土塙の確認面はソフトローム上面である。平面形はほぼ隅丸長方形を呈している。大きさは口部で長径158cm、短径110cmを測る。深さは確認面より45cmで、壁はほぼ垂直に立ちあがっておりロームのしっかりした壁である。土塙覆土の土層は7層にわかれ、1層、黒褐色で若干ローム粒子を含む、よくしまった層である。2層、褐色土層で、やわらかく炭化物、および焼土を含む。3層、明褐色でローム粒子を多量に含み炭化物、焼土を部分的にではあるが帶状に含んでいる。4層、ロームブロック、ローム粒子を多量に含むやわらかい層である。5層、赤褐色で大きめの炭化材を含み、その周りに焼土が点在しているボソボソした層である。6層、ロームブロックを多量に



含む黄色の層である。7層、大きな炭化材を帯状に含んだボソボソした茶褐色の土層である。この土塙は袋状ピットと重複関係にあるが袋状ピットが土塙横底部に確認されていることから推察して

本土壤の方が新しいものと推定される。

袋状ビット

このビットは土壤標底部ローム面であり、ロームを掘り込んで作っている。平面形はほぼ円形を呈している。大きさは長径約60cm、短径約58cmを測り、確認面よりの深さは約83cmを測る。壁は垂直に落ち込みながらビット中程よりやや張り出し袋状を呈している。ビット南側において西南方向に溝がのびているが本ビットとともにどうかは不明である。本ビットは前記土壤と重複関係にあり、新旧関係は本ビットの方が古いものと推定される。

フラスコ状ビット

(1) 1号フラスコ状ビット

5Bグリッドから発見されたもので、第3、4、5号住居跡のそばでどの住居跡にも付設したと思われる位置にある。規模は、口径65cm、頭径55cm、底径160cmではほぼ円形、深さ100cm、頭長22cmである。ビット内に充填された土壤は、上部が黒色土、下部は赤褐色土で、共に炭化物が混入していた。出土土器片の多くは殆んど壁近くにあり、また、中間に出土した土器胴部の内面に多量の炭化物と炭化した胡桃が付着していた。底部に焼土が僅かに残っていた。

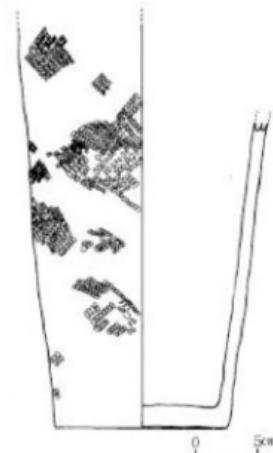
出土遺物

土器 (III-47図、III-48図1~2)

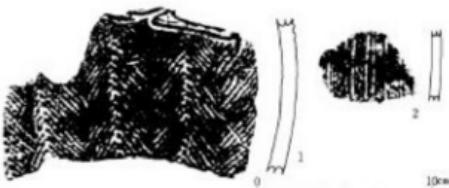
III-47図の土器は、胴部破片がビット中間に、底部が、ビット底部より5cm程上の位置から発見されたもので、口縁部はないが、円筒型となるもので、横位の羽状繩文が見られる。1は、平行弦線が深く横位に施され、胴部は結束した羽状繩文が縱に施されている。

(2) 2号フラスコ状ビット

このビットは、口径および底部が楕円形をなし、充填された土壤は特異であった。規模は、口径80×48cm、底部径124×65cm、深さ95cm、頭長46cmで、第8号住居跡内にあり、その入口部は非常にかたかった。口縁



III-47図 1号フラスコ状ビット出土遺物



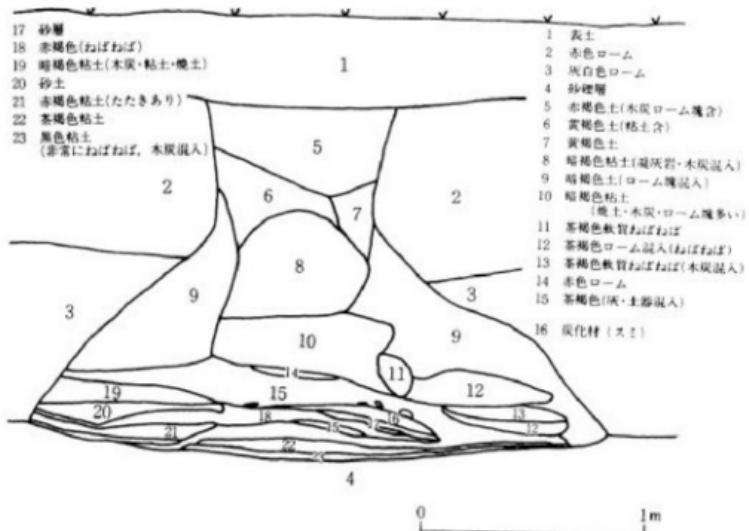
III-48図 1号フラスコ状ビット出土遺物

より北半分は25cmの深さまで、南半分は10cmまで小石の混った黒色土で、その下に青白色の圓い泥岩状の土壤が充填されていた。深さ45cmの頭部分に入る所に径2~3cmの小石が敷いたようにあり、

下に厚さ3cmの帶状黒色土があり、以下底部まで再び青白色の土壤で、比較的軟かく、所々に径10cm程の川原石が見られた。出土遺物は土器片(小)一つのみである。

(3) 3号フラスコ状ビット

9Aグリッド、第10号住居跡の北側に発見されたもので、このビットは調査の始めの段階でフラスコ状ビットであることを確認したので、東西に切ったもので、(III-49図)規模は、口径68cm、底径258cmのはば円形。深さ157cm、頂長57cmで、ローム層を掘り込み砂礫層の所でとめ、鍋底状に約20cm中心が凹んでいる。底部が鍋底状になっているのは、このビットのみである。調査方法として、このビットを切断したのはビット内に充填された土壤を精査することが目的であり、下層はかなり細いブロックに分かれる。



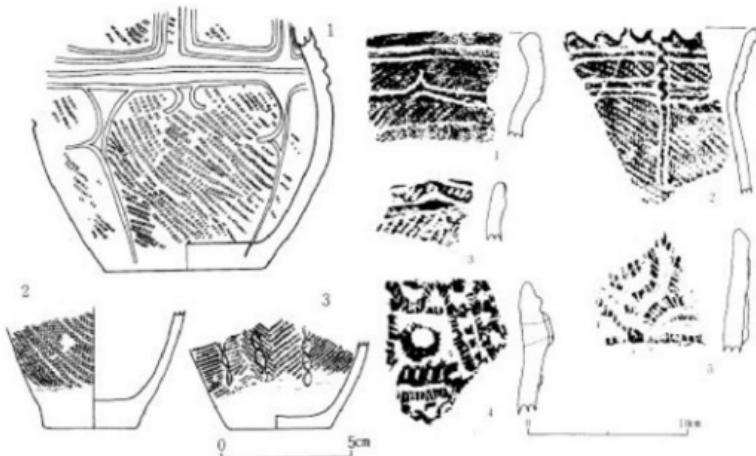
III-49図 3号フラスコ状ビット断面図

出土遺物

土器 (III-50図1~3, III-51図1~5)

III-50図1は、深鉢形の土器であろうが、口縁部が欠けている。地文に単節の斜縞文が施され頸部は太い沈線により四つに区画された四角形の文様となると思われ大木8b式の時期に比定されるものである。2は単節斜縞文のある底部で、3は撲糸圧痕による鎖状の文様が施されている。

III-51図は、撲糸圧痕土器(1, 2)円筒系土器(3, 4, 5)に分れる。2は、口縁が波状となって外反するが、この種の土器に見られる様に口縁内側が厚くなることはない。3は口縁の厚い隆



III-50図 3号フラスコ状ピット出土遺物

III-51図 3号フラスコ状ピット出土遺物

帶に撚糸が押されているものである。4、5は円筒上層式土器の一般的な弁状把手部であるが、4、5の隆帶(粘土縫貼付)の文様は、ヘラ状工具により刷みで、5は撚糸文である。

(4) 4号フラスコ状ピット

3号フラスコ状ピットの南、8Fグリッド第10号住居跡の西に発見された。上部に大きなピットがあったため、口縁部は、はっきりしないが、頸部径52cm、底径 257cm、深さ 168cm、頸長52cm、現在の胴部の形状は、やや、ふくらみを持っている。充填された土壤は、上部は黒色土、底部中央部に焼土、炭化物、灰等の土壤、土器片が堆積していた。また底部南隅の底に網代窓のある土器($\frac{1}{2}$)が直立して出土した。

出土遺物

土器 (III-52図1~2, III-53図1~7)

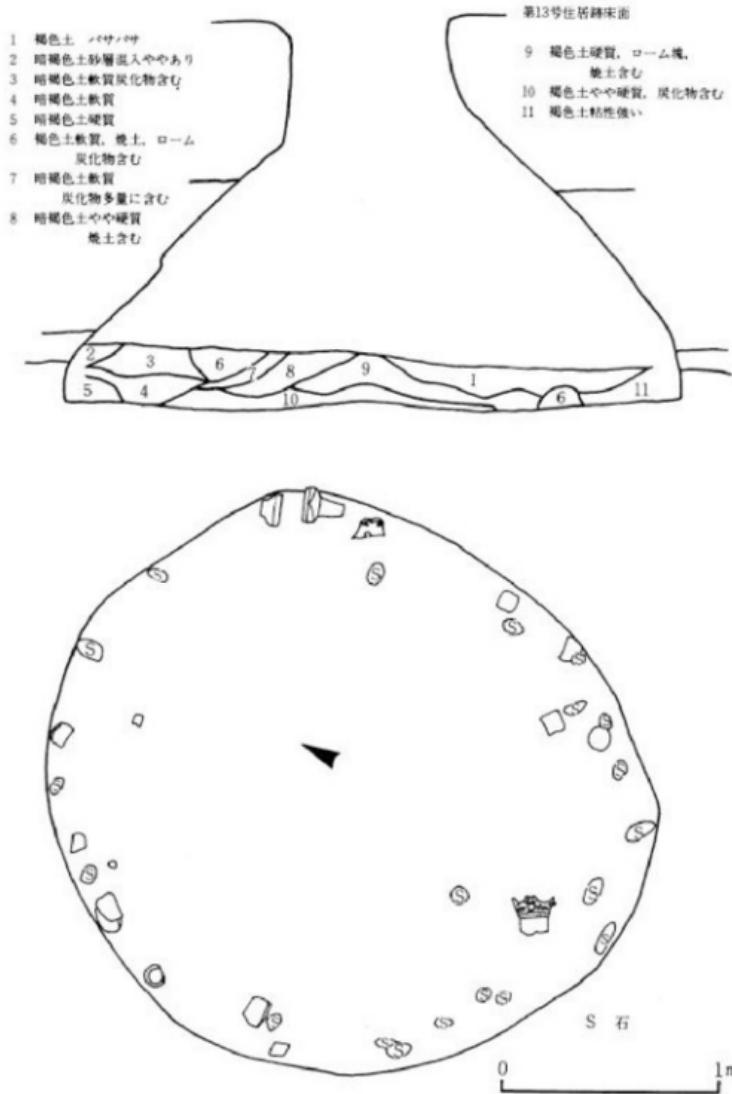
III-52図1は、口縁部が外反し、胴部が少し張る深鉢形土器である。胴部から上に文様帶があり、文様は粘土縫を貼付け、その両側に撚糸圧痕を施して構成している。文様帶は同じ文様構成四区画されている。またその中で最も広く区画された部分1カ所(図左側)に撚糸圧痕で山形文を施している。2も同様な器形をなす。口縁部に四つの突起があり、その突起の間に粘土縫を弧状に貼付け、その上に撚糸圧痕文が施されている。他には斜縞文が施されている。円筒上層式のものである。

III-53図1は、口縁部が逆「く」の字に内反する深鉢形をなすものであろう。口縁に二段の原体が圧痕され胴部は斜縞文である。2、3は浅鉢である。4、6は円筒上層式土器である。5は弁状把手の部分で1と同種の原体の圧痕文が施されている。黄褐色をなし焼成の良好な土器である。7はいわゆる北陸系の土器の口縁部である。

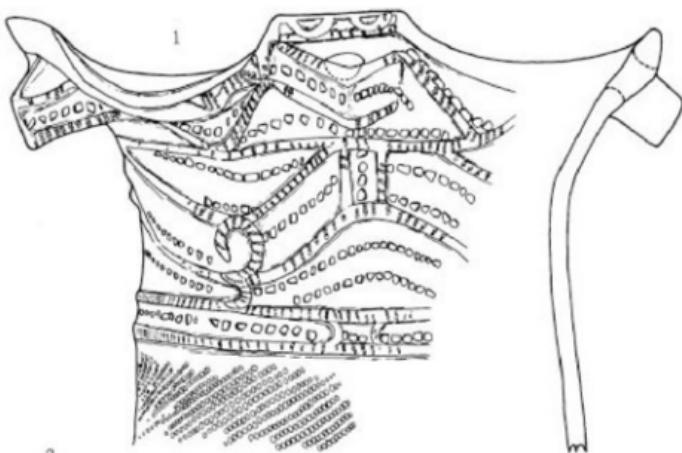


III-52B 4号フラスコ状ピット出土遺物

炭化した胡桃、石ペラが出土している。深さ 150cm 位から壁際に川原石、遺物が多く出土している。III-54図でもわかるように、土は flask-shaped pit の中心部に捨てられ、そこから周囲に広がっていく様子が地層の流れから判断できる。それは出土遺物の出土地点からも理解される。底部平面図に遺物の出土地点を記録（これは底面から上30cm位までの出土地点）してみると、記入できるような比較的大きい遺物は壁に近い所で検出されるのがわかる。これはこの部分に意図的に埋められたのではなく、ころがり込んだ結果と理解される。深さ 140cm の所から、赤色の種子を発見した。この種子の包含層は焼土、灰等を含む固い層で、種子はこの中から、穂のまま埋まり、種子のみが残ったような状態で順序よく並び、それぞれブロックをなして出土した。後世、アリ等、その他によ



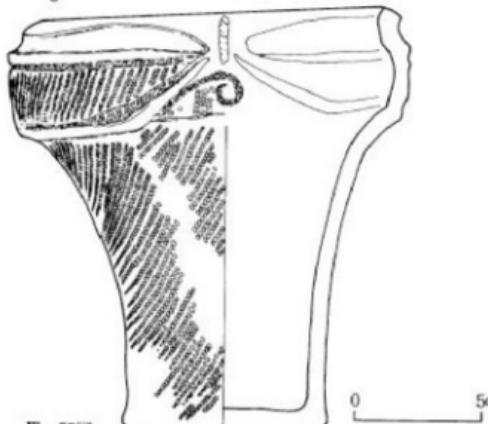
III-54図 5号フラスコ状ピット平面および断面図



2



3



III-55図

5号フラスコ状ピット出土遺物

って運びこまれた形跡は土層。その他からみて全く考えられないものである。なお、発掘調査（ピット内）後、このピットの中に金属製自記温湿度計（7日巻、NAK AASA CO. LTD. No.9828、温度 $-20^{\circ}\text{C} \sim 40^{\circ}\text{C}$ 、湿度0%~100%）を入れて調べてみた結果、外気の変化に関係なく、温度 15°C 、湿度93%と一定であった。

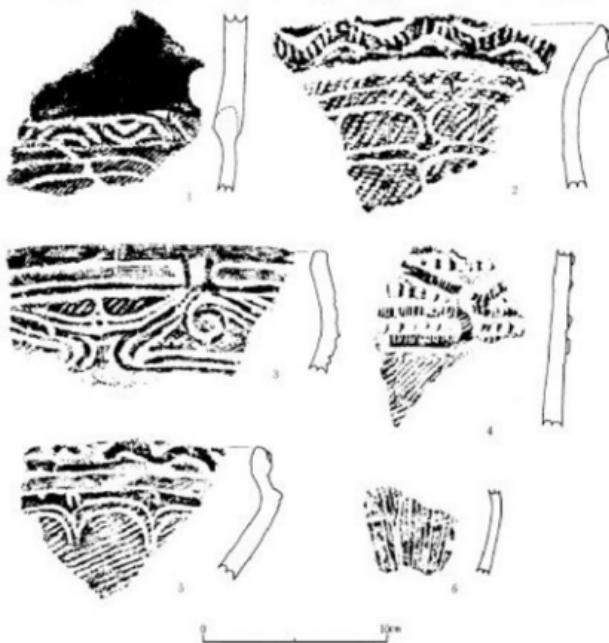
出土遺物

土器（III-55図1~3、III-56図1~6）

III-55図1は、フラスコ状ピットの底部より31cm、2は2cm、3は4cm上部から出土したものである。1は、口縁部が大きく外反する深鉢形をなす円筒上層C式土器である。四つの弁状把手があり、

それに橋状突起が付けられている。文様帶は胴部の上半まであり、粘土紐の貼付に撫糸圧痕が施された隆帯と、その間、角形の刺突文によって構成されている。2は浅鉢で小形のもので大きさは、口径13.6cm、高さ5.5cmを計る。口縁部の文様は撫糸圧痕で構成され、六区画されている。撫糸圧痕は口縁に平行して三条施文されているが、一方所だけ下の一条が省略されている。3は、キャリバー形の深鉢で口縁の文様体は三区画されている。口縁に溝状の無文部がつくられその下に山形の隆帯が三ヵ所に集められ、隆帯が撫糸圧痕によって様取りされている。図にある撫糸圧痕の懸垂文と、その下の溝巻文はこの部分だけである。

III-56図1、
2、3、5は
撫糸圧痕文、
4は、円筒、
6は沈線文土
器である。1
は、大形の深
鉢の弁状把手
の一部で、中



III-56図 5号フラスコ状ピット出土遺物

央に丸い穴がある。上部は厚く無文の部分は、よく磨かれている。撫糸を弧状に交互に圧痕したものである。2は、菱形の土器で、口縁に撫糸圧痕のある波形の隆帯。下は精円形の圧痕文を中心として、文様を構成している。3は、キャリバー形の口縁部で口縁に細長い横円形の圧痕があり、細い隆帯による三角形の区画を、同じ位の太さの撫糸で圧痕して文様体の中央に同じ手法で溝巻文を描いている。撫糸圧痕文としては、末期的なものでないかと推定される。土器内面に多量の炭化物が付着している。4は、円筒系の土器片であるが、隆帯は、刻線による割みがつけられ、その中に、刺突文が施されている。5は、浅鉢で、口縁に波形の粘土紐が貼付けられその下に二条の撫糸圧痕は、端が横円となると思われるが、下に二条の半円のブリッジが二重に圧痕され、ループ状の圧痕

文が、土器屈折部、上に施されている。

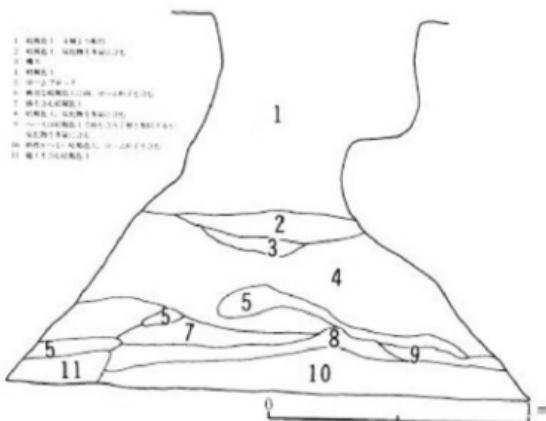
(6) 6号フラスコ状ピット

第6次調査のAブロックN地区、北端の拡張区に住居跡とともに発見された。ローム面に検出された多量の焼土を調査中、焼土の下に確認したもので、この焼土はピット入口（上部）に捨てられたものと考えられる。このピットは調査期間等の関係で西側半分より調査していないが、入口径81cmの円形で底部高68cmと長く、二段になり、高さ152cm、底径202cmのほぼ円形であろう。底部付近の充填土は焼土、炭化物、ロームを含むブロック状となるが、入口部より約110cmの深さで敷きつめたかのように土器（片）が捨てられていた。

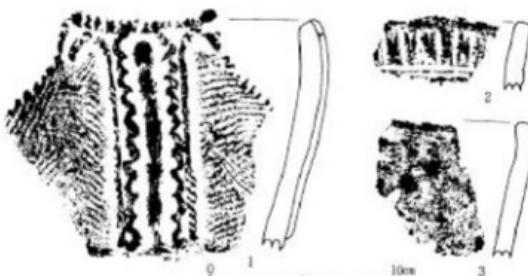
出土遺物

土器（III-58図1～3）

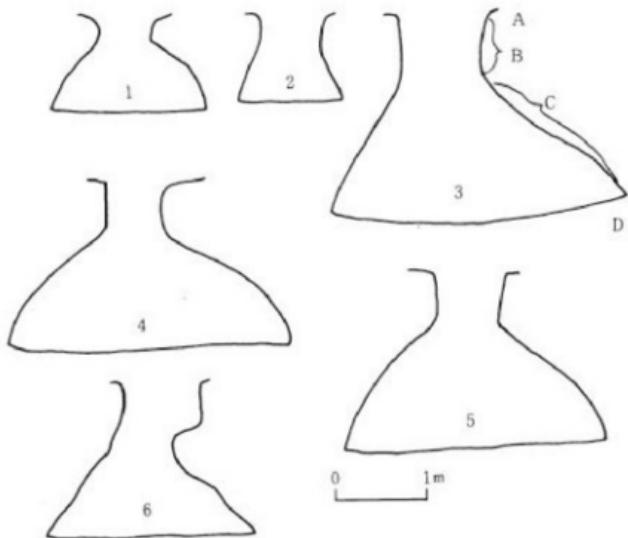
III-58図1は、四つの弁状把手をもつ深鉢の把手の部分の土器片である。この把手と把手の中間に粘土を貼付け粘土紐を垂下しその内側の折返しは鋸歯状にして、頂部まで上げ、それを右側にも同様にくりかえして文様をつくりしている。これを一本の粘土柱でおこなっている。この上には纏文が施されている。2も半截竹管で引摺いた様な沈線が口縁から根に施されている口縁部の破片である。3は無文の口縁部破片で、頂部が平である。



III-57図 6号フラスコ状ピット断面図



III-58図 6号フラスコ状ピット出土遺物



III-59図 1号～6号 フラスコ状ピット断面形状図

フラスコ状ピット出土石器・土製品

石器

石鉢 (III-60図1)

5号フラスコ状ピットから出土したもので硬質頁岩である。

石ペラ (III-60図4)

5号フラスコ状ピットから出土したもので硬質頁岩である。

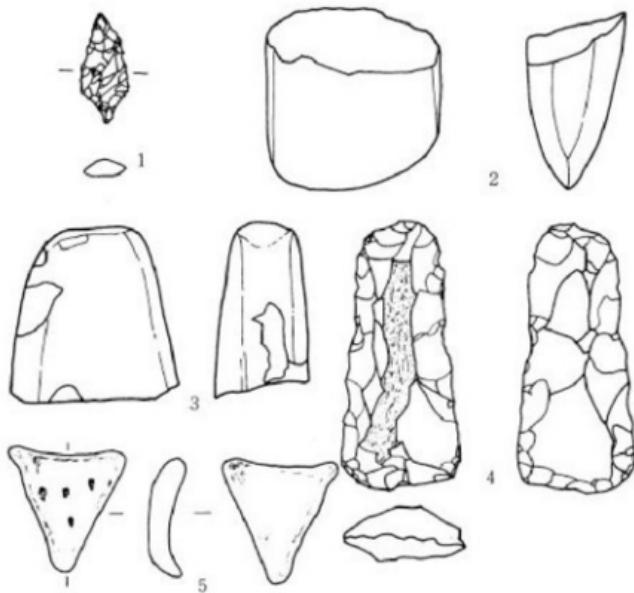
磨製石斧 (III-60図2～3)

2は3号フラスコ状ピットから出土し、砂岩である。3は4号フラスコ状ピットから出土したもので泥岩でつくられている。いずれも欠損している。

土製品

三角形土製品 (III-60図5)

5号フラスコ状ピットから出土したもので各辺が多少、内湾し、正面に不規則に四つの刺突が斜めから施され、背面はくぼんでいる。色調は明褐色である。



III-60図 フラスコ状ピット出土遺物

ま　と　め

フラスコ状ピットは、一定長の頸部をもち、それにつながる胴部が末広がりになり、底部がもっとも広い部分をなすピットとして認識され、その縦断面にあらわれた形状がフラスコに似ていることから、フラスコ状ピットと呼ぶことは前述したとおりである。

下堤遺跡におけるフラスコ状ピットは、上記のような形状をなし、口縁から筒状の頸部を経て胴部につながり、底部は円形または梢円の平面形をなし、浅い鍋底状をなすものもある。壁(胴部)と底部のなす角度はほぼ $45^{\circ} \sim 55^{\circ}$ を示す。下堤の場合と非常に近い形をなす萱刈沢貝塚の例は 60° であり、頸部も $70\text{cm} \sim 100\text{cm}$ と長い。この違いはフラスコ状ピットを作る場所(遺跡)の地質的条件によるものと考えられる。

このピットの作り方、握り方およびその用具などの観察を試みたが不明である。ただ頸部から胴部にかけての付近で凹凸のはげしい状態が観察できた。

ピット内の土壤は、焼土、灰化物、灰等を含む土壤がブロック状に堆積している。このブロックを一行為と考えると、第6号フラスコの場合は少なくとも11回以上の行為があったことになる。(一行為とは同じ土壤を何回かにわたって短時間に埋めることと考える)。この一行為、一行為が連続し

てフラスコ状ピットを埋めたものか、その行為の間に相当の時間があったかは不明である。ただ第1号フラスコ状ピットの中間部から出土した土器片と、底部近くから出土した土器片が同一個体であった。

フラスコ状ピットのあり方は遺跡の中で群をなすもの、住居跡内にあるもの、その他がある。下堤遺跡の場合は屋内施設と考えられるものが13号住居跡の5号ピット、8号住居跡の2号ピット、10号住居跡の3、4号ピットである。1号、6号ピットははっきりしない。またこれらのピットを全て発掘調査していないので、明言できないがピット内の土壤のあり方は同じであろうと思われる。この埋設の仕方が共通していることは、用途を考える上に大切である。現在まで、フラスコ状ピットを含む、いわゆる袋状ピットの性格については土壤墓、貯蔵穴、住居跡などと考えられている。下堤遺跡の場合竪穴住居跡の中に作られ、屋内施設の一つと考えられるので住居とは考えられない。他の土壤墓か、貯蔵穴のいずれかであろう。県内で土壤墓の例は壱刈沢貝塚がある。ここではフラスコ状ピットの中から人骨、犬骨が出土している。貯蔵穴であるという例は県内にはない。しかし貯蔵穴でないという積極的な意見を裏付ける事実もない。そこで貯蔵穴として活用できるか否かを判断する一資料として(図-54図)ピット内の温湿度を測定したのである。その結果、ピット内の温湿度は外気の変化にかかわりなく一定であることがわかった。この結果は貯蔵としての機能を考えた場合、高湿度であることは具合が悪い。食物貯蔵の原理は食物に細菌、カビ、害虫等の発育、侵入を防ぎ自己分解を止めることである。この観点から考えると90%以上の湿度は不適といえる。しかし、この地域では冬期間の貯蔵の方法として土に穴を掘って、野菜などを貯蔵する例があり、貯蔵穴として使用したとすれば冬期間であったであろう。冬期間の湿度は年間をとおしてもっとも低いこともその裏付けとなろう。

5号フラスコ状ピット内木炭のC₁₄年代

測定値 3990±105 B.P. 2040B.C. 測定番号 G_ak-4706

第4節 下堤遺跡より出土した発芽タデ種子の走査電顕による形態的研究

笠原 安夫・藤沢 浅

(岡山大学農業生物研究所)

1972年7月26日に秋田市教育委員会によって発掘された3990±105年前(木越教授がC₁₄年代測定法で同一層の木炭片の測定による)の縄文時代中期の住居跡のフラスコ状ピット内で140cm下より発掘された種子を土器と一緒にビニール袋に保存したところ4日後に発芽して世間を驚かした。幼植物は秋田県農試で栽培され、大部分がハルタデ、少數がイヌタデと確認され、その繁殖標本と発芽残余の種子約70粒(15°C保存)および次世代種子を笠原の元に送られ、その種子の形態、発芽、生育の状態について再調査を依頼された。

笠原は1973年10月岡山大学農学部における日本作物学会第156回講演会でその種子の検鏡(実態

(顕微鏡)と15°Cで保存した種子について、翌年4~6月における発芽状態とその幼植物の移植後ににおける生育について報告した。

その発芽はきわめて迅速であった。すなわち置床2~3日後に大部分が発芽したが、新しく播種した新種子は休眠のため1カ月間で発芽しないか、また3~18%の発芽にすぎなかった。古い出土種子を47粒検鏡の結果、最外部のがく被はもとより厚いクチクラ層が消滅で薄くなつた果皮がほぼ全面を覆うものが11%、残り89%はほとんどが内部の薄い種皮のみになつていていた。そのうち、がくと果皮の部分的に残るもの30%、果皮の一部が残るもの34%、種皮のみになつていてもののが35%であった。クチクラ層を欠くので吸水が早く、そのため発芽が早くなつたと考えられた。また胚の先端が縮んでいるようで幻根の伸長がきわめて不長の異常発芽となり、後に副根が出て生育をつづけて約半数が正常に開花結実した。

1974年5月再度出土の残余種子10粒を置床したところ3日後までに6粒が発芽し、前年同様異常発芽であり、移植後に3植物体が正常に開花結実している。

ここに出土種子の損傷状態を詳しくしらべるため新種子または圃場の埋土タデ種子などについて走査電子顕微鏡(TSM-50A型)でしらべた。

* 種子出土地点は暗褐色の盤土、炭化物を多く含む層でタデは親指大にばらついて落ちていた。このビット内の温度は15°C、湿度93%は外気が変化しても一定していた

(ハルタデ走査電顕写真的説明)

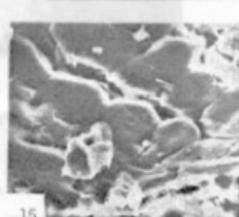
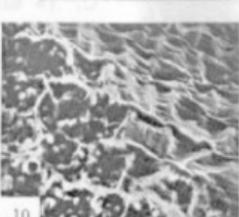
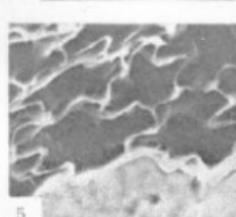
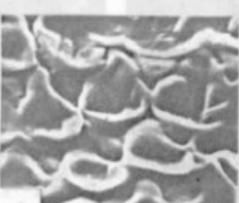
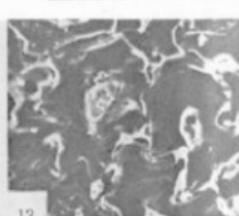
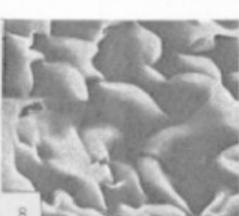
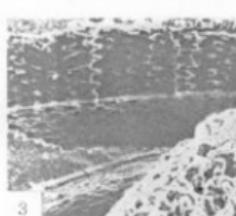
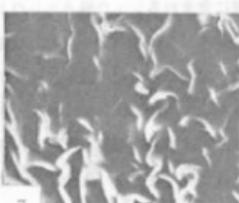
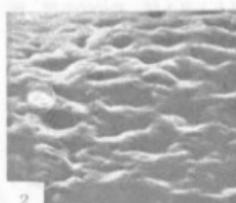
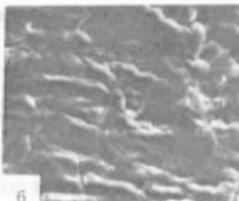
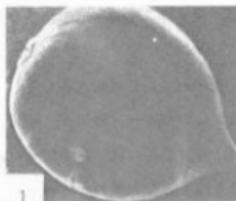
(1)~(8)新種子 (出土種子の次世代) と(9)~(12)出土古種子の比較

(1)果皮クチクラ光沢で滑らか ×20 (2)硝酸1%処理でクチクラを溶かした果皮表面 ×500 (3)硝酸処理で二つに分れた果皮の断面と果皮の内面および果皮、種皮の表面 ×400 (4)果皮断面のヒョウタン形細胞膜 ×750 (5)果皮の裏面から見た内表皮細胞膜 ×1000 (6)(7)種皮の表面 ×300, ×500 (8)(9)同拡大 ×1750, ×1000 (10)内胚乳 ×1500 (11)出土古種子 ×20 (12)損傷した果皮細胞のいろいろ ×500 (13)一部の拡大で薄い液状細胞膜が見られる内表皮に近いところ ×1500 (14)種皮のみのもの(大部分)の表面で一部果皮が付着する ×500 (15)種皮の細胞 ×1250

Lewis(1973)*はハルタデ種子がpeat sil (PH4.2, 有機炭素36.2%)で地表より26cm下で20年後にも17%発芽し、種子の皮は外観上完全によい保存状態であった。しかし mineral soil (PH6.5, 有機炭素4.6%)の埋土では果皮が二つに分れて胚が露出する結果死を招いたと言う。

筆者らも1~数年前に落下したと思われる圃場の土1~5cm層のサナエタデ184粒とイヌタデ10粒の果実を乾土 220g の土中より検出したが、がく皮は現存するものとかなり消滅するものがあり、果皮の光沢も消失したものが多いが、クチクラ層はまたよく保存されたものと幾分それがなくなつた状態であった。そして果皮が消失して種皮のみになったものは1粒もなかつた。またそれら一応外観で果皮の光沢のよいものと光沢がないものに分け各20粒を25°Cに置床したが1粒も発芽しなかつた。盛土1m下では、タデ種子は数年後のものも発芽した粒もあった。

** J. Lewis (1973); Longevity of crop and weed seeds survival of the 20 years in soil. Weed Research vol. 13. No. 2 179~191.

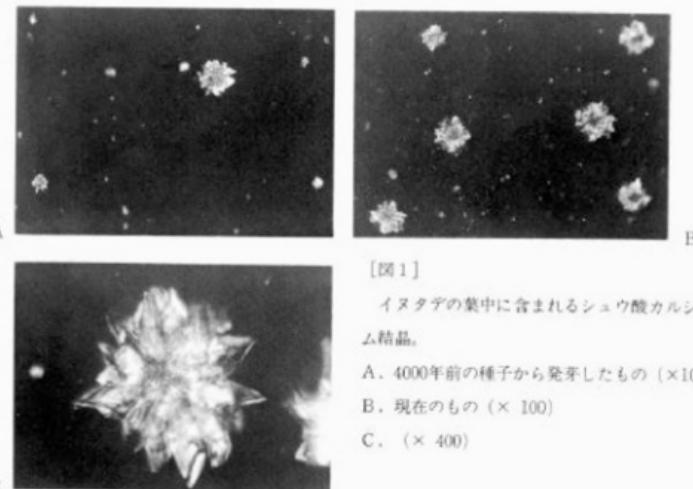


第5節 ハルタデ、イヌタデの葉に含まれるシュウ酸カルシウム結晶パターン：4000年前の種子から発芽したもの、及び現在の同種植物について

梅本光一郎（京都薬科大学）

私の過去における一連の研究から、植物体中に存在する結晶性無機成分のパターン解析が、植物の種（属、科）の類縁関係を明確にするうえで重要な役割を果すことは、もはや何ら疑う余地がない。従って、結晶性無機成分の特性を反映した「植物系統樹」をつくることは、必要と思われる。

これに開拓して、タデ植物の葉に含まれるシュウ酸カルシウム結晶をとりあげ、約4000年間、休眠していた種子から発芽した葉に含まれる結晶パターンと、現在同地域に生育している植物の葉に含まれる結晶パターンの相違を調べてみた。問題の種子は縄文中期の、秋田県「下堀遺跡」より、1972年8月に発掘されたものである。この種子は、ハルタデとイヌタデの種子で、これから生長した葉を収集し実験に用いた。現在、同遺跡の発掘現場付近に生育している同種の植物も比較実験のため収集した。結晶パターンは、著者が考案した「生物組織、低温プラズマ灰化法」によって調べた。



[図1]

イヌタデの葉中に含まれるシュウ酸カルシウム結晶。

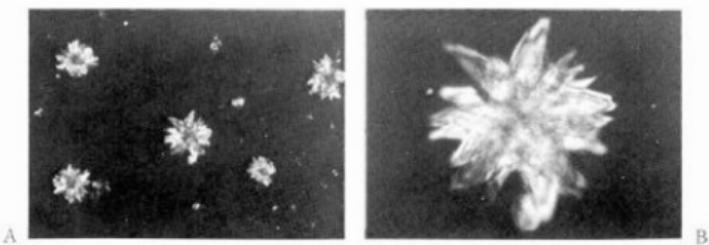
A. 4000年前の種子から発芽したもの ($\times 100$)

B. 現在のもの ($\times 100$)

C. ($\times 400$)

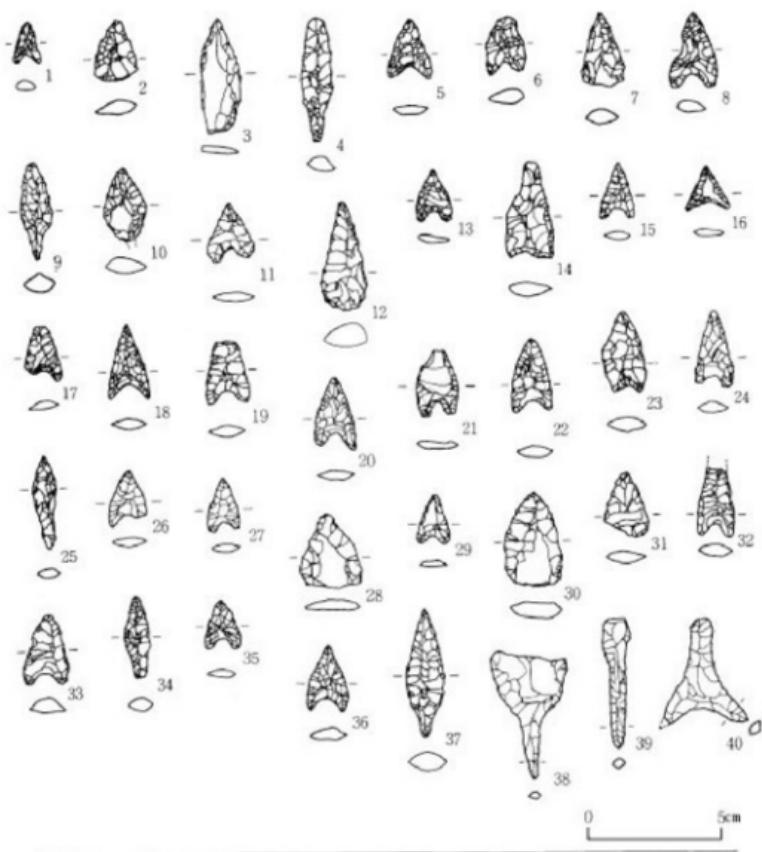
1：ハルタデ、イヌタデは、どちらも金平糖状の集品を含み、4000年前のもの葉中の結晶の形も、現在のものの形と同じである。どちらも集品を構成している各結晶塊の先端は、とがっており、その構造は「ユキノシタ科」の植物中の集品の構造と同一、あるいは非常に類似している。調査対象となつた葉は、またシュウ酸カルシウムの結晶体と思われる小さな結晶も含んでいた。

2：結晶は、主として葉内部、及び主脈部に分布している。イヌタデの集品の大きさは、4000年前



[図2] イヌタデの葉中に含まれるシュウ酸カルシウム結晶 A($\times 100$) B($\times 400$)
のものが15—50ミクロン、現在の植物のものが30—50ミクロンであった。

以上のように、4000年も休眠状態にあった種子から発芽したイヌタデ、及びハルタデの葉中にみられるシュウ酸カルシウム結晶も、現在の同種植物体中の結晶も本質的な違いはなかった。加うるに、イヌタデとハルタデに含まれる結晶が形・質ともに同じであるというこの事実は、結晶学的な観点からも、この二種類の植物は起源を同じくしているか、あるいは非常に近いところから発生したものである、ということを想起させる。



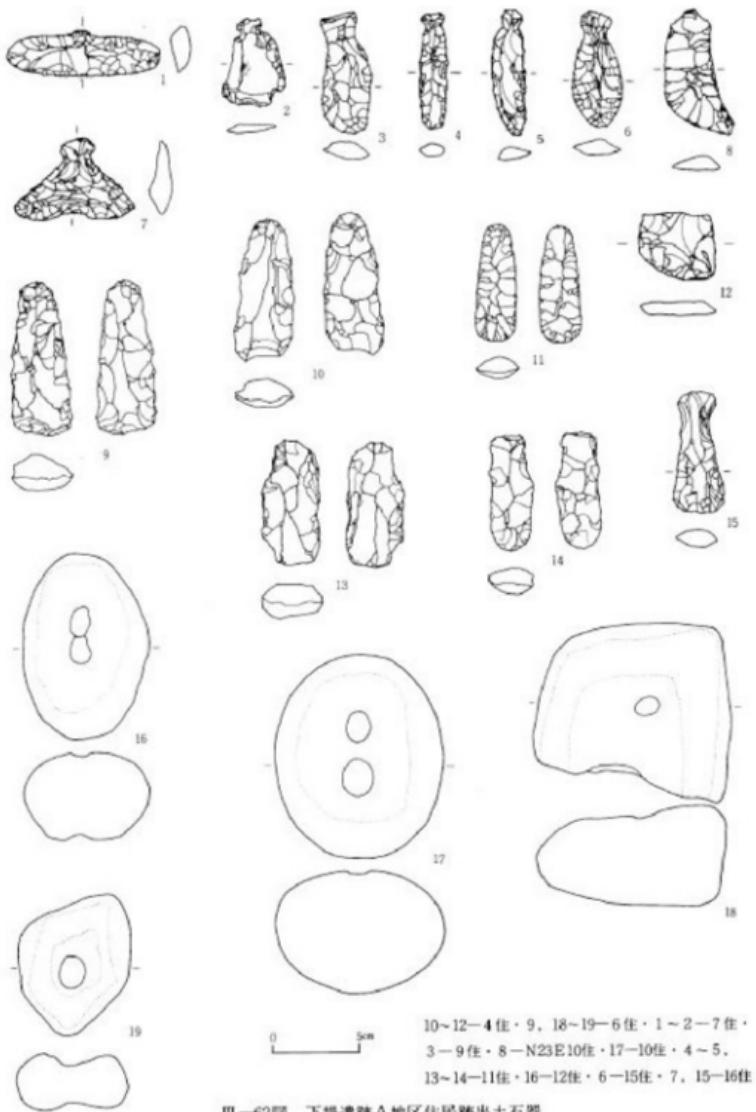
III-61図 下堤遺跡A地区住居跡出土石器

1—1住・2—3—4住・4、38—39—5住・5—9—6住・10—13—7住・14—16—9住・17—18—10住・19—23、
40—11住・24—25—13住・26—27—14住・28—32—15住・33—35—16住・36—37—N23E10住

* 石錐・石錐・石匙・石ベラの実測図はリングを省いてある。

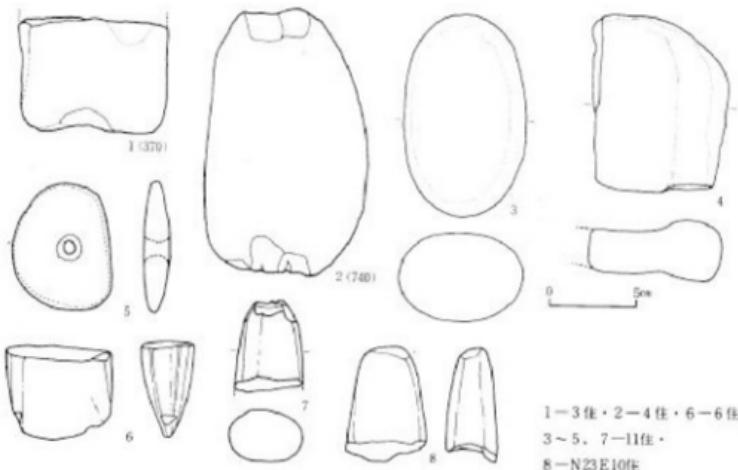
はアスファルト付着を示す。

石錐の()内は重さを示す。単位はグラム。



III-62圖 下姚遺跡A地區住居跡出土石器

10~12—4住·9, 18~19—6住·1~2—7住·
3~9住·8—N23E10住·17~10住·4~5·
13~14—11住·16~12住·6~15住·7, 15~16住



III-63図 下堤遺跡A地区住居跡出土石器

石器

石鎌 (III-61図1~37, III-64図1~39)

A地区出土の石鎌で無茎のものが多い。石質はほとんど硬質頁岩で、黒曜石もわずかある。

石錐 (III-61図38~39, III-64図40~41)

4点出土しているが、いずれも破損している。硬質頁岩である。

石匙 (III-62図1~8, III-65図1~16)

楕円形の石匙が多く硬質頁岩である。12はつまみがあるので一応、石匙の中に分類した。

石ペラ (III-62図9~15, III-65図17~27)

硬質頁岩で、両面加工をして刃部をつくっている。

石鏃 (III-63図1~2, III-67図1~9)

河原石を素材とし、両端を打ちかいてつくっている。重さは47g~740gまである。

凹石 (III-62図16~19, III-66図27~30)

両面にくぼみのあるもの片面だけのものがある。

磨石 (III-63図3, III-66図31)

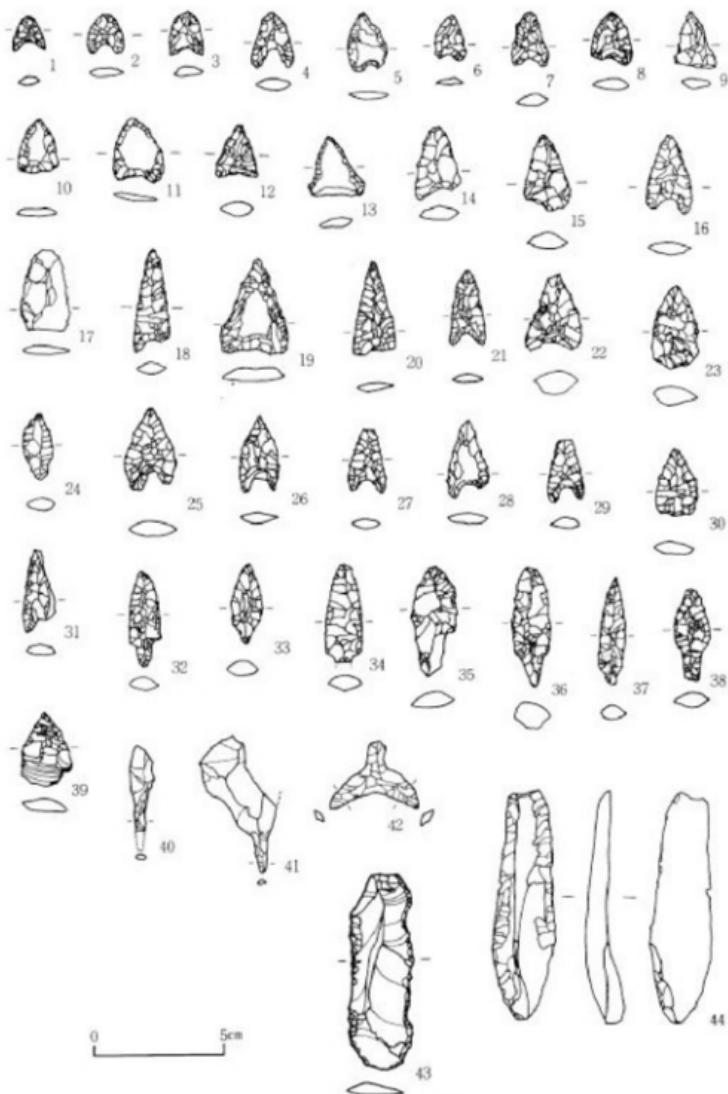
形の整った楕円形の石器で両端および側周縁が磨り減っている。

磨製石斧 (III-63図6~8, III-66図1~26)

完形なものはない。石質は泥岩が最も多く安山岩、片岩、砂岩、斑岩などでつくられている。

石皿 (III-63図4)

1~3住・2~4住・6~6住
3~5・7~11住。
8-N23E10住



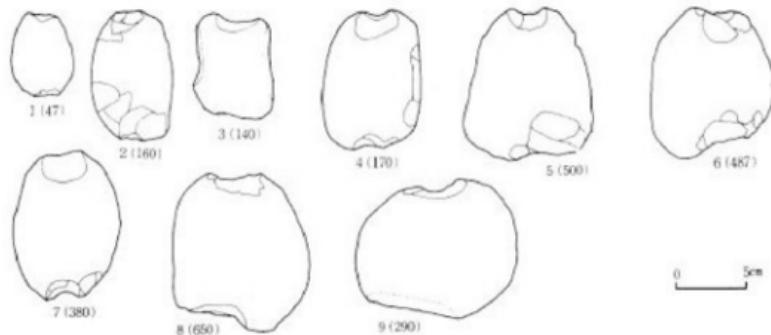
III-64図 下堤遺跡A地区出土石器



III—65图 下堤遗址A地区出土石器



III—66图 下姚遗址A地区出土石器



III-67図 下堤遺跡A地区出土石器

大部分が欠損している。石質は凝灰岩である。

その他の石器 (III-61図40, III-64図42, 43, 44)

40, 42はいずれも硬質頁岩で、つまみをもち、八形状の脚部がある。43, 44は先土器時代の石器で43はブレイドであろう。44は基部調整をしているナイフ形石器で、縄文時代において刃部を剥離し、再度使用されたものである。石質は硬質頁岩である。

石製品

有孔石製品 (III-63図5)

両面から穴を穿った石製品で、石質は凝灰岩である。

土製品

土偶 (III-68図1)

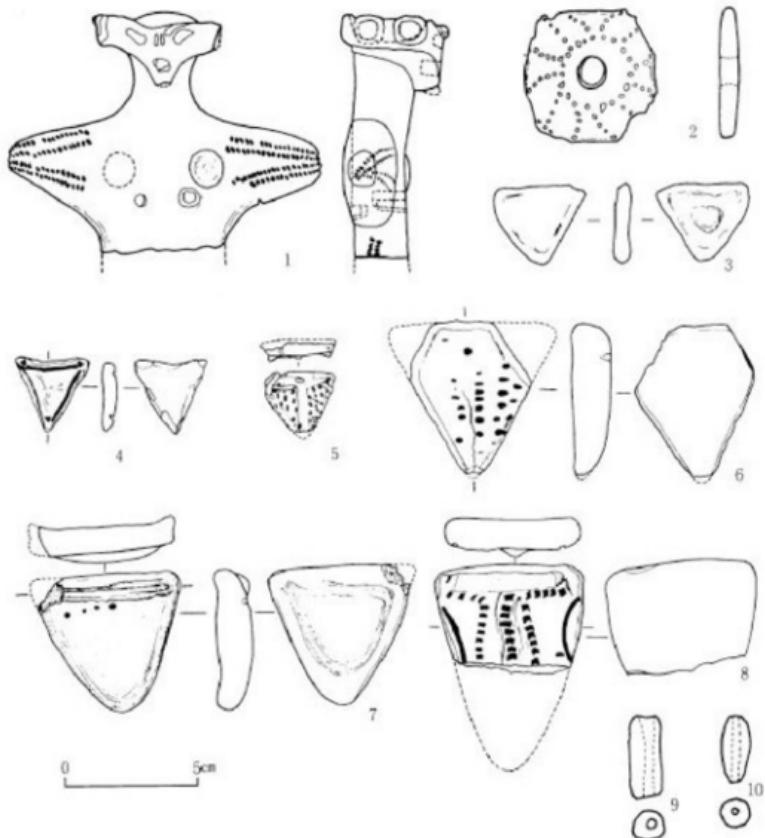
第6号住居跡から出土した土偶で下半分は欠損している。頭部は丸くくぼんで、耳は粘土を貼りつけ、目、鼻、口は沈線で表現されている。両腕部は4本の燃糸で押圧している。乳部は片方が欠損している。胸部と背部に各二つの穴が穿たれているが貫通はしていない。胎土、焼成は良好である。

有孔円板状土製品 (III-68図2)

表裏に刺突文で孔を中心に放射状に施文されている。復元すると4隅に突起部をもつ土製品である。

三角形土製品 (III-68図3～8)

下堤では三角形土製品が8点出土している。(うち1点はフラスコ状ビット出土)大きさによって2cm～3cm前後のもの(3～5)と5cm～7cm前後の(6～8)とに分類できる。3は焼成が悪くもろいもので正面、背面とも無文であるが背面はくぼんでいる。色調は暗褐色。4は完形品で、大きさは一边3cmの正三角形に近く、各辺が少しくぼんでいる。正面には単純な文様を施している。それは三角形の各角に三角状の穴が斜にあけられ、それらを結ぶように沈線が一本施されている。穴は貫



III-68図 下堀道路A地区出土土偶・土製品

孔していない。背面に文様はない。表面には褐色に近い塗料が塗られている。5は背面が欠けていて正面だけしかわからないが大きさはこの程度のものであったと思われる。平らなもので、三辺とも2.5cm前後の正三角形に近いものである。正面に粘土紐をT字形に貼りつけ、両肩には、その頂点をつむるように粘土紐を貼りつけている。その近くにまるい小さな穴があけられている。左側の穴は貫孔されているように見えるが右側のように貫孔されていなかったと思われる。また三角形の下の頂点に向って走る中心の粘土のはとて、そのあとだけがれて、そのあとだけが残っている。粘土紐外の部分には、先端の尖った工具で、小さな三角形の刺突文を施している。色調で黒色で、

表面にペニガラを塗っている。6は一辺6cm前後の正三角形に近いものであったと思われる。上部の二つの角が欠けており、また正面も風化して文様ははっきりしない。残っている文様等から考えて5に近い文様があったのではないかと思う。背面に文様はない。色調は黄褐色。7は左角が欠けているが一辺5.5cm前後の正三角形に近いものである。上部に一本の粘土紐を貼っている。その下、中央に小さな穴があり、またこの穴の左側にも三個程の穴があるが、小さくまた浅いので人為的なものか否かはっきりしない。背面に文様はないが、図のように三角形に巾の広いゆるやかなくぼみがある。(指で引いたような感じの)。また各角の部分が背面の方に少し曲っている。色調は褐色。8は下の部分が欠けているが、5.5cm×7cm前後の二等辺三角形に近いものであったと思われる。正面には粘土紐を5のように丁字形に貼りつけ、その上に多截竹管状の工具で斜に刺突した文様をつけている。また図のように粘土紐以外の部分にも、それと平行するように同じ工具で同じように文様をついている。また両側には弧状に沈線を施している。色調は茶褐色。

管状土製品(図版9~10)

9は焼成が悪くもろい。長さは約3cmで、中がややくぼんでいる。色調は黄色。10は焼成がよく表面はつやがある。弾丸状で長さは約2.5cmあり、色調は褐色である。

環状土製品(図版18, 13~15)

第6章 緒 言

この遺跡では少なくとも22軒以上の住居跡を確認し、その大部分が複合していることがわかった。住居跡のプランは隅丸方形、楕円形、不整円形などで、ロームを深く掘り込んでつくった住居跡は少なく、比較的プランのしっかりした第4、第7、第11号住居跡からみると基本的な形は方形と思われる。それに機能、用途は、はっきりしていないが屋内施設としてのフラスコ状ビットが1号~6号まで確認され、確実に住居跡内にあり、その住居跡の施設として断定できるのは、第8号、第10号、第13号住居跡である。他のフラスコ状ビットについても屋内施設であった可能性がある。この道路は縄文時代中期前葉から中葉にかけての時期(大木7b, 8a, 8b式、円筒上層b, c式)であり、第7号住居跡を除いてほとんどの住居跡で各時期の遺物が出土している。複合している住居の動きは、東西に沿う、第5号住居跡—第3号住居跡—第4号住居跡、第17号住居跡—第14号住居跡—第11号住居跡、南北に沿う、第8号住居跡—第9号住居跡、第15号住居跡—第16号住居跡、のように認識できるが、前記のことを考え合わせると、同一時期に存在した住居跡の確認は慎重に検討しなければならない。具体的に住居跡群は台地の端に沿う南北への広がりを思わせる。遺跡の範囲は南北200m、東西150mほどであると考えられる。遺物の中に北陸方面の土器、新潟県馬高遺跡等から出土しているような三角形土製品がみられる。今後、この時期ならず、こうした交流関係をも検討していくかねばならない。

第Ⅳ章 下堤遺跡B地区

第1節 B地区的概観

この地区は、本台地の南西端にのびる、舌状部にあり本遺跡では最も南に位置し、A地区より直線距離にして約300mほど離れている。A、C地区に比べ最も見晴らしの良好な地区で、南にある小阿地（坂ノ上遺跡）台地とは、奥深く東側に入り込む沢（水田）を隔てて近接している。

遺跡の範囲は、南北160m、東西120mの範囲内にあると考えられる。出土遺物は大木10式期を主体とする縄文時代中期の末葉に位置づけられ、住居跡のプランはA地区の住居跡に比べ小型化し、炉は複式炉の形態を持ち、住居跡は5軒確認している。

第2節 住居跡と出土遺物

S34J10の住居跡（IV-1図）

このグリッドから発見された住居跡は径2.65mのほぼ円形に近い形をなす小形のものである。ローム面の掘り込みは15cm前後で、床面は硬く良好である。

炉は住居跡の西よりにあり、埋甕と、それに接してコの字形に川原石を配置した、いわゆる複式炉である。埋甕の周囲と石画の一部に焼土があり、また埋甕内部より多くの木炭が検出された。

柱穴は主なもの4個（不規則）と、周壁及びその近くに9個認められたが、全体として浅いものである。

また北西壁付近に2個の敲石が並べて置かれ、東側には1個の川原石があり近くに薄い焼土が見られた。他に床面に接して土器片が発見された。埋甕の土器は大木10式土器である。覆土から炭化物が多く検出された。

出土遺物

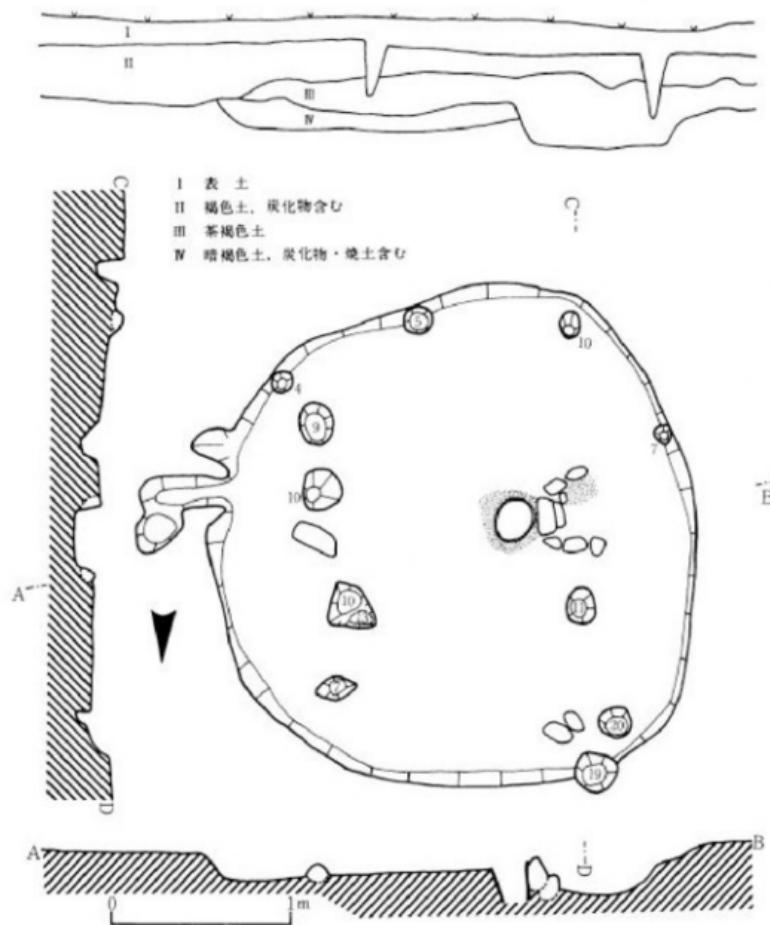
土器（IV-2図）

口径24cmを測る胴部がやや膨る深鉢形の土器である。L Rの単節斜縄文の地文を磨消して、「C」字、逆「C」字状文を単位とした文様構成である。胴下半部には波状の凹線がめぐっている。器厚は比較的薄く、胎土・焼成は良好である。

S26E10住居跡

このグリッドを中心に発見された住居跡は確認された壁より推定すると、略々3.5mの径をもつ円形のプランをなすものであろう。床面は比較的軟弱で、南壁は少し不明確な所がある。北西隅壁から内部床面に向って、漸次傾斜する箇所は、第2次調査で確認された第2号住居跡の施設と同様な性格をもつものと思われる。

炉は住居跡の南よりにあり、南北120cm、東西100cm、深さ50cmほどのピットと埋甕からなっている。ピット内に川原石2個があり、いわゆる複式炉と呼んでよいものであろう。焼土は埋甕の南側

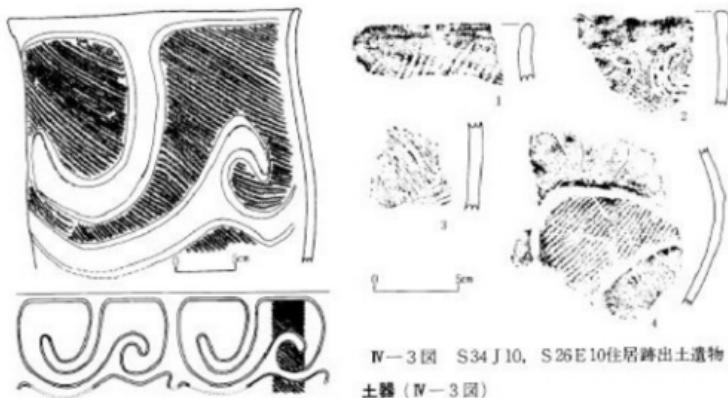


N-1図 S34 J 10住居跡

に少しあるのみである。

柱穴は南西隅に1個確認しただけである。覆土から磨製石斧1, 石鉗2, それに大木10式土器の土器片が出土した。

出土遺物



IV-3図 S34 J 10, S26 E 10住居跡出土遺物
土器 (IV-3図)

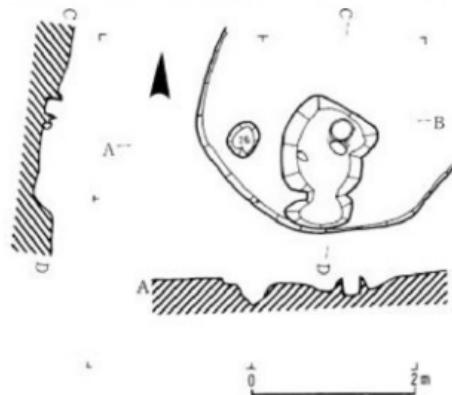
IV-2図 S34 J 10住居跡出土遺物
部である。彌状工具によって流水文が施されている。器厚は比較的薄く、胎土には小砾を多量に含む。4は磨消繩文を施した土器で、文様は「C」字状に展開すると思われる。

2, 3は同一個体の土器で2は深鉢形土器の口縁
部である。彌状工具によって流水文が施されている。器厚は比較的薄く、胎土には小砾を多量に含む。4は磨消繩文を施した土器で、文様は「C」字状に展開すると思われる。

S42 J 5住居跡 (IV-6図)

第五次で調査した、大木10式の埋甕をもつS34 J 10住居跡の南側で、円形プランを呈する直徑約3.4mの、ローム面を15~20cm掘り込んで竪穴をつくっている小規模な住居跡である。

炉は住居跡の中心より多少、北側に位置し、埋甕に接してビット(径60×深さ30cm)と河原石(径30cm)が立てられた状態で配置されている。S34 J 10住居跡のようなコの字形に石を配した複式炉

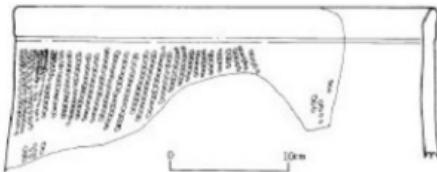


IV-4図 S26 E 10住居跡

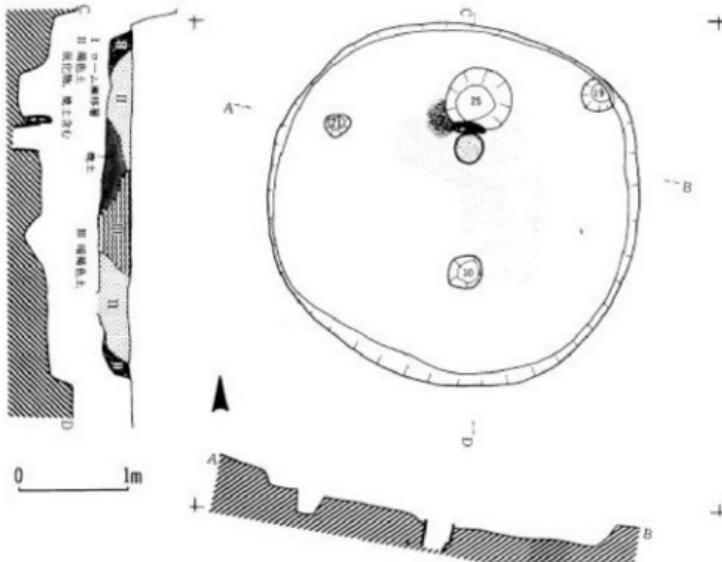
ではないが、複式炉の一形態と考えられる。柱穴は三つ確認し、深さ20cm前後の浅いものである。他に柱穴と考えられるビットは発見できなかった。床面は硬く良好であり、床に接して広範囲に施土と灰化物が散布していた。埋甕内部に炭化物、焼土が詰っており大木10式の土器である。埋甕に接している河原石の他に石等のぬき取られた痕跡は認められなかった。

出土遺物 土器 (IV-7図)

住居跡埋甕がの中に逆さに埋設されていた土器である。胴下半部は欠損している。口縁部が若干外反し、胴部がややや脹る深鉢形の土器で、文様は4単位で構成され、地文のL Rの単節斜縞文を大胆に磨



IV-5図 S26E 10住居跡出土遺物



IV-6図 S42J 5住居跡

消して「S」字状文を横方向に展開している。器厚は薄く、胎土は良好であるが部分的に黒色を帶びている。

S33J 10住居跡 (IV-8図)

分布調査の際発見されたS33J 10グリッドの堀と焼土が、住居内のものか否か確認すべく、上区西側S34A 10グリッド及びS34A 9グリッド、北側S33J 9グリッドを拡張し調査した。調査の結果、複合する2軒の住居と埋甕が見つかった。S33J 9グリッドの住居をA住居、S34A 9グリッドの住居をB住居と仮称することにする。BはAの床を掘りこんでつくられ、B住居のはうが、A住居より新しいものである。床面のレベルは、B住居のはうが低い。埋甕付近とその北側の、

床は堅く、壁もしっかりしており、確実にプランを把握できたが、A住居の南西部分は、壁、床軟弱のため、プランがぬがんってしまった。またS34 A10グリッド南側に壁が見つかったが、その走る方向から、Aの住居のものとは考えにくいものである。この部分も、はっきりしなかった所であるが、上述2軒の住居の他にも住居が切りあっている可能性がある。埋甕炉は、A住居に伴なうもので、大木10式期の深鉢形土器が使用されている。焼土の範囲は東西55cm、南北56cm、厚さ10cmでそのほぼ中央に底部のない土器が、口縁を下に埋めてあった。焼土中には、灰及び、黒褐色の粘性のある土、炭の混入が見られ、かたくしまっている。土器の周囲には1cm~1.5cm巾で、比較的バサバサした黒灰色の土が、廻っている。S34 J10発見の小住居の埋甕でもみられる現象である。A住居の埋甕では、完全に一周せず、所々で焼土と接している点が、多少の相異であるが、S33 J10グリッドの埋甕と焼土はA住居の床面より浮いた状態にあった。焼土は混入物が多く、軟らかく2次的な堆積と考えられる。

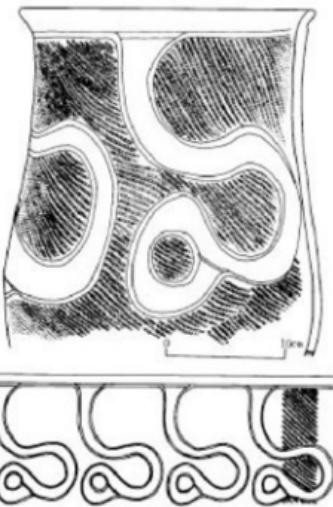
この地域で台付土器が出土している。

出土遺物

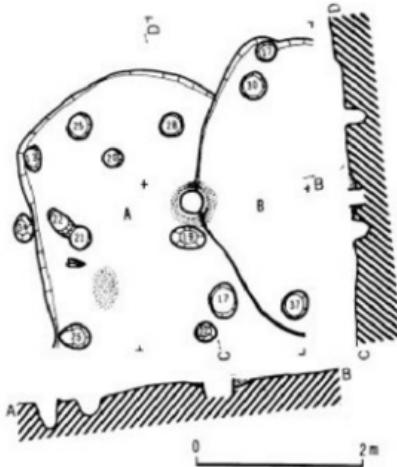
土器 (N-9, 10図)

N-9図は口径31cmを測る深鉢形土器である。RLの単節斜縞文を磨消して横方向に「S」字状文を展開する文様構成である。胎土は良好である。

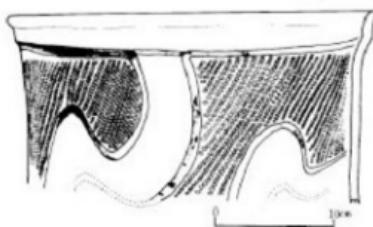
N-10図1、2は深鉢形土器の口縁部で、口縁は無文帯になっている。縞文はRLである。4は深鉢形土器の両部破片で、凸縁をめぐらし、下方には



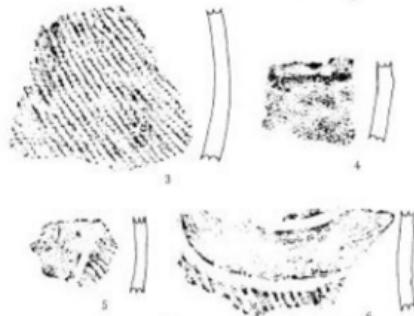
N-7図 S42 J 5住居跡出土遺物



N-8図 S33 J 10住居跡



IV-9図 S33 J10住居跡出土遺物



IV-10図 S33 J10住居跡出土遺物

捺糸文が施されている。5、6は深鉢形土器の腹部破片でR Lの単節斜縞文の地文を磨消して文様を表出している。

下堤遺跡B地区出土遺物

土器 (IV-11図, 12図1~4)

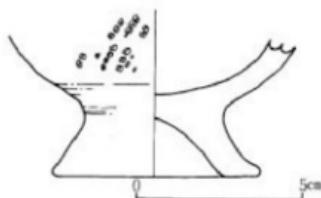
IV-11図は台付土器である。体部には複節斜縞文を施している。IV-12図1、4は深鉢形土器の腹部破片で、R Lの単節斜縞文を地文として磨消して施されている。2は深鉢形土器の口縁部で口縁は無文帶である。縞文はL Rである。

下堤遺跡B地区出土石器・石製品

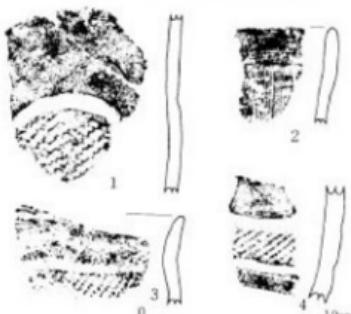
石器

磨製石斧 (IV-13図1~2)

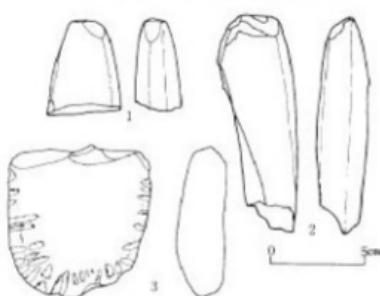
B地区出土の石器は非常に量が少なく、



IV-11図 下堤遺跡B地区出土遺物



IV-12図 下堤遺跡B地区出土遺物



IV-13図 下堤遺跡B地区出土石器・石製品

磨製石斧2点であり、いずれも欠損している。石質は1は泥岩、2は片岩である。

石製品 (N-13図3)

凝灰岩で黄灰色を呈し、両側端部に割込みを施してあるが用途ははっきりしない。

第3節 結　　び

遺跡は下堤台地で一番南側にあり、舌状に南西にのびた台地の先端部にある。この遺跡からは住居跡5軒確認された。その大きさは直径3m前後を計り、平面形は円形あるいは梢円形をなし、炉の位置は壁よりにあって、その構造は簡単な石囲い炉の外に土器を埋めるいわゆる複式炉である。時期は大木10式期である。現在のところこの遺跡からは住居跡以外の遺構は確認されていない。丁度谷をへだてた南側にこれと同時期の坂ノ上遺跡Aがありそこは土塙群を中心とした遺跡であり、それと関連づけて考える必要があろう。

住居跡の覆土からは土器の量が少なく、完全な土器は炉の外に埋めた土器程度である。これと対象的に土塙群のある坂ノ上遺跡Aからは多量の土器が発見されているのである。以上のことから、この時期になると土器の発達及び土地利用の仕方に変化のあったことが予想されるのである。

この遺跡の範囲は遺物の出土状態から見て東西約100m、南北80m前後と推定される。

下堤遺跡A・B地区住居跡炉跡一覧表

住居No	ブラン	炉跡位置	焼土状態
1号	隅丸方形	石圓炉 中央	炉内北側に若干
2号	不明	埋甕炉 南寄り	良好(厚さ10cm)
3号	隅丸方形?	地床炉 北西寄り	楕円状
4号	隅丸方形	埋甕炉 中央	円形に厚さ8~12cm
5号	不整隅丸方形	石圓炉 北西寄り	5cmほどの厚さで、まばらに分布
6号	隅丸方形?	地床炉 東南寄り	長方形に厚さ4~5cm
7号	隅丸方形	石圓炉 南寄り	中央と北寄りに分布厚さ5cm
8号	隅丸方形?	地床炉 中央	円形に少量分布している。
9号	隅丸方形?	埋甕炉 北寄り	円形に多量に分布厚さ6cm
10号	長楕円形	埋甕炉 中央	台状に分布、良好で硬質である
11号	隅丸方形	石圓炉 東寄り	焼土2重に分布している
12号	楕円形	石圓炉 東寄り	少量
13号	不整隅丸方形	石圓炉 南寄り	中央を除き、多量に分布する
14号	隅丸方形	埋甕炉 北東寄り	多量に分布する。厚さ5~8cm
15号	不整楕円形	埋甕炉 北寄り	円形に多量に分布
16号	楕円形	埋甕炉 中央	楕円形、中央寄りに多量に分布
17号	不明	地床炉 東寄り	円形に少量
N23E10 住居跡	不 明	石圓炉 (石圓+埋甕(A))	良好
N13E1	不 明	埋甕炉	円形に多量に分布している
S6E10	円 形		

下堤遺跡B地区

S34J10 住居跡	円 形	石圓+埋甕 (複式炉)	西寄り	良好
S26E10	円 形?	埋甕炉 (複式炉)	南寄り	
S42J5	円 形	埋甕炉 (複式炉)	北寄り	
S33J10	A 楕円形?	埋甕炉	中央	円形に多量に分布する
	B 楕円形?	不明		

第V章 下堤遺跡C地区

第1節 C地区の概観

前述したA地区より真東へ約200m地点を中心とした地域である。東から西に四つの舌状台地が伸びている地形上に本遺跡は分布しているが、C地区は南北に入り込む沢部であり、A・B地区とは異なり、見はらしの悪い地峡部に占地している（第I-3図）。

第5次調査によって、本地区が土師器を出土する遺跡であることが確認され、その範囲は東西80m、南北120mであることが明らかになった。

調査地区的層序は表土（腐鍾土、第1層）、茶褐色土（第2層）、ローム層（地山）でA、B地区に比べ層厚は薄くなっている。最東端にあたるN-8およびN-19グリッドでは急激に沢部に傾斜する地形であり、第2層の下に、第3層（黒褐色土、厚さ48cm）、第4層（粘質黑色土、厚さ21cm）がみとめられ、第3、4層からは縄文中期～後期にかけての土器片が僅かではあるが出土している。

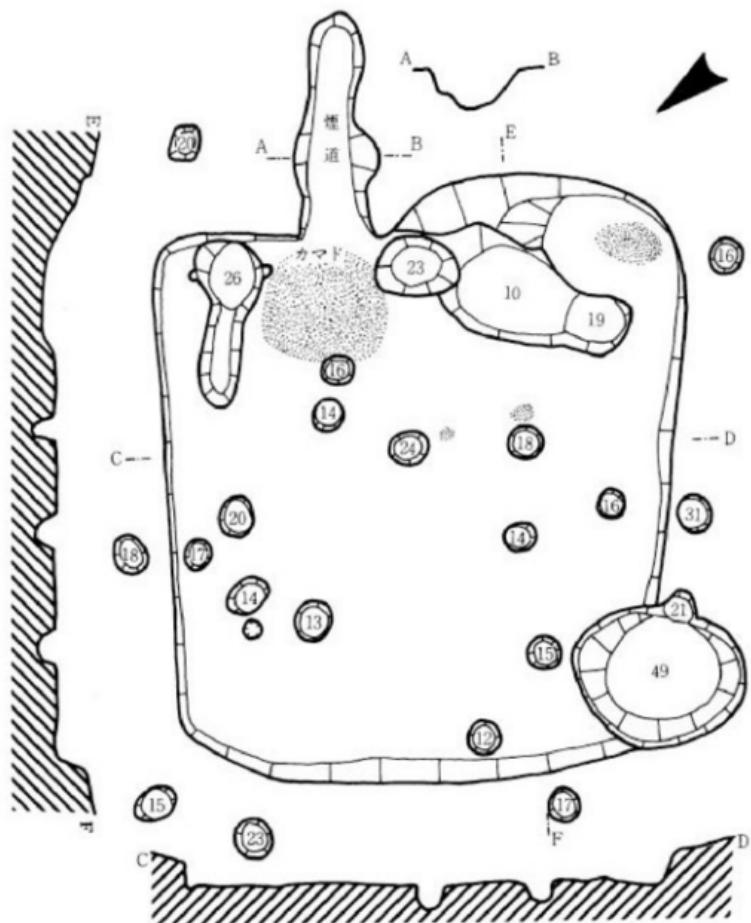
本地区もA、B地区と同様に、葦、小灌木が生い茂り、長年に渡って土取り場となっていたため土層にもかなりの擾乱がみとめられ、特に住居跡を検出した北西地区では、ローム層上面まで土取りが行なわれていた。

第2節 住居跡と出土遺物

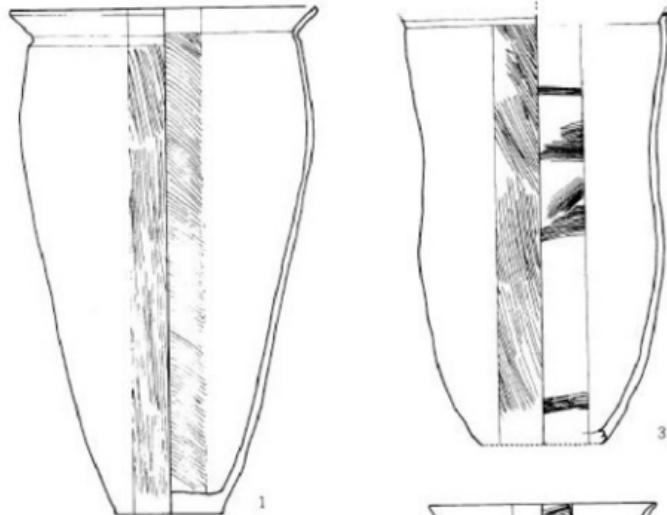
第5次調査で検出した土師器を伴う竪穴住居跡である。1棟のみN-7、N-8グリッドにかけて検出した。南北4.08m、東西4.03mではば正方形を呈し、住居面積は約16.4m²である。東壁や北寄りの個所に長さ1.7m、平均幅50cm（煙出し部38cm、深さ28cm）の突出した煙道を有するカマドが付設されている。カマド袖部は明らかにできなかったが、焚口部には径約1mの円形プランの焼土がみとめられ、厚さ10~15cm、鍋底状の断面を呈している。煙道は焚口より60cm地点で南北にふくらみ、煙出し部に多量の粘土が張りつけられていた。煙道内部の焼土は比較的少なかった。壁は四辺とも比較的良好に遺存しており、東壁が傾斜をもって立ち上る他はほぼ垂直で深さ24cm前後である。床面はほぼ平坦で中央部分は比較的固く、いわゆる踏み固めの状況がみとめられた。柱穴と考えられる円形の小ビットが床面及び、壁外で22個検出しているが、他にカマド袖部及び住居壁を掘り込んでいる時期的に新しいと考えられるビットもあるため、すべてを柱穴と考えることも問題であり、その組み合せ等については不明と言わざるを得ない。周溝はみとめられない。出土遺物は鉄製品（刀子）1点、他は全て土師器である。

住居跡出土遺物

1（V-2図） 口縁部が「く」字状に外反する土師器甕である。口縁内外面は横ナデが行なわれており、体部外面は継ぎ、内面は斜位のカキ目が施されている。全体に凹凸がみとめられ、輪積み（巻き上げ）で成形している。胎土、焼成ともに不良である。

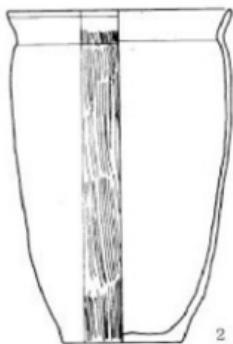


V-1図 下堤遺跡C地区住居跡

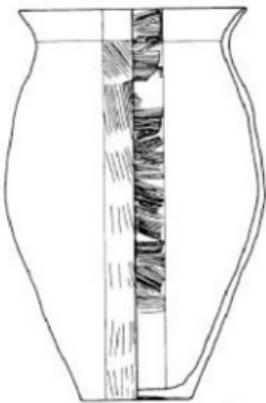


1

3



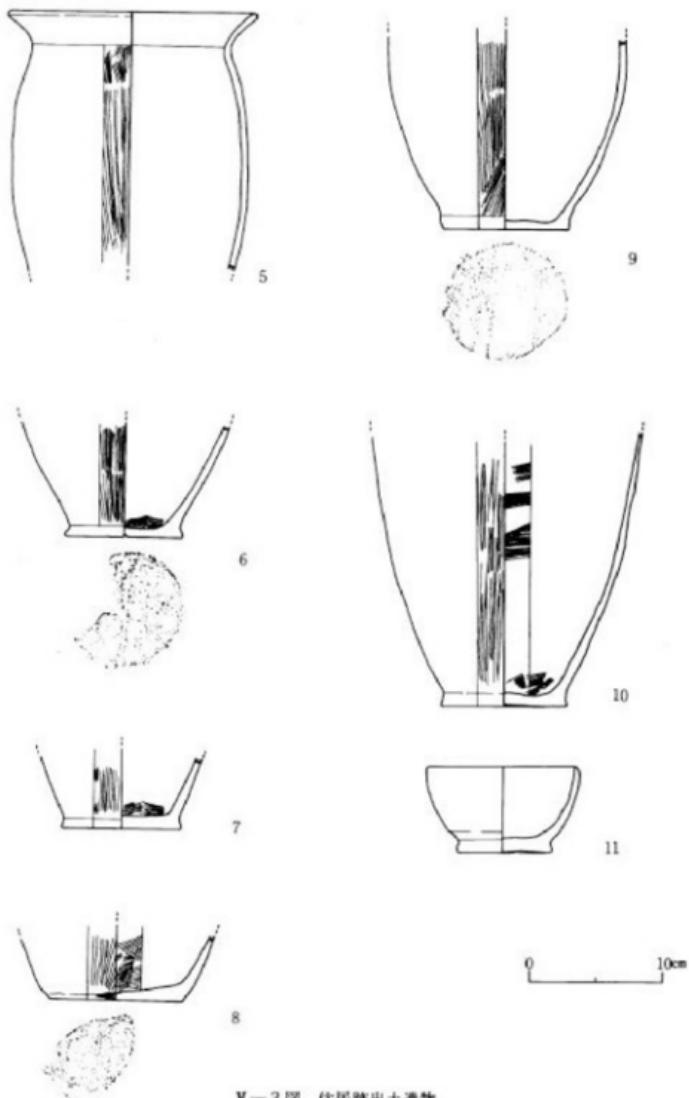
2



4

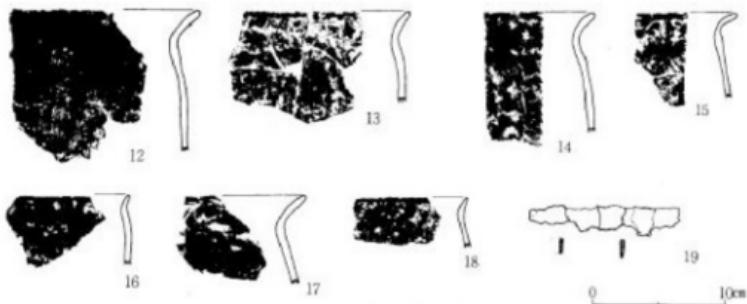


V—2図 住居跡出土遺物



V-3図 住居跡出土遺物

- 2 (V-2図) 口縁部が「く」字状に外反する土師器甕である。口縁外面は横ナデが行なわれており、体部外面は縱位（方向は下から上に工具を動かしている）のカキ目が施され、体部内面は炭化物の付着がみとめられ、ナデが行なわれている。胎土には小礫が混入しており、焼成も不良である。全体に凹凸がみとめられ輪積み（巻き上げ）で成形している。
- 3 (V-2図) 体部外面は縱位、内面は横位の細かいカキ目を施した土師器甕である。口縁は内外面とも横ナデを行っており、巾 0.5cm 程の沈線が頸部に回る。胎土には小礫が混入しており、焼成も不良である。体部中央でくびれ、下半でわずかにふくらむ。全体に凹凸がみとめられ、輪積み（巻き上げ）痕跡が顕著である。
- 4 (V-2図) 「く」の字状に外反する口縁を有する土師器甕である。口縁外面は横ナデを行っており、体部外面は縱位、内面は口縁まで横位、斜位のカキ目が施されている。底部外面は木葉痕がみとめられる。全体に輪積み（巻き上げ）痕跡が顕著である。胎土、焼成はやや良好である。
- 5 (V-3図) 「く」の字状に外反する口縁を有する土師器甕である。内外面ともに磨滅が著しいが体部外面は縱位のカキ目、口縁部外面及び内面はナデが行なわれている。胎土、焼成とともに不良である。
- 6 (V-3図) 体部外面に縱位のカキ目、内面は底部を除きナデを行なっている土師器である。底部外面には木葉痕がみとめられ、内面にはカキ目を施している。胎土には砂礫が多いが焼成は良好である。
- 7 (V-3図) 体部外面に縱位のカキ目、内面は底部のみに横位のカキ目を施している土師甕である。胎土には小礫が多く、焼成も不良である。
- 8 (V-3図) 体部外面は縱位、内面は横、斜位のカキ目が施されている土師器甕である。底部には木葉痕がみとめられる。胎土に砂が混入しているが、焼成はやや良好である。
- 9 (V-3図) 体部外面は縱位のカキ目、内面はナデを行なっている土師器甕である。底部には木葉痕がみとめられる。胎土、焼成ともに不良である。
- 10 (V-3図) 体部外面は縱位、内面は横位のカキ目が施されている土師器甕である。器体全体に凹凸がみとめられ、輪積み（巻き上げ）痕跡が顕著である。焼成は比較的良好であるが、胎土は砂礫が混入している。
- 11 (V-3図) 内黒の土師器杯である。ロクロは使用しておらず甕を作る方法と同様で、輪積み（巻き上げ）で成形している。底部は一見台付杯のようであるが、甕にみられる円盤状底部であり、非常に厚く、体部の立ち上り付近にはカキ目がみとめられる。胎土には多量の砂が混入しており、焼成も不良である。
- 12 (V-4図) 「く」字状に外反する口縁を有する土師器甕である。体部外面は縱位のカキ目が施され、内面及び口縁部にはナデが行なわれている。胎土に小礫が混入している。



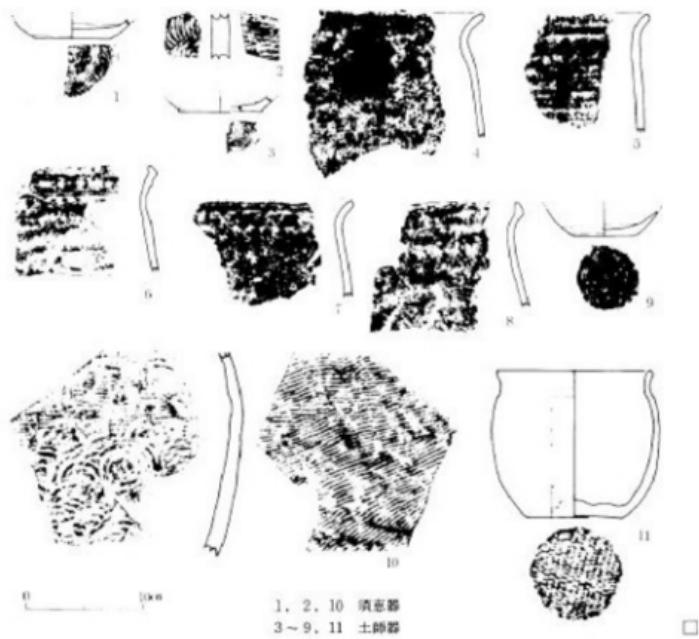
V-4図 住居跡出土遺物

- 13 (V-4図) 「く」字状に外反する口縁を有する土師器甕である。口縁は横ナデが行なわれている。体部外面は楕位、内面は粗い横位のカキ目が施されている。胎土、焼成は良好である。
- 14 (V-4図) 「く」字状に外反する口縁を有する土師器甕である。口縁は横ナデが行なわれ、体部外面は楕位、内面は横位のカキ目が施されている。胎土、焼成とともに良好である。
- 15 (V-4図) 強く「く」字状に外反する口縁の土師器甕である。体部外面は斜位、内面は横位のカキ目が施されている。
- 16 (V-4図) 口縁の外反の小さい土師器小形甕である。口縁は横ナデが行なわれ、体部内外面は斜位のカキ目が施されている。
- 17 (V-4図) 強く「く」字状に外反する口縁の土師器小形甕である。体部外面には斜位のカキ目が施されている。
- 18 (V-4図) わずかに「く」字状に外反する口縁の土師器小形甕である。体部外面は口縁から楕位のカキ目が施されている。
- 19 (V-4図) 住居跡東壁北側で、床面に突きささる状態で床面上3cm浮いた個所で出土した鉄製の刀子である。全長11.1cm、巾2.8cm、厚さ0.8cmを測り、腐蝕が著しい。全体に僅かなソリガミとみられる。

第3節 その他の出土遺物 (V-5図)

1~3はC地区住居跡外の出土であり、4~11は第3次調査(昭和45年)、第4次調査(昭和46年)において、A地区より出土したものである。

- 1 N6J1グリッド出土の須恵器杯である。回転ヘラ切りで再調整はない。胎土には砂が混入しているが、焼成は良好である。
- 2 N13E1グリッド出土の須恵器甕胴部破片である。外面にタタキ板痕、内面にアテ板痕がみられる。外面には薄く自然釉がかかり、胎土には小櫻が混入している。



V—5図 その他の出土遺物

- 3 N15 J グリッド出土の非内黒土師器杯底部である。回転糸切りで再調整はない。この種の遺物は他に3点出土しているがいずれも小片である。
- 4 「く」字状に外反する口縁を有する土師器甕である。輪積み(巻き上げ)で成形し、外面に縱方向のカキ目を施している。胎土には小礫が混入し、焼成は良くない。
- 5 「く」字状に外反する口縁を有する土師器甕である。口縁部には横ナデがみとめられ体部外面は継、内面は横位のカキ目が施されている。胎土には小礫が混入し、焼成は不良である。
- 6 口縁が外反し、更に垂直に立ち上る土師器甕である。内外面ともロクロ痕跡がみとめられる。胎土には小礫が混入しているが、焼成は良好である。
- 7 「く」字状に外反する口縁を有する土師器甕である。体部外面には斜位、内面には横位のカキ目が施されている。
- 8 口縁が外反し、更に垂直に立ち上る土師器甕である。体部外面にはロクロ痕跡がみとめられるが、内面は磨滅しており鮮明でない。

- 9 回転糸切り、再調整のない非内黒の土師器杯である。体部外面は磨滅が著しい。
- 10 外面は葉脈状のタタキ板痕、内面は同心円状と葉脈状のアテ板痕のある須恵器腹胸部破片である。胎土、焼成とも良好である。
- 11 6Fグリッド出土の小型土師器甕である。口縁はゆるく外反し内外面とも横ナデが行なわれて内面には煤状炭化物が付着している。体部外面は下半にヘラケズリを行った後全体に概位のカキ目が施され、内面は底部を除き、ナデが行なわれている。底部外面には網代痕がみとめられ、内面は粗くヘラで胎土をケズリ取っている。胎土、焼成ともに良好である。

第4 節 結 び

以上で述べた住居跡内出土遺物、その他のC地区、A地区出土遺物について土器を中心に概観してみる。住居跡内出土土器はすべて土師器であり、ロクロ使用のものはみとめられず、ほとんどが口縁が「く」の字状に外反するカキ目の施された甕である。胎土、焼成とともに不良であり、全体に粗雑な造りである。その他のC地区、A地区出土土器も同様な土師器甕が主体であるが、ロクロ使用の土師器甕、回転糸切りの土師器杯、若干の須恵器の出土があり、住居跡内出土土器とわずかその様相が異なる。

これらの土器の年代については出土層位、出土地点も各々異なり、一概には述べられないが、住居跡出土の甕は秋田城跡築地崩壊土出土のものと形態的にも技法的にも類似しており、9世紀後半頃と考えられる。又、回転糸切り再調整のない非内黒の土師器は、多賀城跡¹⁾、秋田城跡出土²⁾の須恵系土器と類似するものであり、11世紀頃と考えられる。

以上の点からC地区、A地区検出の遺物、住居跡は平安時代後半と考えるのが妥当であろう。

- 1) 「秋田城跡発掘調査概報」 昭和49年
- 2) 「宮城県多賀城跡調査研究所年報」 昭和46年
- 3) 「秋田城跡発掘調査概報」 昭和48年
- 4) 桑原温郎「歴史」 一ロクロ土師杯について 39号 昭和44年
工藤雅樹、桑原温郎「考古学雑誌」 一東北地方における古代土器生産の展開一 57巻3号
昭和47年

遺構・遺物確認グリッド一覧表

N 地区		遺 構			遺 物		S 地区		遺 構			遺 物	
グリッド名	住	ビット	溝	縦文	土師	グリッド名	住	ビット	溝	縦文	土師	グリッド名	住
N2J1	—	—	—	—	○	S1J5	—	—	—	○	—	S2J10	—
N2E10	○	—	—	—	○	S2J10	—	○	—	○	—	S6J10	—
N4J1	—	○	—	—	○	S6J10	—	—	—	○	—	S12J5	—
N5J5	—	—	—	—	○	S12J5	—	—	—	○	—	S15J10	—
N5J1	—	—	—	○	○	S15J10	—	—	—	○	—	S16J10	○
N6J1	—	—	—	—	○	S16J10	○	—	○	○	—	S25E10	○
N8J1	—	—	—	○	—	S25E10	○	—	—	○	—	S25J10	—
N12E1	○	—	—	—	須恵	S25J10	—	—	—	○	—	S26E10	○
N13E1	○	—	—	○	—	S26E10	○	—	—	○	—	S26J10	—
N13J1	—	○	—	—	—	S26J10	—	—	—	○	—	S29J10	—
N13J5	—	—	—	○	—	S29J10	—	○	—	○	—	S30E10	—
N14E1	—	○	—	—	—	S30E10	—	○	—	—	—	S31J10	—
N14J1	—	—	○	—	—	S31J10	—	○	—	—	—	S33J10	○
N15J1	—	—	—	—	○	S33J10	○	—	—	○	—	S34J10	○
N16E1	—	—	—	—	○	S34J10	○	—	—	○	—	S36J10	—
N17E1	○	—	—	—	○	S36J10	—	—	—	○	—	S44J5	—
N18E1	○	—	—	—	○	S44J5	—	—	—	○	—	S45J1	—
N19E1	—	—	—	—	○	S45J1	—	—	—	○	—	N19J1	—
N19J1	—	—	—	—	○	N20J1	—	—	○	—	—	N21J1	—
N20J1	—	—	—	—	○	N21J1	—	—	○	—	—	N23J1	土壤
N21J1	—	—	—	○	—	N23J1	—	—	○	—	—	N24J1	—
N23J1	土壤	—	—	○	—	N24J1	—	—	○	○	—	N32J1	—
N24J1	—	—	—	○	—	N32J1	—	○	○	○	—	N33J1	—
N32J1	—	○	—	○	—	N33J1	—	—	—	○	—	N34J5	—
N33J1	—	—	—	—	—	N34J5	—	—	—	○	—	N39E1	—
N34J5	—	—	—	—	—	N39E1	—	○	—	—	—	N39J1	○
N39E1	—	○	—	—	—	N39J1	○	—	—	—	—	N41J1	—
N39J1	○	—	—	—	—	N41J1	—	○	—	—	—	N42E1	—
N41J1	—	○	—	—	—	N42E1	—	—	—	○	—	N45J1	—
N42E1	—	—	—	○	—	N45J1	—	—	—	須恵	—		

小 阿 地

坂 ノ 上 遺 跡

坂ノ上遺跡発掘調査報告

第1章 調査の概況

第1節 調査に至るまでの経過

秋田市四ツ小屋小阿地字坂ノ上は、下堤遺跡と同様、古くから縄文土器片、石器、制片等の散布している所として地元の人を始め、考古学愛好者に知られ、そして、古くから畠作がなされているため遺物の収集地域としても知られていた。この遺跡は、昭和43年、下堤遺跡の周辺遺跡として、小阿地・御所野・末戸松本の地区を踏査した際に確認していた。

第6次下堤遺跡発掘調査期間中、地元協力者の話によると、最近、坂ノ上の畠耕作の際、トラクターに石がひっかかり耕作に支障をきたしているとの事であった。早速、現地へ行ってみると畠地内外に、土器片、石(小~大)等が多量に散布し、縄文時代中期末~後期にかけての配石を伴なう遺構の存在が考えられ、畠耕作による遺跡破壊の危険があり、緊急を要していると判断した。下堤遺跡は第6次までの調査により遺跡の範囲、分布等がほとんど確認できたので、昭和49年度は坂ノ上遺跡の調査を実施することにした。

第2節 第1次調査~第2次調査

第1次調査 昭和49年7月1日~8月6日

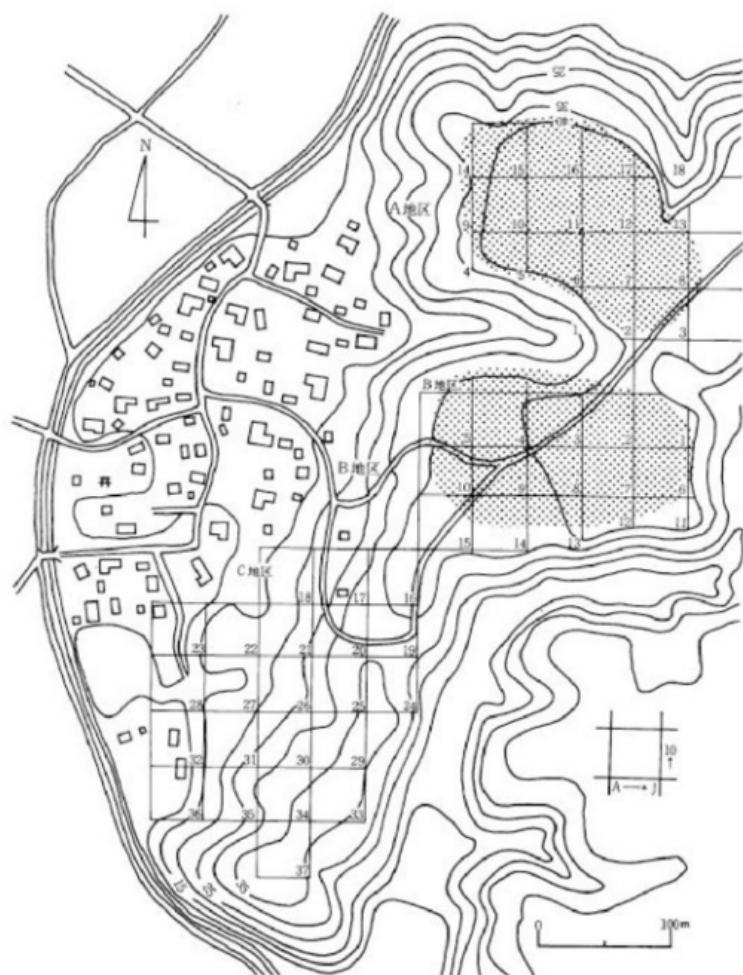
第2次調査 昭和50年5月12日~31日

坂ノ上遺跡の分布調査は、遺跡の所在する台地約75,000m²を昭和49年から3年計画の予定で調査し、北から順序にA、B、C地区に分け進める計画であったが、昭和50年の第2次調査でB、C地区を合せて調査し、一応この発掘で下堤、坂ノ上両遺跡の分布調査を終了することになった。小阿地地区遺跡と言うのはこの両遺跡を総称して呼ぶものである。

第1次調査は、A地区約30,000m²に対処し、調査は遺跡の範囲確認を主体に行なった。調査方法は、A地区的三角点(標高41m)を中心下堤遺跡同様、4m×4mの小グリッドが100入るように40m×40mの大グリッドを18設定し(I-1図)、その中の23カ所について、2m×2mグリッドを決めて完全に発掘し、遺構の確認を行ない、特に三角点周辺は遺物の散布が多いため4m×4mの小グリッドを11カ所、発掘調査し、遺構の確認と性格等を把握することにした。その結果、A地区では畠作でかなり遺物包含層が掘りかえされていたが配石遺構、土壤等を確認することができた。

第2次調査は前述したようにB、C地区(約45,000m²)に37の大グリッドを設定し、分布調査を実施した。B地区は地元で古畠と呼ばれ、かなり古くから畠耕作の行なわれている所で、土地所有者等の話によると大根、長芋等を栽培しているとのことであった。発掘の結果はやはり、ほとんどのグリッドで長芋による擾乱で遺構は検出できずに終った。遺物についてもA地区ほど量ではなく、古

地の北西端に石棒が立った状態で出土したのが注目された。なお、B、C地区を合わせてB地区と呼んでいる。



I-1図 小阿地坂ノ上遺跡A・B地区グリッド設定および遺構分布地形図

第1節 遺跡の位置

下堤遺跡と沢一つ隔てた南側の台地が、小阿地板ノ上遺跡である。遺跡は秋田市から直線距離にして東南へ約7km、奥羽本線四ツ小屋駅より東へ約0.5kmの所に位置する。

調査区には標高41mの三角点があり、舌状台地を形成し、この調査区を東西に国道13号線に通ずる農道が走っている。三角点を中心とする約1,500m²は戦後、開墾された所で、一段高くなっている。



第2節 自然的環境

第3節 周辺遺跡

第2節～第3節は基本的に下堤遺跡と同じである。下堤遺跡・第II章を参照されたい。

第III章 坂ノ上遺跡A地区

第1節 A地区の概観

下堤遺跡と構接する南側の台地が坂ノ上遺跡であり、下堤遺跡B地区(縄文時代中期末葉～)に最も近い所に位置するのがこのA地区である。北西にのびた約20,000m²の舌状台地で、見晴らしが非常によく、ほぼ中央部に標高41mの三角点が設置されている。

このA地区は戦後、開墾された所で造構そのものの破壊はそれ程進んでいない。遺跡の性格を確かめるため発掘調査した三角点周辺約1,500m²は一段高く盛り上っている。調査はあくまでも、遺跡の分布、範囲確認が主体で全体的調査は行なっていないが、縄文時代中期末葉から後期初頭にかけての時期で、配石を伴ない、住居跡、土壙群等が発見され、特に遺物(土器片)の量が夥しく、この遺跡の特性を考えさせられる地区である。

第2節 住居跡と出土遺物 () 内グリッド

A地区貼床住居跡(11A 1)

三角点の北東方向に位置し、表土より30～40cmの深さで確認された貼床の住居跡で、貼床の厚さは約5cm、床面の状態は良好であった。この住居跡は北側の配石遺構、土壙によりこわされている。住居跡全体の規模は径にして約4～5m程と考えられるがプランは不明である。柱穴も含めピットは八つ確認できた。深さ28cmのピットの貼床下より骨片が検出された。炉は未確認である。

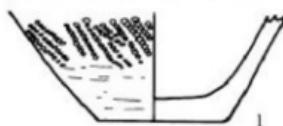
A地区住居跡(11A 1)

前述の貼床住居跡下に確認された住居跡でローム面に造られている。プランは、はっきりしないが比較的浅い溝が東側にみられ、この住居跡の周溝かも知れない。炉は西側に傾斜している埋甕炉(埋甕土器、大木10式)をもつ。

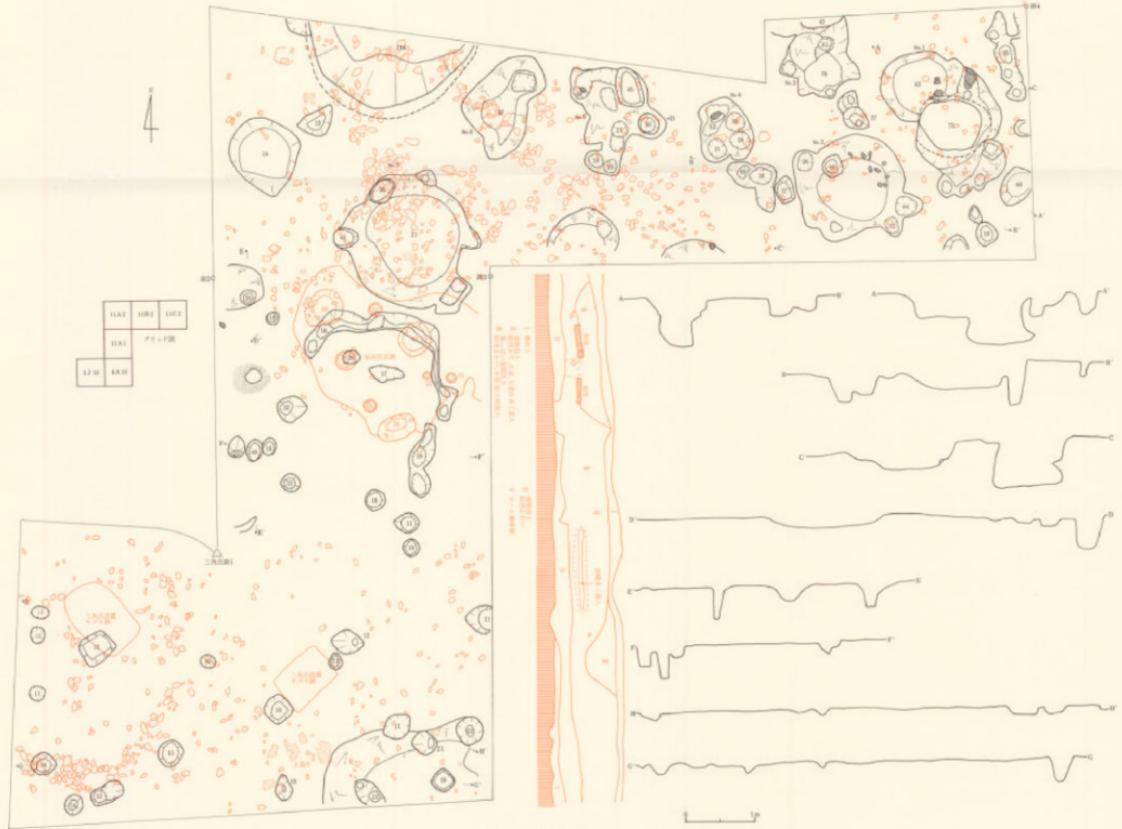
* 調査期間中、大木10式の埋甕が抜き取り盗難に遭い、E～Eの断面図には炉の掘り込みを記載してある。

A地区住居跡(12B 1・7 B 1)(III-3図)

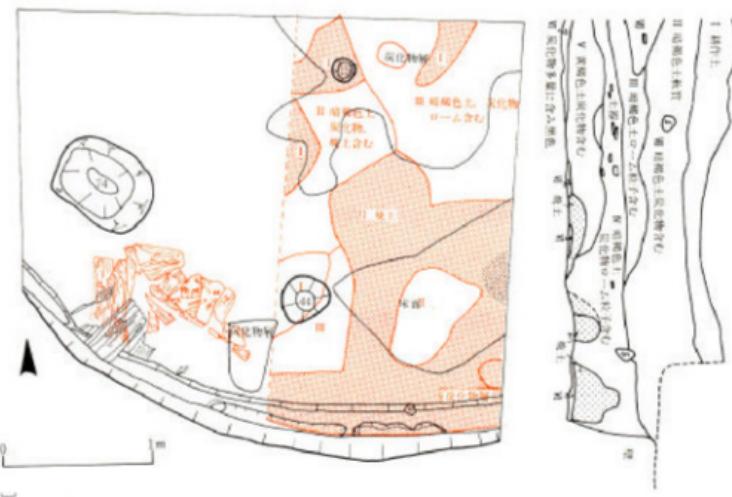
住居跡南壁部分の掘り込みは約60cmではほぼ垂直である。床面の状態は極めて良好で、巾10～20cm、深さ5cmの周溝がめぐり、その周溝の内側には壁に接して巾10cm、深さ25～30cmの掘り込みがある。調査区の東端に床を10cm前後掘り下げた部分があり、焼土も厚く堆積していたことから、炉跡と考えられる。



III-1図 坂ノ上遺跡A地区住居跡(11A 1)出土遺物



III-2図 三角点周辺遺構平面図 住居跡・小堅穴・土壤 配石遺構平面図



III-3図 坂ノ上遺跡A地区住居跡(12B1・7B1)

住居跡内、覆土の堆積状態は軟質の暗褐色土層が上面を覆い、遺物を包含した暗褐色土層の下に粘性の強い黄褐色土層、そして炭化物を密に含んだ層が床全面に5~8cmの厚さで堆積している。住居跡内の各所に焼土がみられ、特に壁際に厚く堆積しており、南西壁壁部に床面より30cm上面に炭化材が検出され、ピットの周りもかなり焼けていること等から火災にあった住居と考えられる。住居跡掘り込み面より33cm離れた覆土上面に土器を伴なう炉が検出された。炉は粘土で作られた面をもち、北側にやや傾斜して土器に接しており、火熱を受けて炉下面および土器のまわりにも焼土がみられた。この炉は住居廃棄後に作られたものと思われる。この住居跡は $\frac{1}{4}$ 程しか調査していないので規模、プラン等は不明である。

出土遺物

土器 (III-4図1~2)

1は小形の壺形土器で、口縁部は二単位の長方形で粘土紐の隆起で区画し、磨かれている。腹部も粘土紐で波頭状に施文し、頭部に純く部分は磨消して、その他は底部近くまでし



III-4図 坂ノ上遺跡A地区住居跡(12B1, 7B1)出土遺物

Rの単節斜縫文が残っている。

小豎穴遺構・土壙 (11A 2・11B 2・11C 2)

No.1 (11C 2)

北西方向に長い（長軸 225cm、短軸 120cm）楕円形で、中央部に径90cm程の掘り込みがあり、袋状を呈している。この小豎穴の2カ所から骨片が出土している。

No.2 (11C 2)

径 150～160cmのほぼ円形の小豎穴で、ピットの部分が張り出している。深さは40cm前後で、骨片が出土している。

No.3 (11C 2)

全面調査はしていない。No.2 小豎穴の北側に位置し、不整形のようであるが全体的に深い遺構である。

No.4 (11B 2)

ほぼ楕円形（リンゴの断面形、長軸 100cm、短軸75cm）で最も深い部分に石がある。

No.5 (11B 2)

不整形（長軸 150cm、短軸 100cm）で西側の深さ48cmの所から石と土器片が出土している。

No.6 (11B 2)

不整形で深さ40cm前後である。

No.7 (11A 2)

円形（径 180cm）でピットの部分が張り出している。浅い鍋底状の小豎穴で、骨片が出土している。No.2 の小豎穴と類似している。

No.1～No.7 小豎穴遺構の覆土については判別できる層序はなく、配石面から底部まで暗褐色土で、焼土、炭化物、土器片、ローム混りで石を含むものである。

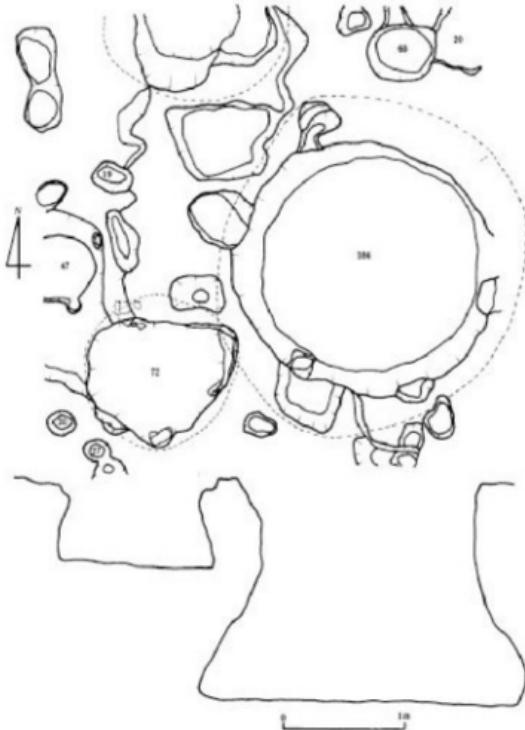
土壙 (11A 2)

グリッドの北側にある土壤で $\frac{1}{2}$ 程しか調査はしていないが、口径 240cm、底径 250cm、深さ 120cmの袋状を呈するものである。

土壙群 (11A 10)(III-5図)

表土より約20cm程掘り下げた黒色土層面の特に東側に多量の礫による配石が認められ、また土器も多量に出土している。遺構はこの黒色土層をさらに掘り下げたローム面に3基程確認されており、1基は配石を取り除いて確認され、東西 220mを測り、深さ約 180cmの円形を呈するものである。配石は本ピットの上部に円を描く形であったが、この面でプランは確認できず、断面においても掘り込みの層は不明だったために本ピットとの関係はわからない。ピット内には、褐色土、黄白色砂層、礫が堆積しており底部はローム層を掘り込み、砂礫層まで達している。1基はこのピットの北西方向に位置し、北壁にかかる全面調査はできなかったが確認できた範囲で径約 120cm、底径約

150cmを測る袋状ピットが検出された。ピット内埋土は褐色土のボソボソした土で、多量の土器が出土している。また上記した遺構の南西部に隣接して、もう1基の袋状ピットが検出された。前述の2基のピットより浅いものである。径120cm、底径130cmを測り、深さは約72cmである。埋土は粘性のある黒褐色土で、底部の壁ぎわや壁に貼りついた状態で拡大の壺や土器片が出土した。その他のピットについてはどのような性格をもつものかは不規則であり、また、各ピットの関係は不明である。これらのピット



III-5図 坂ノ上遺跡A地区土壤群
は深さ5~30cm位のもので、円形あるいは橢円形を呈し、東側に確認された袋状ピットより切られているものもある。これらのピット中より遺物は出土していない。

出土遺物

土器 (III-6~11図)

坂ノ上遺跡A地区出土の遺物は縄文時代中期末葉から後期前葉の頃のものが殆んどであり、遺物の量も非常に多い。

第1類土器 (III-8図1~4)

地文に縄文があり、その上に太い沈線で弧状、渦巻文(1, 4)など施されたもの、3のように隆唇で文様を構成するものがある。この仲間は2のように口縁部あるいは頸部に無文帯があり、胸部に少しふくらみのある器形をなすものが多い。

第2類土器（III—8図5）

口縁部に弁状の把手があり、それに粘土紐の貼付けと、沈線によって構成される文様が施されたものである。1の沈線はこの仲間に近い。器形は深鉢で、四つの弁状把手がつくものである。

第3類土器（III—8図6～16、6図1）

口縁部に無文帯があり、胴部の文様は磨消繩文と、刺突文が施されたものである。磨消繩文の方法は沈線で区画したあとに施文されるものと、最初に繩文が施文されず、沈線で区画された後に繩文の施されたものとがある。また区画が沈線だけのもの(11)と、少し段がついたり、隆帯をなすものとがある。口縁は外反するものが多く、2～4つの把手がつくのが多い。又把手の下に円形に区画され、刺突のあるもの、10のように穴があけられてその周囲を刺突するもの、III—6図1のように無文帯の部分に刺突されるものなどがある。

第4類土器（III—8図17～22）

文様構成は第3類と同様であるが、地文に繩文がなく、区画された中に集脹状文と刺突文が施されたものである。集脹状文の沈線が19のように直線をなすものもある。又22のように小形の土器もある。

第5類土器（III—9図1～4）

特徴的な文様として、大形で深く施された刺突文（工具を少し斜にして刺しこむ）が施されているものである。頭部に沈線で長方形に区画され、その中に繩文が施されているもの(1)で、胴部上半に刺突文が施されるものであろう。2は口縁部破片で、1、3、4とは違った刺突文が施されている。

第6類土器（III—9図5～16、10図9、10）

いわゆる磨消繩文の土器である。区画は沈線と隆帯でおこなわれているもので、第3類と近似するが、刺突のないところが異なる。器形は頭部で少しきびれ、胴部が張るもので一部キャリバー状のくすぐれた形(10, 11)のものなどがある。口縁は平縁か、山形状をなし、その頂部内側に小突出部をつくり出されるのも特徴的である。区画の中には繩文が施されるのが一般的だが、中には羽状をなすものもある(11), 11, 12にはススが付着している。

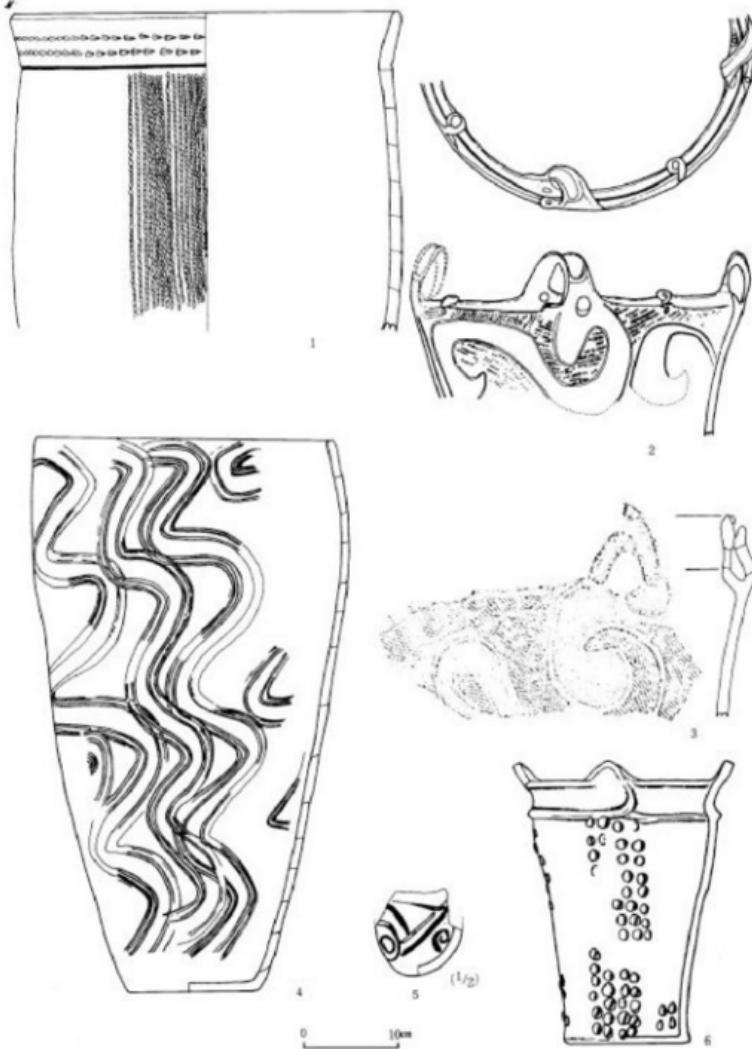
第7類土器（III—6図2～3）

口縁部に無文帯がなく、口縁から繩文が施され、磨消された部分はS字を横にしたようになっている。口縁に深い溝が走り、それを渡る橋状把手が4個付く。2は把手と把手の間に小さい突起があり、その下に穴があけられ、一見8の字状に見える。3の把手には刺突文が施されている。

第8類土器（III—9図17, 18）

口縁部に無文帯があり、頭部に粘土紐を貼付けた隆帯が走り、胴部は繩文及び沈線が施されているものである。口縁の器形に特徴がある。17の胴部の文様は沈線で三画形に区画されるようである。

第9類土器（III—10図1～3）



III-6図 板ノ上遺跡A地区出土遺物

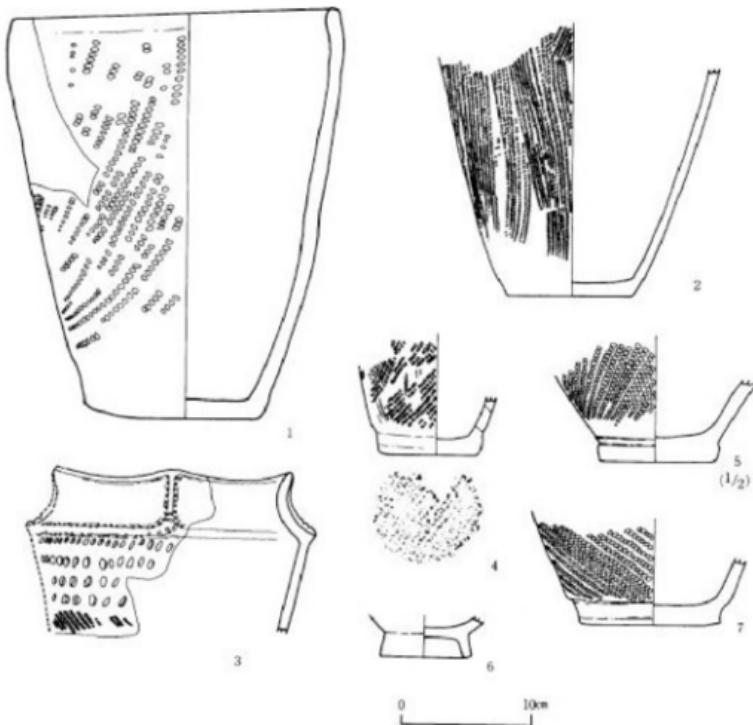
いわゆる十様内1式土器の仲間である。壺形土器の胴部の破片で、色調は黄褐色、褐色をなす土器である。

第10類土器（III-10図4～8）

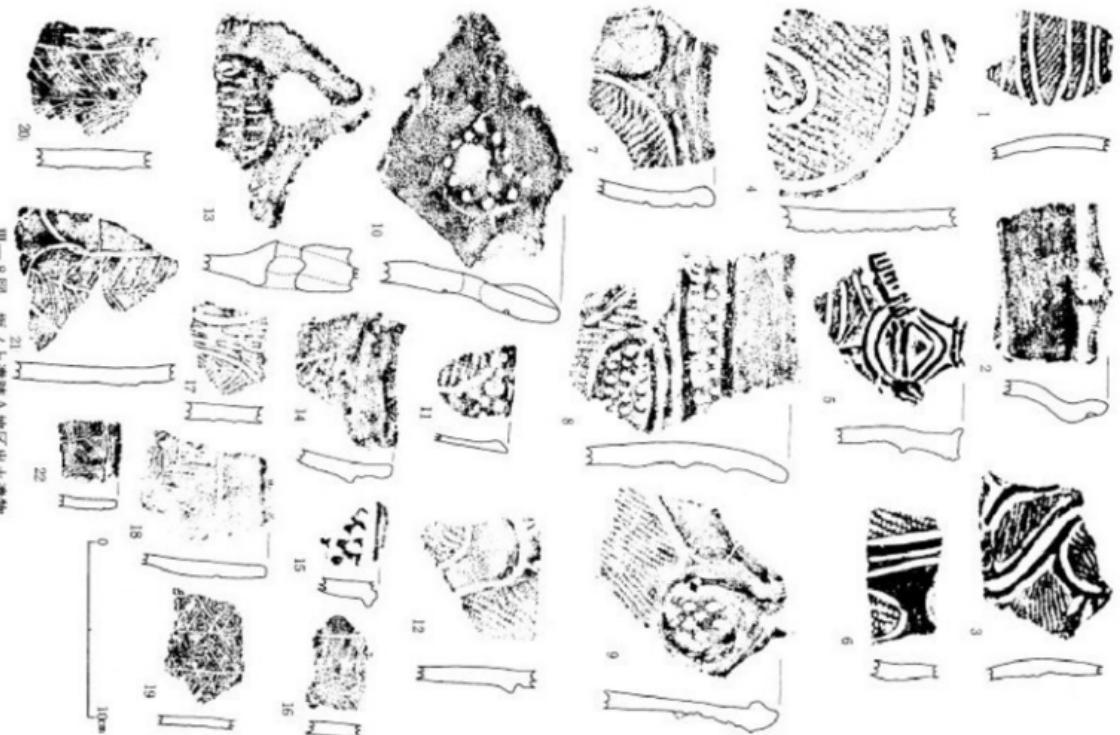
口縁部に無文帯があり、頸部から胴部にかけて幾何学的な文様が施されているものである。口縁部が2～4つの山形口縁をなし、その下に6、8のように8の字様の文様が沈線で施されるのが特徴的である。

第11類土器（III-10図11～15、6図4）

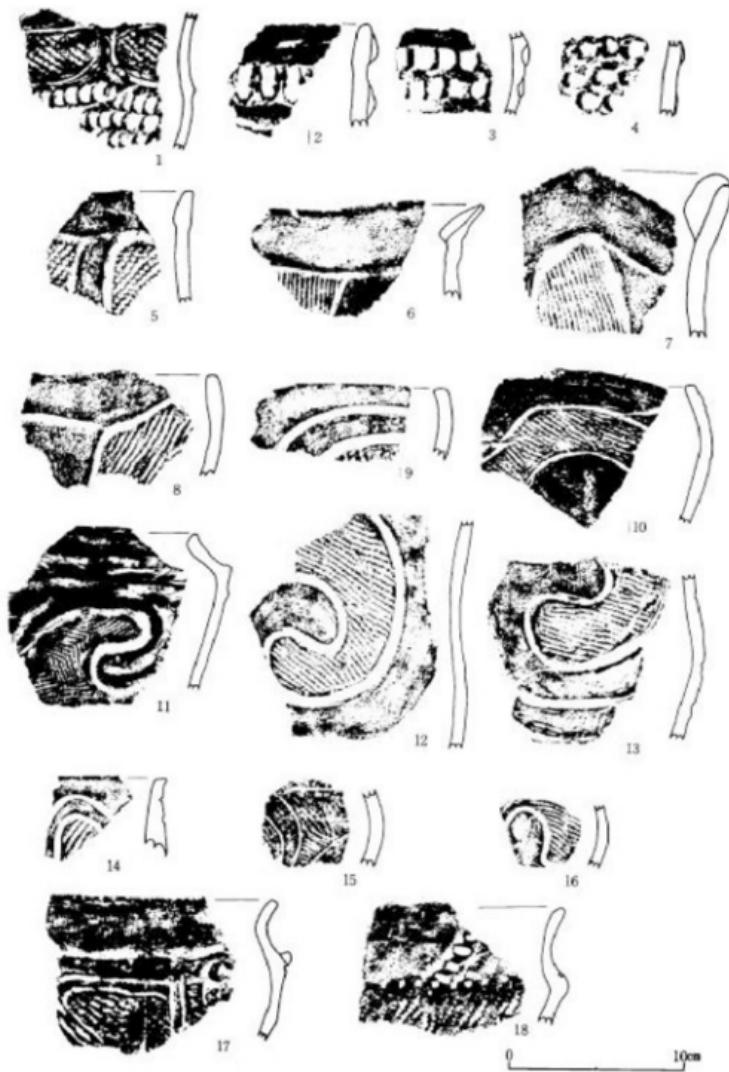
平行沈線によって幾何学的な文様が施されているもので、沈線の中に纏文が施されている（15）。区画された中に施されるもの（13）などがある。12は粗製土器と考えられ、III-6図4と同じ仲間であろう。



III-7図 坂ノ上遺跡A地区出土遺物



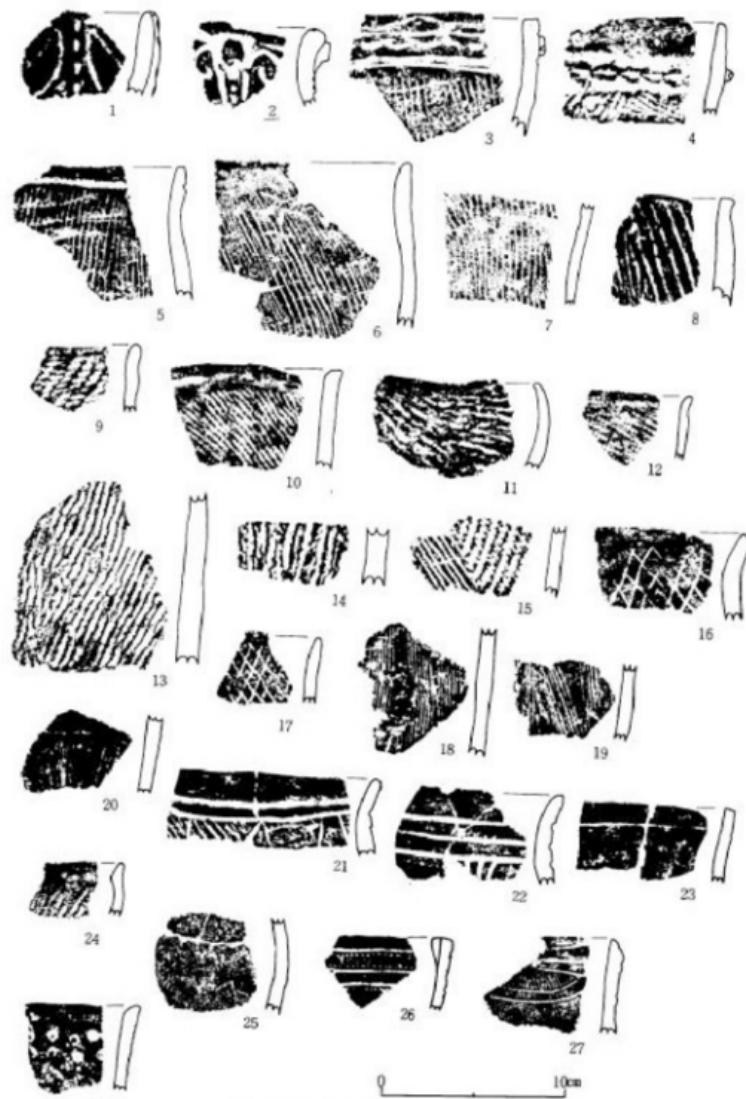
III-8 図 坡ノ上遺跡A地区出土遺物



图—9 国 板ノ上遺跡A地区出土遺物



III-10図 坂ノ上遺跡A地区出土遺物



III-11図 坂ノ上遺跡A地区出土遺物

第12類土器（III-10図16・17）

地文に条痕文が施され、その上に太い沈線で幾何学的な文様が施されているものである。16、17はいずれも胸部上半の破片である。

第13類土器（III-10図18～20、11図1、2）

山形口縁をなし、そこに太い沈線で鉤形の文様が施されるもの（18、9）、又頂部から隆蒂が垂下され、その上に刺突文が施されるもの（11図1、2）などがある。

第14類土器（III-6図4、7図3）

口縁部はゆるやかな波状口縁をなし、頸部で逆「く」の字に内屈し、口縁で外反する。この部分は隆蒂で四つに区画され、その中は無文である。胸部は上半が大形の刺突文（第5類と同様な）が施され、下半には斜纏文が施されているものである。6図6は口縁の突起のある下の胸部に同様な刺突文が縦に4列施されており、他は無文である。

第15類土器（III-10図21、22）

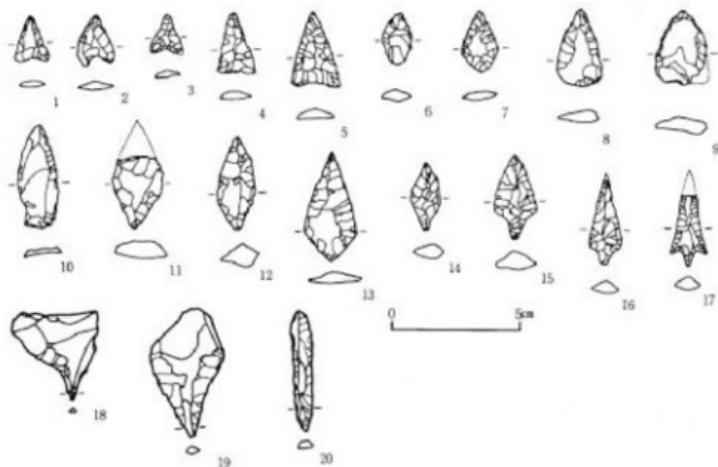
21は口縁部破片でキャリバーをなす。沈線によって格子目文が施されている。

第16類土器（III-11図3～20、24）

口縁部に無文帯があり胸部には織文（13、14、15）、燃系文（3、5、6、7、8、18、19）、網目文（16、17）、沈線（20）、稜格文（10図22）などが施されたいわゆる粗製土器である。

第17類土器（III-11図21～22）

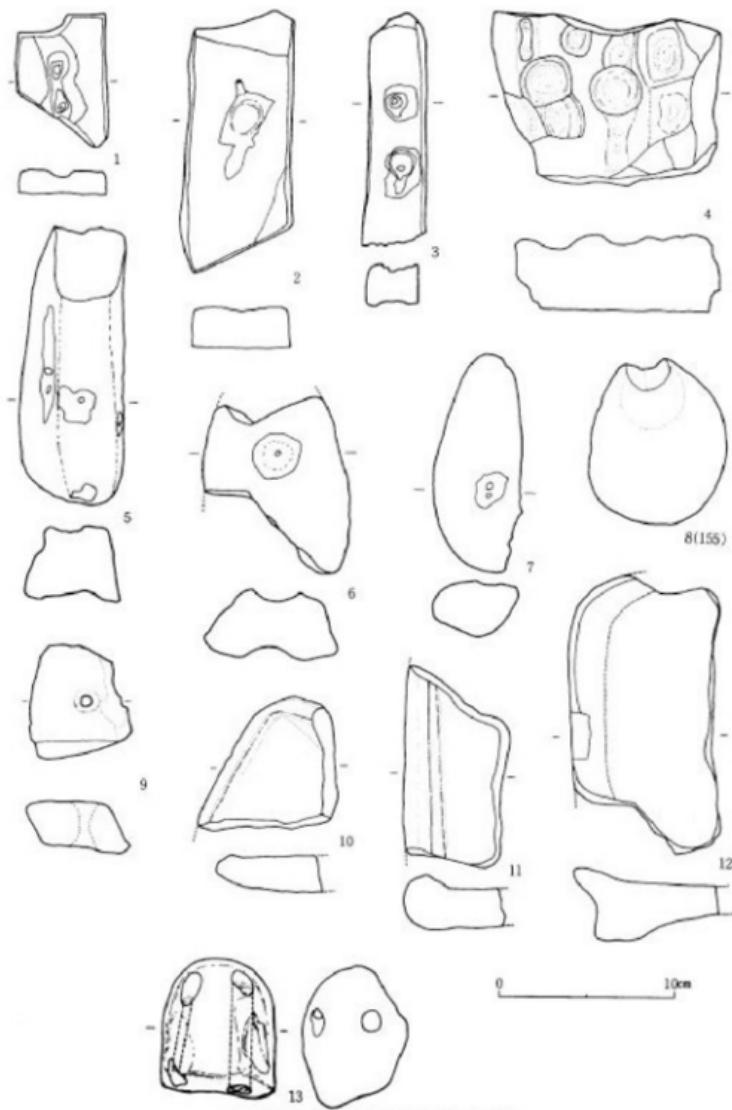
口縁部に無文帯があり太い沈線で文様が施され、全体的に肉形的な感じのする土器である。文様



III-12図 坂ノ上遺跡A地区出土石器



III-13図 坂ノ上遺跡A地区出土石器



III-14図 坂ノ上遺跡A地区出土石器

構成は10類土器と似るものであろう。

第18類土器（III-11図23、24）

口縁部から胴部まで非常に細かい繩文が施されたものである。平口縁をなし胴部が少し張る器形をなすものと思われる。

第19類（III-11図26、27）

18類同様細かい繩文（26）、撚糸文（27）が施され、沈線によって区画されて磨消されている26と、沈線だけの27がある。地文は11類と似ている。

第20類土器（III-11図28）

前期の土器で口縁に円形竹管文が施され、胴部は斜繩文が施されている。

底部（III-7図1、2、4～7）

底部は1、2のようにストレートに立てるものと、4、5、7のように低い台を付けたように少し上でくびれるもの、6のように高台のつくるものなどがある。

坂ノ上遺跡A地区出土石器・石製品・土製品

石器

石鎌（III-12図1～17）

有茎の石鎌が若干多い。ほとんど石質は硬質頁岩である。

石鎌（III-12図18～20）

石匙（III-13図1～9）

橢形の石匙で硬質頁岩である。

撫器（III-13図10～12）

エンドスクレイバーと呼ばれるもので片面から加工している。

石ペラ（III-13図13～17）

硬質頁岩で、片面加工をして刃部をつくっている。

石鎌（III-14図8）

A地区出土は1点のみで、河原石を素材とし、一端を打ちかいてある。

凹石（III-13図19～23、III-14図1～7）

両面にくぼみをもつものの片面だけのものがある。1、3は泥岩でやわらかい。4は破損しているが、全面にくぼみをもつ。

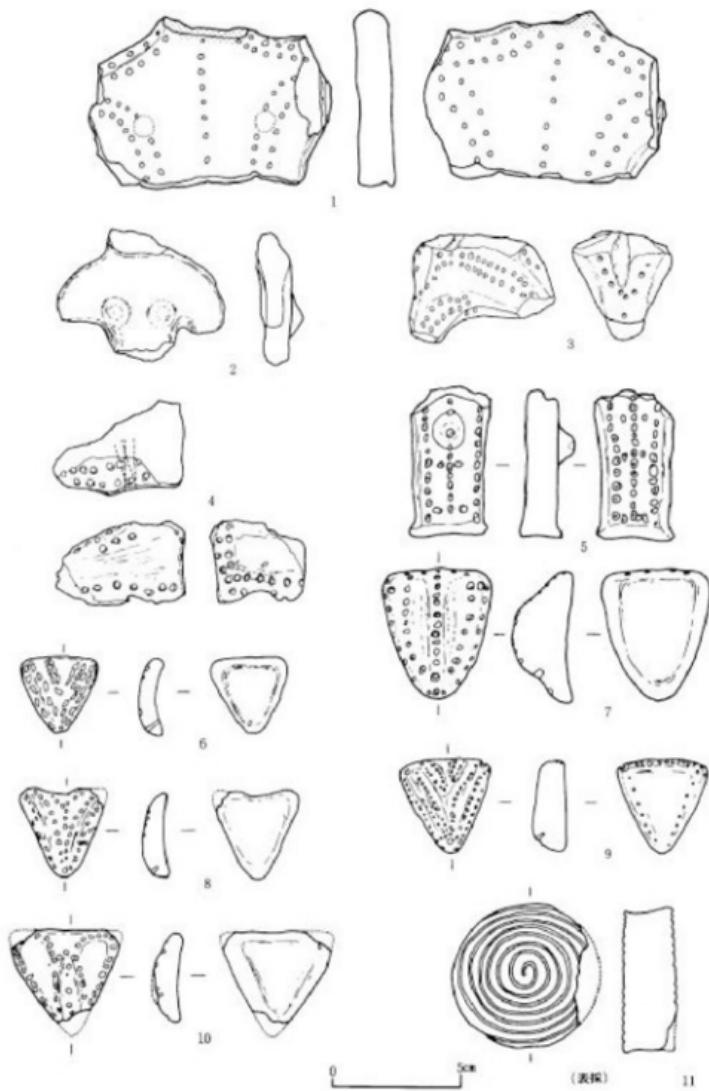
磨製石斧（III-13図18、24～26）

石質は片岩、泥岩、安山岩で、25は器面に擦痕が著しく残っている。

石皿（III-14図10～12）

3点とも欠損している。12は脚をもつ石皿で石質はいずれも凝灰岩である。

石製品



III-15図 坂ノ上遺跡A地区出土土偶・土製品

有孔石製品（III-13図9）

一部欠損している石製品で中央に穴が両面から穿れている。石質は凝灰岩である。

自然遺物（III-13図13）

配石面で出土した遺物で、河原石を利用したものと思われ、二つの穴が貫通している。用途は不明であるが、笛のように吹いてみると非常に良い音を出して鳴る。石質は珪質泥岩で、重さは370gである。

土製品

土偶（III-15図1）

板状の土偶で、頭部、両腕部、下半分は欠損している。正面と背面に刺突文が施され、首部にアスファルトが付着している。これは一度とれた頭部を接着したものであろう。乳部はなくなっているが、その痕跡が認められる。両肩部に貫通の穴が認められる。

土偶（III-15図2）

A地区住居跡（12B1、7B1）内から出土したもので、板状土偶である。頭部、両腕部、下半分が欠損しており、乳部は残って胴部は次第に細くなるスマートな土偶である。

土偶（III-15図5）

板状の小形の土偶で正面、背面に直線的に区画された刺突文を施し、性器と思われる盛り上りを中心部に貼りつけ中に刺突がある。上半分は欠損のため不明である。

立体土製品（III-15図4）

欠損しているため3面より確認できないが、おそらく5面をもつ三角体の土製品と思われる。刺突が施され、互いに反対側から穴が二つ穿たれている。

三角形土製品（III-15図6～10）

坂ノ上遺跡では三角形土製品は5点出土している。大きさは3cm～5cm前後のもので、6は多數竹管状の工具で正面、側面に斜め方向からの刺突があり、三角形の下の頂点に貫通する穴が一つある。背面はくぼんで色調は褐色である。7は一辺4cm、他の二辺5cmで正面中央部が盛り上り、突出し、竹管状の工具による刺突が側面と中央に一列施され、三角形の各頂点に他の刺突より深い刺突がある。背面はくぼんで色調は黄灰色である。8は各辺が若干、内湾するもので正面、側面に竹管状の工具による刺突があり、V字状に盛り上りがみられる。三角形の下の頂点に斜めに他より大きい刺突がある。背面はやくぼんで色調は黄灰色である。9は正面、側面に竹管状の工具による刺突が施され、背面縁辺にも刺突がある。8と同じように正面にV状の盛り上りがみられ、三角形の各頂点に斜めから他より大きい刺突がなされている。背面は平らで色調は黄灰色である。10は各頂点が欠損している。正面に7と同じように突出する盛り上りがありハート形に竹管状の工具による刺突が施されている。背面はくぼんで色調は黄灰色である。

滑車形耳飾（III-15図11）

表採資料である。一部欠損し、両面に沈線による溝巻文が施されている。色調は褐色である。

その他の土製品（III-15図3）

土偶の脚部とも考えられるが、大部分が欠損しているため不明である。欠損部に各方向から竹管状の工具で穴を穿った痕がみられる。

第3節 緒 観

坂ノ上遺跡の土器については第IV章第4節で触れてあるので、ここでは遺構を中心に簡単に述べてみたい。台地全体23カ所のグリッドを調査した結果、配石面は表土から約40cmの深さで確認され、その分布は三角点を含む台地の微高地がその主な範囲と考えられる。配石遺構および配石下遺構の時期は縄文時代中期末葉から後期前葉にかけての時期である。No.1～No.7まで検出した小堅穴からは焼土、炭化物、骨片等が出土している。はっきりした性格、広がりについては今後の調査によらねばならないが、埋葬施設としての可能性も考えられる。III-2図のように配石そのものに規則性はみられない。すなわち、配石下の住居跡、土壙、小堅穴遺構との各々の関連は把握できないが、遺構全体と配石の関連を考えるのが妥当かも知れない。住居跡として確認されたのは3軒であるが、特に、12B 1、7B 1グリッド内の住居跡は火災を受けた住居のようで、 $\frac{1}{4}$ 程度の調査をしただけであるが、壁際には炭化材が検出されている点などから、今後の調査によっては家屋構造の解明に役立つものと思われる。配石を伴なうグリッド内に住居跡と思われる壁、ピット等がみられる所が3カ所あった。それに11A10グリッド内に確認された大小の土壙群は袋状ピット、ラスコ状ピットに分けることができ、この土壙群はまだ広がる可能性がある。

この遺跡は全体に土壤を層位的に分けることが困難で、耕作土、暗褐色土（遺物包含層）に大別され、遺物（土器片）の量が非常に多く、下堤遺跡の6次にわたる調査の遺物に匹敵するほどの量であった。これは遺跡の性格を知る上で注意されなければならない。特に遺物の中に土器片を利用した、円板状の土製品（図版35～37）がかなり出土している。遺跡の北側に隣接する下堤遺跡B地区との関連が時期的に場所的に強く、「居住の動き」などが考えられる。

11C 2 グリッド、No.2 小堅穴遺構出土炭化物

C₁₄ 年代

測定値：4370±260 B. P.

測定番号：G₆k-5370

測定者：木越邦彦

第Ⅳ章 坂ノ上遺跡日地区

第1節 B地区の概観

B地区は、A地区の南側に位置し、最初C地区と呼んだ所も含めている地区で、A地区に最も近い所は昔からの古い畠地でその意味では、A地区より遺構の破壊状況はひどい所である。やはり、A地区同様、台地西端からの見晴らしは良好で、標高は下堤遺跡、坂ノ上A地区とは同じである。ただ最も南端に位置する台地(C地区)は平坦な場所は少なく、雑木林、竹やぶで西方向に傾斜している地区で、遺構、遺物はほとんど無かった所でもある。B地区の時期は縄文時代前期後葉が主体のようで、晚期の遺物もみられ、この坂ノ上台地における土地利用または居住変遷のあり方等も課題として示されている地区である。

第2節 遺構と出土遺物

遺構について

前述したようにB地区は畠作物による長年の擾乱のため、今回、分布調査した限りでは、ほとんどのグリッド内で遺構破壊が認められ、良好な状態ではないことがわかった。が6 A10、7 F10グリッド内に10個程度のビットが検出され、13 A 7 グリッド内には土壙らしき遺構も認められている。層位は全体的に第1層黒色土(耕作土)、第2層暗褐色土(粘性あり、遺物包含層)、第3層ロームに分かれる。特に、北西端の5 F 8 グリッド内で地表から約22cmの深さで、石棒が立ったままの状態で発見された。他に遺構は認められず、この石棒の周りに四つのビットがあり、石棒との関連が提示された。

B地区の最南端の区域は全く遺構は認められず、僅かに遺物が出土した程度で、これはこの地域の地形的な理由によるものであろう。

出土遺物

土器 (N-1図1~34)

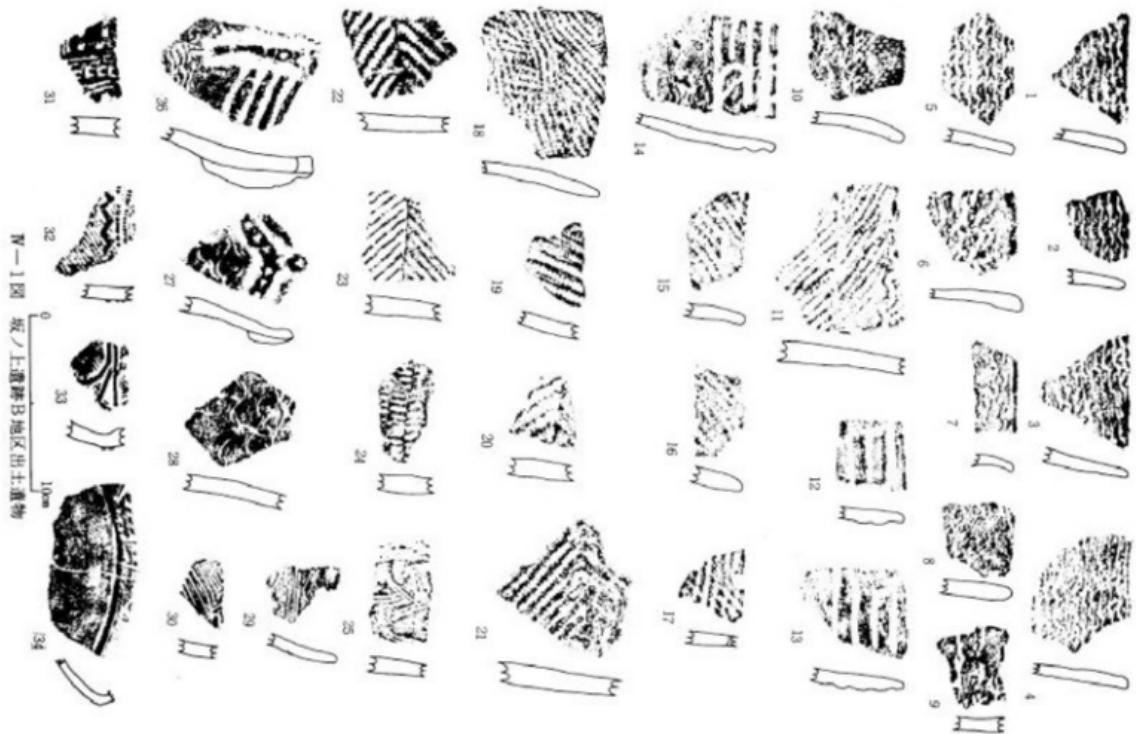
B地区から出土した遺物は縄文時代前期の土器が主体をなし、晚期のものが少しある。

第1類土器 (N-1図1~11)

口縁部及び胴部に綾織文のある土器である。胎土に纖維を多く含む。器形は深鉢か円筒形をなすものと思われる。10のように口縁部に斜縄文の文様帯があり、その下胴部に間隔のある綾織文が施されているものである。土器の色調は黒灰色のものが多く、黒褐色をなすものもあり、焼成は普通。

第2類土器 (N-1図12~14, 26)

口縁部に太い沈線が4本、口縁と平行に施され、胎土には少し纖維を少し含むものである。26も同一個体と考えられる。山形の突起があって、その頂部から口縁部まで粘土紐を貼りつけ、その上に刺突がある。胴部には綾織文が施されている。色調は黒褐色をなし、焼成は良好。



W-1 四 坂ノ上遺跡B地区出土遺物

第3類土器 (IV-1図15~19)

縦文を主体とするものである。胎土には纖維を含み(18は含まず)、15, 16は口縁部まで縦文が施され、原体はL Rの単節縦文が多い。18は底部の径に比較して、口縁径が広くなる鉢形を呈すものと思われる。色調は暗褐色で、焼成普通。

第4類土器 (IV-1図20~23)

羽状縦文の施された土器である。胴部だけの破片である。胎土に纖維を含む。20, 21は結束した原体を回転して羽状縦文を施している。22, 23はL R-R Lの順に回転して羽状縦文をつくっている。23の上の原体はL {^R_R} {^L_L}と思われる。色調は暗褐色で、焼成普通。

第5類土器 (IV-1図24, 25)

文様は異なるが原体が絶条件であることでこの仲間とした。胎土に纖維を含む。24は多軸の絶条で、平織状をなし、25は単軸で、いわゆる木目状撚糸文で、原体はRである。色調は24は褐色、25は暗灰色で焼成普通。

第6類土器 (IV-1図27, 28)

口縁に平行に太い粘土縁を貼付け、その上に刺突が施され、胴部にはS字状連鎖沈文が施されている。胎土に纖維を少し含む。口縁は大きな波状口縁をなし外反する。色調は暗褐色で、焼成は良好である。

第7類土器 (IV-1図29~32)

竹管文によって文様が施されたものである。胎土に纖維は含まない。29は口縁部の破片で、半截竹管で口縁に平行に沈線文が横位及び連続山形文が交互に施されている。32は地文に縦文が施され、その上に粘土縁を貼付けて、さらにその上に細かく半截竹管文が施されたもので、いわゆる吹浦式土器である。

第8類 (IV-1図33)

地文は無文で、粘土縁を貼付けた土器で、胎土に纖維を含まない。色調は黄褐色で、焼成は普通。

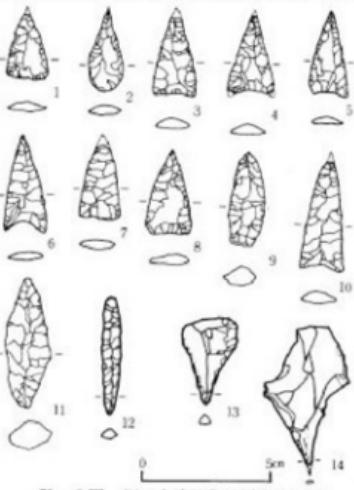
第9類土器 (IV-1図34)

縦文晩期の土器である。注口土器の腰部から底部にかけての土器片で、腰部にシダ状文が施されている。

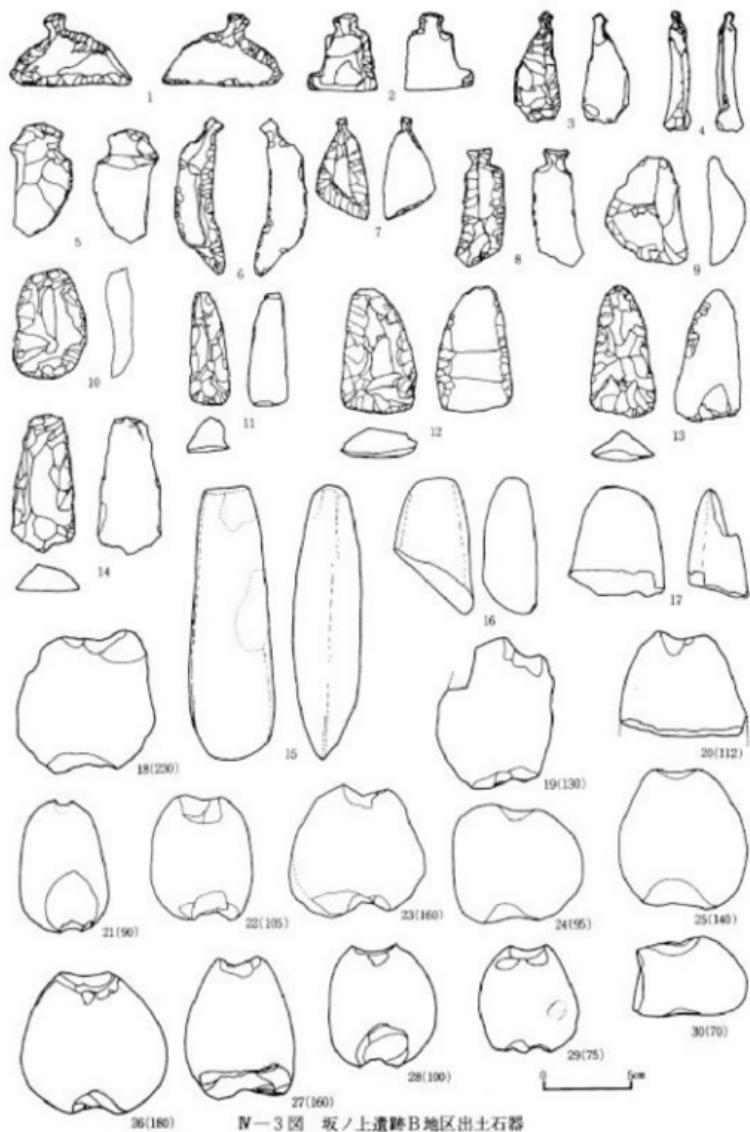
坂ノ上遺跡B地区出土石器・土製品

石器

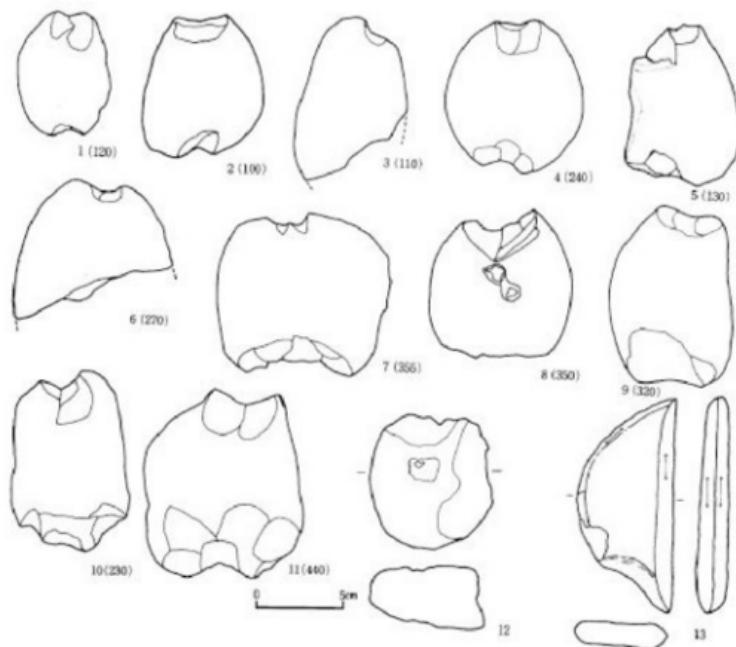
石鏨 (IV-2図1~11)



IV-2図 坂ノ上遺跡B地区出土石器



IV-3 図 坂ノ上遺跡B地区出土石器



IV-4図 板ノ上遺跡B地区出土石器

無茎のものが多い。石質は硬質頁岩である。

石鏨 (IV-2図12~14)

硬質頁岩。

石耜 (IV-3図1~8)

楕円形のものが多い。石質は硬質頁岩である。

搔器 (IV-3図9~10)

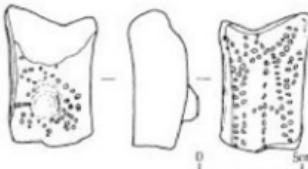
エンドスクレイパーと呼ばれるもので、片面から加工している。硬質頁岩。

石ペラ (IV-3図11~14)

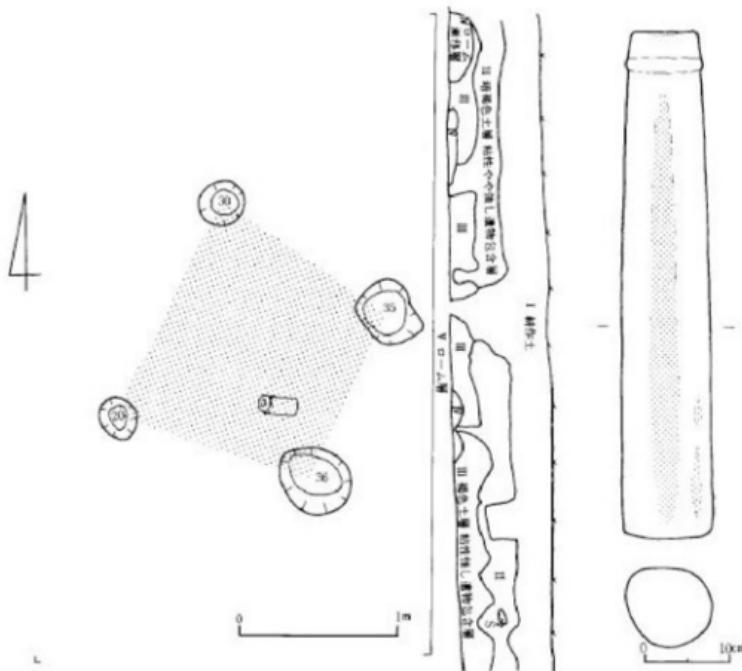
硬質頁岩。

石鏟 (IV-3図18~30, IV-4図1~11)

板ノ上遺跡では最も多く出土している石器で、河原石を素材にし、両端を打ちかいてある。8は



IV-5図 板ノ上遺跡B地区出土土器
(表採)



N-6図 坂ノ上遺跡B地区、5F 8グリッド内遺構図
凹石としても使用されている。

凹石 (N-4図12)

画面にくぼみをもつが、片面のくぼみは浅いものである。

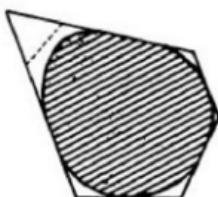
半月形石器 (N-4図13)

いわゆる半月形の石器で側縁は磨ってあり刃部はV字状になっている。青竜刀形石器に類似した石器で石質は凝灰岩である。

土偶

(N-5図)

表採の土偶である。板状の小形土偶で、III-15図5の土偶と同形態で正面に性器と思われる盛り上がりがあり、その周りに渦巻状に刺突を施している。背面にも刺突があり、胸上部は次第に広がるようだが欠損のため不明である。



N-8図 石棒原石想定図

第3節 石棒について

前述したように、この石棒はB地区5F8グリッド内から発見されたもので、北西方向にゆるやかに傾斜している台地の西端部である。石棒は地表から僅かに約22cmの深さで出土したため発掘時、頭部に多少、スコップ等による損傷があるが完全な形のものである。

石棒は土庄等により西へ73°傾斜して出土した(本来は直立、立っていたと考えられる)形状は単頭で、頭頂部から約3.5cmの所で段状の鉗をもち、頭頂部は平らで丸い凹部がある。下部になるにつたがい太く、長さは58cm、最大径10.5cm、重さ9.8kgを測る。(図-7)石質は流紋岩(石英粗面岩)である。この石棒は約10cm埋った状態で確認され、石棒のまわりに四つのピットを検出した他は遺構は確認されなかった。(図-8)石棒から北西方向1mの位置に磨製石斧1個と貝殻の碎片が少量出土(5cm~10cm浮いた状態)している。

この石棒は、不正五角形または六角形を呈する柱状節理の流紋岩を利用して作られており(六)つの角部は、面取りを行ない、丸く磨って作っている。(図-8)磨っていない部分(平らな部分)は褐色の光沢のある自然面が残されている。

流紋岩の原産地としては、秋田県河辺郡河辺町三内に所在する筑紫森が考えられる。筑紫森は遠跡から最短距離(岩見川沿い)にして約52kmであり、他に遺跡付近に流紋岩(柱状節理)の産する場所はない。この筑紫森は海拔391mで山全体が流紋岩で形成され、国指定天然記念物となっている。この岩脈の特徴は柱を積み重ねたような横臥柱状節理を示し、その最も顕著な場所は千本柱^{ムツヒラ}と呼ばれている。

以下この石棒に対する考察を述べると、

- イ 全面的な発掘調査ではない限界は残るが炉、窓壁等がみられず、住居跡内(他遺跡でみられる石棒に関連すると思われる石壇や埋甕、伏甕等の遺構、遺物はない)に存在した石棒とは考え難い。
- ロ むしろ、石棒を覆う構造の施設があり(石棒は埋められている)単独の施設で、周りの四つのピットはそのための柱穴と考えられる。
- ハ この遺構のある場所は全く台地の突端部である。(住居跡群のあり方はこの分布調査では明確にできなかった)
- ニ 石棒は、建物(施設)の中央には位置していない。(図-6)これは何らかの、石棒に対する信仰儀式等の行為のためのスペースであるかも知れない。
- ホ 石棒そのものは、形状等からして、今まで男根を象徴し、性器崇拜の対象物とされてきた(異説もあるようだが)が、以上のような点からも、その可能性が強いと解釈していいと考える。

第4節 緒　　び

坂ノ上遺跡A地区、B地区から出土した遺物を簡単に紹介したが、A地区からは中期末から後期初めにかけての土器が、B地区からは縄文時代前期の土器が発見されている。調査は分布調査を目的としたために、遺構からまとまって出土したものではなく、また層位的にも確認したものでもない。したがって編年的な考察には情報不足である。しかしA地区出土の遺物の時期は秋田県に於いて不明確な時期であるので、ここでは情報不足を承知で若干の考察を試みたい。

A地区

A地区から出土した土器はそのほとんどが中期末から後期初めのものであることは再三記述したとおりである。これらの土器群から特徴的、主体をなすものとして大きく4群に把握することが可能であろう。

坂ノ上A I群土器としては第6類土器に代表される土器群である。磨消繩文が主体をなし、器形は平口縁か、波状口縁をなして外反し、腹部が少しくびれた深鉢形をなすもの、口縁がキャリバー状をなすものがある。

坂ノ上A II群土器としては第3類土器に代表される土器群である。磨消繩文と、刺突文が主体をなし、器形は口縁に2~4つの把手がついて外反し、腹部から底部にかけて急に細くなるものであろう。第4類土器もこの仲間としてよいものであろう。

坂ノ上A III群土器としては第7類土器に代表される土器群である。これには口形、口縁などの特徴から第8類土器、第14類土器この仲間としてよいであろう。口縁部に無文帯がなく、繩文と磨消繩文(S字を横にしたような磨消し)が主体をなし、器形は口縁に深い溝が走り、それを渡る橋状把手が4個付き垂上に立上り、口縁部が一番広く、底部に行くにしたがって狭まり、腹部から底部にかけては筒形に近い形となるものである。

坂ノ上A IV群土器は第10類土器に代表される土器群である。口縁部に無文帯があり、腹部から底部にかけて幾何学的な文様が施されるもので、器形は平口縁をなし深鉢を呈すものが多い。

以上の四つの土器群は型式として把握することが可能のように思えるが、このような土器群が、当地域に於いて発見された例が少ないので、資料の増加をまって改めて型式についてまとめたいと考えている。

これらの土器群を他地方の型式に比定すると次のようになるものと考える。

坂ノ上A I群土器は大木10式土器の古い時期。

坂ノ上A II群土器は大木10式土器の新らしい時期。

坂ノ上A III群土器は門前式の時期¹⁾

坂ノ上A IV群土器は西ノ浜貝塚第3層出土の土器²⁾

これらの土器群前二群の土器は中期末のもので、後の二群の土器は後期初頭のものである。坂ノ上A III群の仲間とした第14類の大きな刺突のある土器は新潟県の三十櫛場式にある刺突文と非常に

よく似ている。³⁾これら北陸の土器との関連、又、第9類とした十櫻内1式土器が、どの土器群に伴なうものであるのか、など多くの問題が残っている。

B地区

B地区出土の土器は前述したとおり前期の土器が主体をなす。これらの土器を所謂大木式土器の型式に対比すると第1類土器は大木2a式に、第2類、第6類土器は大木2b式に、第7類土器は大木6式土器になるであろう。他の3、4、5類土器は大木2a、2b式期にある繩文及び羽状繩文土器である。

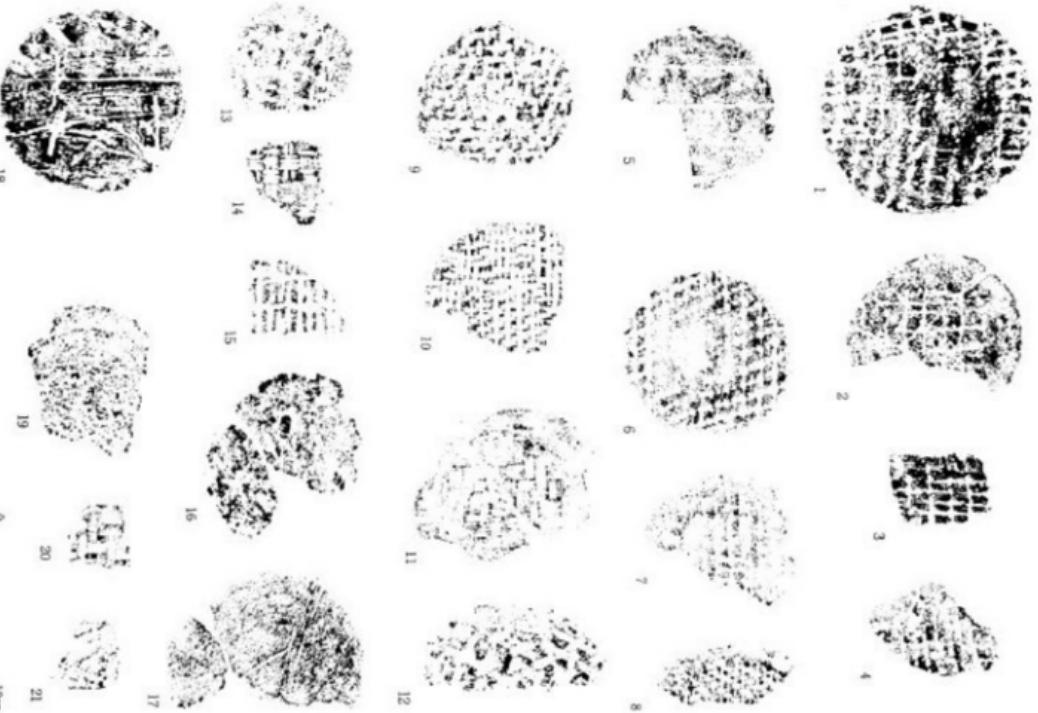
この時期の遺跡としては秋田市の児桜貝塚がある。

- 1) 吉田義昭 「門前貝塚」 1960
- 2) 後藤勝彦 「西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報」 1967
- 3) 中村孝三郎「先史時代と長岡の遺跡」

底部の文様 (IV-9図)

下堤遺跡、坂ノ上遺跡、A、B地区から発見された土器の底部には網代などの文様のあるものがある。それらの主なものを紹介したい。

- 1 黃子状の編物底のあるもの。(1～5、7) 経の条と緯の条が間隔が違っていて、緯の材のくくりが二本の材で擦り合われているものである。1～5は下堤遺跡、7は坂ノ上遺跡A地区出土である。
- 2 「二本超え、一本潜り、一本送り」に編まれたもの(8、9、13、20)。8、9、13は坂ノ上遺跡A地区、20はB地区出土。
- 3 「二本超え、二本潜り、一本送り」に編まれたもの(11)。坂ノ上遺跡A地区出土。
- 4 「三本超え、三本潜り、一本送り」に編まれたもの(10)。坂ノ上遺跡A地区出土。
- 5 三方編みのもので、「一本超え、一本潜り、一本送り」の編みでできたものに、さらに一本送りで交叉したところを超潜して作ったもの(12)。坂ノ上遺跡A地区出土。
- 6 その他14のように送りの本数を三本、四本五本と変えたもの、15のように黄子状の編みであるが、三本超え、二本潜りとして編んだものがある。いずれも坂ノ上遺跡A地区出土。
- 7 他に繩文の施されたもの(19、21)、木の葉、笹の葉様の文様があるもの(17、18)がある。19、21は坂ノ上遺跡B地区、17、18はA地区出土である。



1—5 下洼遺跡 6—18 瓦ノ上遺跡A地区
W—9 図 下洼・坂ノ上遺跡出土、土器底部破片

結語

下堤遺跡及び坂ノ上遺跡の調査については前各章で報告したとおりである。これらの大きな遺跡を含めて、この四つ小屋の東側にある台地には各時代にわたって、多くの遺跡がある。それを年表にすると次の表のようになる。

年代	縦文時代						弥生時代	古代
	早期	前期	中期	後期	晩期			
遺跡名	坂ノ上遺跡 B	下堤遺跡 A	下堤遺跡 A	坂ノ上遺跡 A	小阿地遺跡 23	地末遺跡 戸台(⑤)	末(地蔵台遺跡) 戸台	小阿地古墳 C
?

(注 秋田市教育委員会「第3次下堤遺跡調査概報」 1971年3月)

これを見ると早期の遺跡がないだけで、縦文時代から、弥生時代、古代にわたってこの台地に、あるいは周辺に人が住み生活していたことになる。

早期の土器は昭和30年代にこの台地から採集されており、われわれの調査で発見できなかっただけで、今後発見される可能性は充分にある。¹⁾

各遺跡はこの広い台地のそれぞれよい場所を選定して利用し生活している。後期後半の遺跡だけが南西の一段低い台地を利用している他はほとんど台地上を利用している。後期のコブ付土器の時期になると一般的に低い台地や冲積地の自然堤防などが生活の場所として利用されるようになる。八郎潟の南岸の砂丘地に人が住むようになるのもこの時期以降であり、²⁾生活する場所の変化がこの時期頃にあったことが考えられる。

小林達雄氏が多摩ニュータウンの遺跡調査の結果から遺跡に六つのパターンのあることを確認した。その内容は次のとおりである。³⁾

Aパターン

非常に広い平坦な土地に占居していて、住居跡がたくさんかたまっており、土器型式は三型式以上にわたって継続していて、定住地となっている場合。

Bパターン

平坦部がやや狭いが、中央広場があり、Aパターンと同様住居跡の数も多いが、土器型式は先後のものも認められるが、一型式限りで完結している場合。

Cパターン

家が數軒以下で、広場はなく、遺物量はそれほど多くない。

Dパターン

斜面に立地し、住居跡のないもの。

Eパターン

A～Dから離れて独立的に存在する墓地、デボ、土器製作用粘土の採掘跡、石器原材料の採掘跡、石器製造跡など。

Fパターン

その他の遺物、遺構などの実体として、確認しえないが、一晩だけのキャンプ地とか道、狩獵、採集の場などを想定しうる。というものである。

このようなパターンの把握は多摩ニュータウンの詳細な分布調査と精密な発掘調査の結果からおこなわれたものである。このような遺跡の把握の仕方と実例は、実際に発掘調査しない遺跡でも、分布調査なり範囲確認調査あるいは遺跡の所在する地形からある程度の帰納を可能にした。

下堤遺跡、坂ノ上遺跡の場合は下堤遺跡A。坂ノ上遺跡Aは広い平坦地をもち、三～四型式の土器型式が認められる。中期の下堤Aの時期（大木7b～大木8b）竪穴住居跡が建築、増築、新築などが何回か行なわれたと見えて、住居跡が幾重にも重っている。これはこの時期の代表的な遺跡の一つである一丈木遺跡⁴⁾に於いても認められる事実で、Aパターンの代表的な遺跡といえるであろう。

また時代は少し下がるが、晩期前半の⁵⁾地方遺跡は広い面積をもち、土器多数の他、土偶、亀形土製品、石棒、土面、それにヒスイの玉が多く発見されており、玉を作っていた可能性があり、この遺跡もAパターンと認めてよいものであろう。

下堤遺跡Bは竪穴住居跡があり、広場もできる程の面積をもつが、土器型式から見ると一型式であるのでBパターンと認められる。この遺跡の竪穴住居跡は小形化し、重複しない。重複しても二軒ぐらいで終ってしまう。

この時期になると下堤遺跡Bをはじめ、秋田市寺庭遺跡、協和町米ヶ森遺跡などのようにBパターンが一般的になるものと思われる。坂ノ上遺跡Bなども土器型式に巾があるがその面積や、地形から見るとBパターンの遺跡であろう。

このように見てくると、この台地にある遺跡は縄文時代を通して、この地域の中心的な役割をはたしていたと考えてよいであろう。

○住居跡の変遷

下堤遺跡の調査が行なわれた頃から、秋田県内で多くの住居跡が発見され調査されてきた。それらは遺跡全域を調査せず、保護の立場から下堤遺跡のような範囲確認調査のみに終った所がいくつかかる。そのため集落全体の詳細を検討は不可能であるが、中期の住居の変遷など、ある程度推測できるまでに至った。それを最後に述べて終りしたい。

前期の時代の住居跡は秋田市柳沢遺跡⁶⁾、鹿角市清水向遺跡⁷⁾がある。いずれも前期後半のものである。柳沢遺跡の住居跡は8軒発見され、一般的な形は横円形か、隅丸長方形をなし、長方形の形のものには周溝があり柱穴は周溝もある。炉は燒土だけの炉である。中には長さ15m、巾5mの長方

形をなす大型の住居跡もある。

中期前葉の遺跡としては八郎潟の東北岸にある八竜町壹刈沢貝塚遺跡⁸⁾、上小阿仁村不動羅遺跡⁹⁾がある。二つの遺跡とも大形住居跡が各々一軒発見されている。壹刈沢貝塚のものは長方形で周溝はない。柱穴は壁からはなれて内側にあり、東側に特殊なピットがある。炉は焼土だけである。又普通の大きさの住居跡は円形のもの、隅丸長方形のものなどがあり、円形のものには周溝がある。不動羅の場合の大形住居跡は隅丸長方形に近い形をなし、柱穴は壹刈沢の場合と同様である。北端が一部高くなり、その部分に特殊なピットがある。炉は掘込んだだけである。普通の大きさの住居跡は円形、隅丸方形などがあり周溝のあるものもある。炉は石囲い炉が一部にある。

中期中葉の遺跡は下堤A、一大木遺跡などがある。大きい住居跡は未発見である。両遺跡とも隅丸方形、円形、小判形などがあり、円形のものには周溝がある。炉は石囲い炉が一般化し、その中に埋甕のあるもの、ただ焼土と埋甕のものなどがある。炉の位置は中央にあるのが普通である。¹⁰⁾

中期後葉の遺跡は下堤B、末ヶ森遺跡などがある。一般に住居跡が小さくなり、径3m前後の、円形か、楕円形をなす。周溝はない。炉は石囲い炉の外に埋甕するいわゆる複式炉をなす。炉の位置は壁によった所に作られる。¹¹⁾

以上の変遷をまとめると次の表のようになると考える。

事項		時代	前期後葉	中期前葉	中期中葉	中期後葉
平	隅丸方形					
面	横円形・円形					(小形化)
形	長方形					
炉	焼土炉(地床炉)					
	石囲い炉					
	石囲い炉の中に埋甕					
	石囲い炉の外に埋甕(複式炉)					

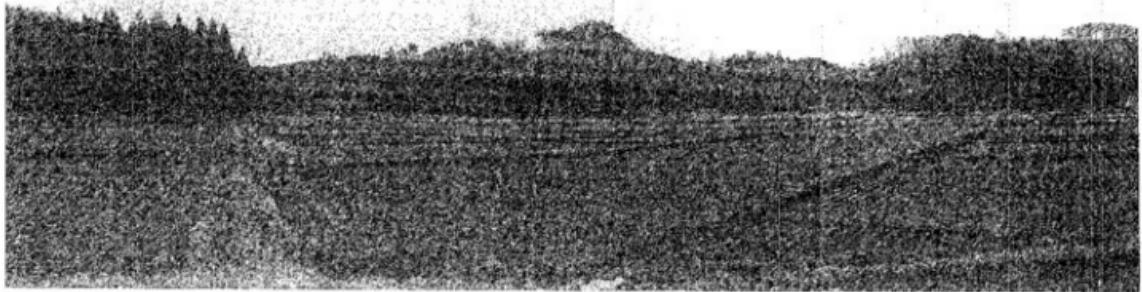
- 富権泰時「雄勝町院内岩井堂第二洞穴下層の土器について」秋田考古学10周年記念特集号 1964年7月
- 草薙祥子「秋田砂丘の砂丘地形と遺跡について」秋田考古学32 1975年3月
- 小林達雄「多摩ニュータウンの先住者——主として縄文時代のセトルメント・システムについて」月刊文化財 1973年1月
- 千畑村教育委員会「一丈木遺跡第3次発掘調査概報」 1974年3月
- 鶴野日久米藏氏のコレクションによる。同氏が長年この遺跡を踏査し、多くの遺物を採集している。その中にあるものである。尚、氏のコレクションは県立博物館に寄贈された。
- 富権泰時「秋田市柳沢遺跡発見の住居跡」考古学ジャーナル No99 1974年9月
- 大和久處平「秋田県史考古編」
- 八竜町教育委員会「壹刈沢貝塚第2次概報」 1973年3月

- 9) 上小河仁村教育委員会「不動羅道跡概報」 1971年3月
- 10) 注4に同じ
- 11) 協和町教育委員会が昭和50年発掘調査を実施した結果、この時期の住居跡が7軒発見された。

発掘調査の組織

発掘調査主体 秋田市教育委員会、秋田考古学協会
調査員 奈良修介、富樫泰時、鍋倉勝夫
参加者 五十嵐芳郎、岩見誠夫、船木義勝、杉浦 駿、武石 孝、中屋一生、畠山憲司、
高橋忠彦、手塚 純、庄内昭男、庄内公子、大友俊和、黒崎俊美、本間光昭、
安田敏昭、梅川光隆、伊藤順子、鈴鹿八重子、佐藤喜博、刈田夫貴子、森山上一、
安藤麻須子、畠山貞子、佐藤まつみ、野上剛志、村岡百合子、阿部千鶴子、
小玉 準、齋藤 隆、佐々木博史、菅野博仁、伊里道彦、藤原昌史、佐々木昌喜、
細谷昇寿、小林朋子、日黒直子、三上礼子、長谷山とし子、尾張谷信子、
田口 都、佐藤美智子、近江谷幹子、石川達夫、嵯峨修平、日黒明彦、谷口重光、
安田忠市、鈴木忠司(平安博物館)、大塚真弘(横須賀市教育委員会)、県立金足農業高校社会科クラブ、県立北高校日本史クラブ、秋田市立高校社会科クラブ、
敬愛学園高校社会科クラブ、聖霊女子短大付属中・高校社会科クラブ、秋田和洋女子高校社会科クラブ
事務局 佐々木栄孝、小松正夫、菅原俊行、石郷岡誠一、日野 久

図 版



宝竜崎付近の露頭

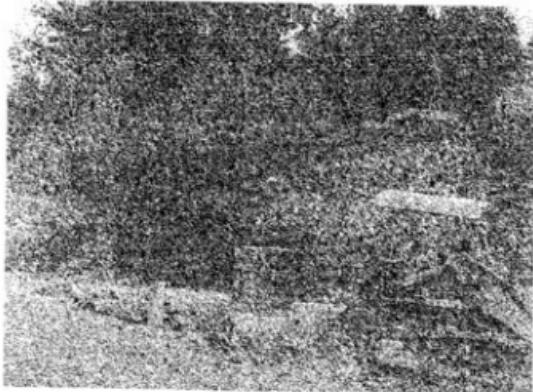
末戸松本付近の露頭

地蔵台遺跡遠景



御所野(標高35m)付近の露頭





小阿地23遺跡



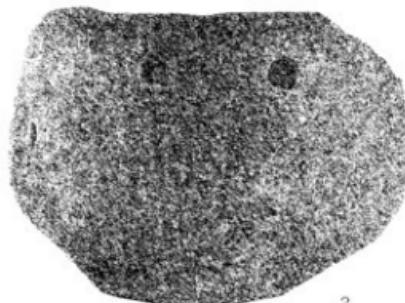
1



4



2



3

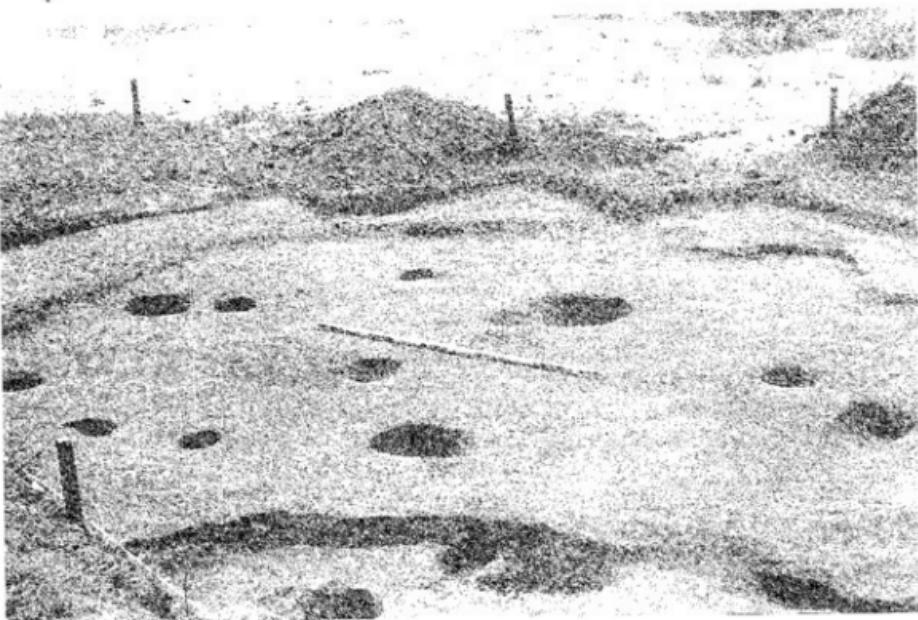
1—小阿地23遺跡，2—地藏台遺跡，3—第1號住居跡，4—第3號住居跡



第1号住居跡

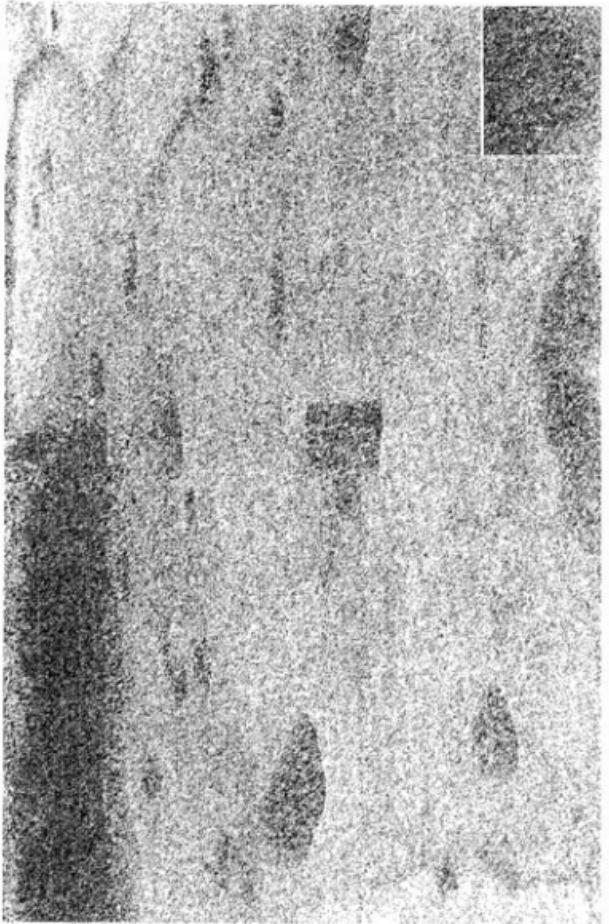
第4号住居跡





第6号住居跡
上から第6・第2・第7号住居跡

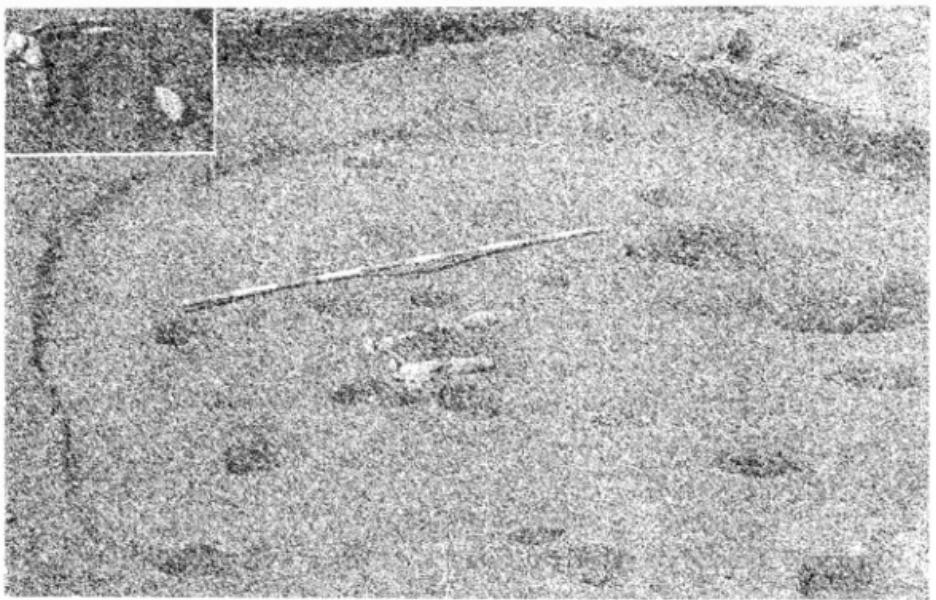


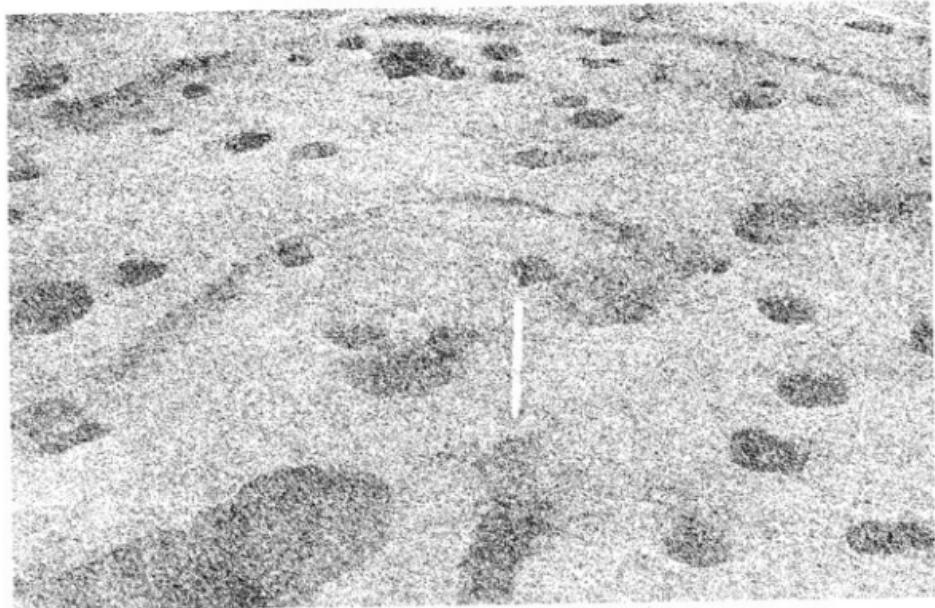


第5·第8·第9号住居跡



第11·第14·第17号住居跡

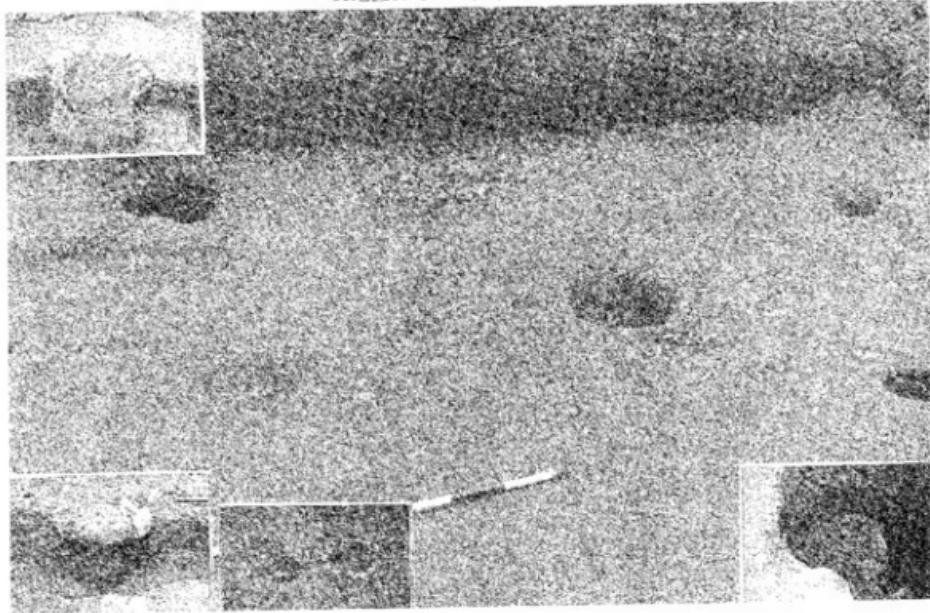


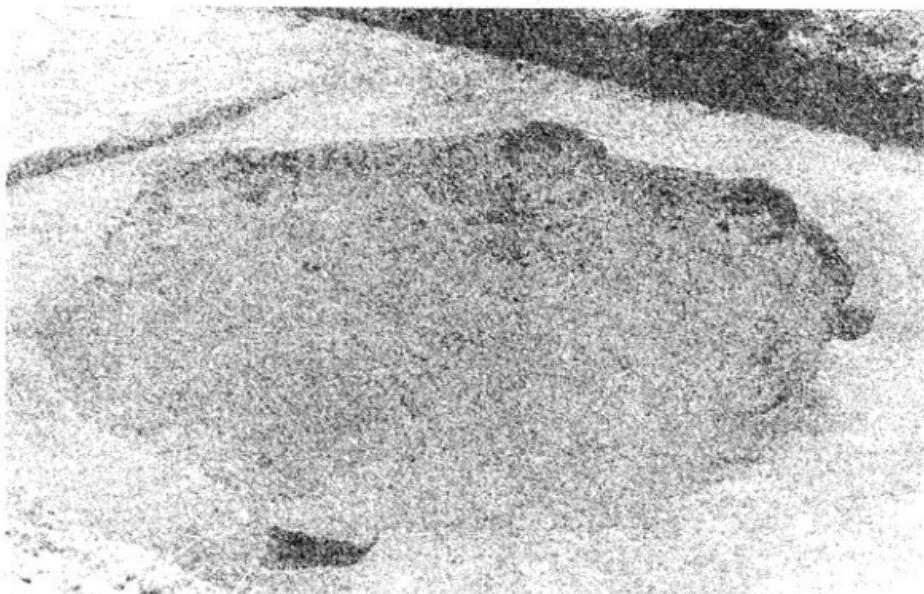


第15・第16号住居跡

A地区N23E10(A, B, C)住居跡

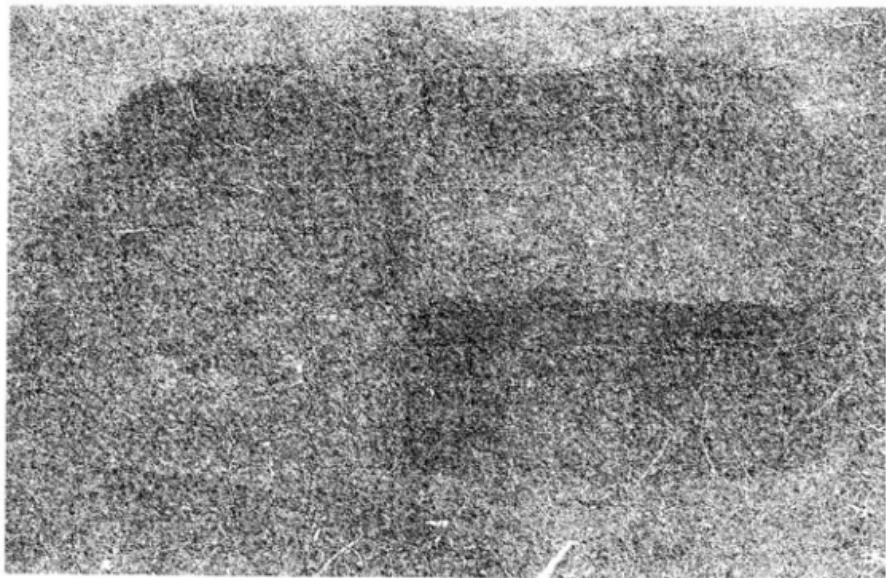
6号フラスコ状ピット

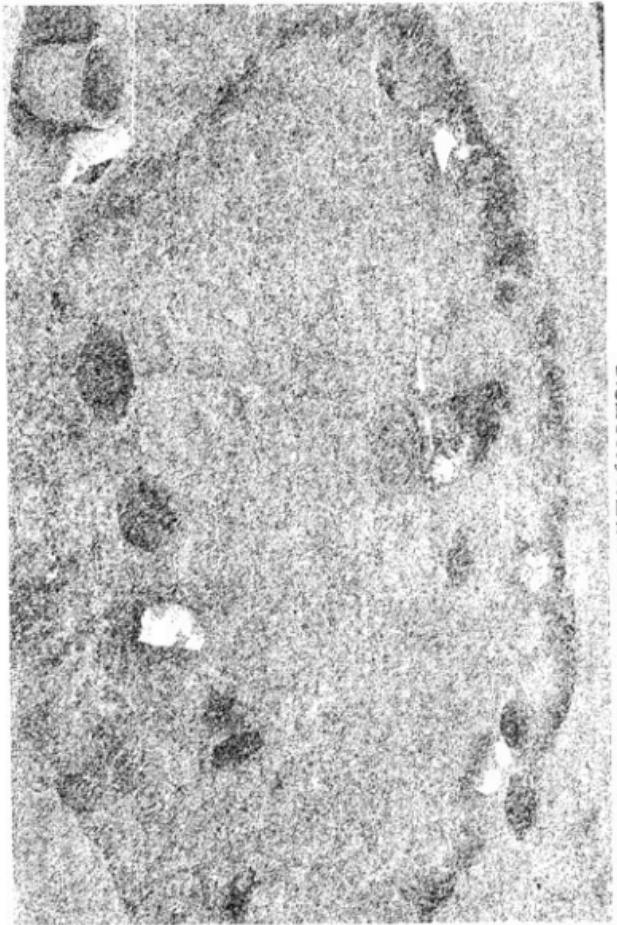




A 地区 N 6 E 10 住居跡

A 地区 N23 J 1 土壙

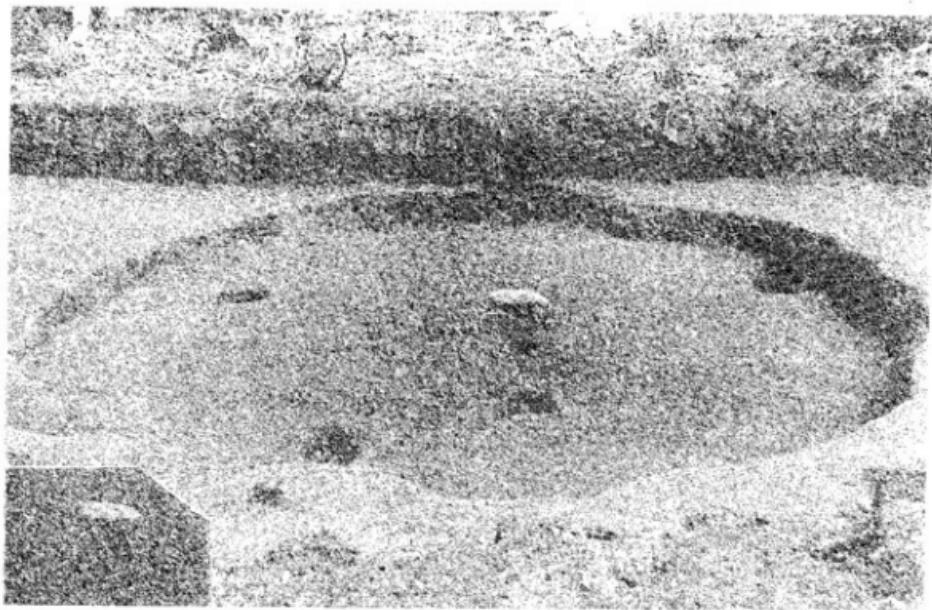




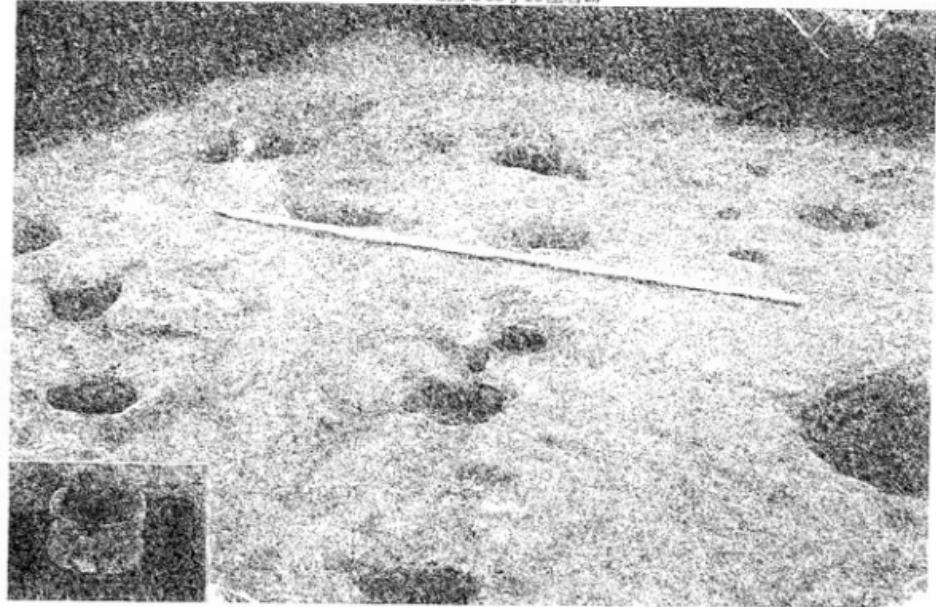
A 地区 N13E 1 住居跡

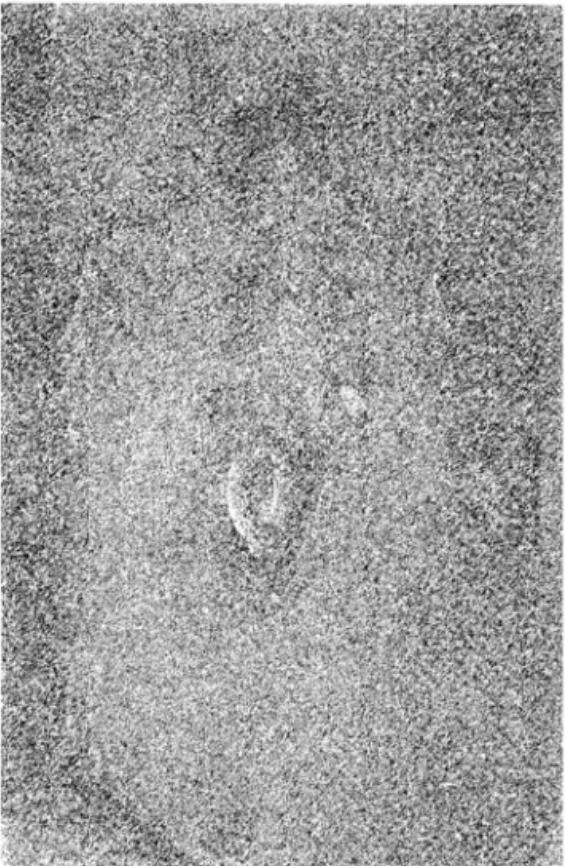
B 地区 S34 J 10住居跡



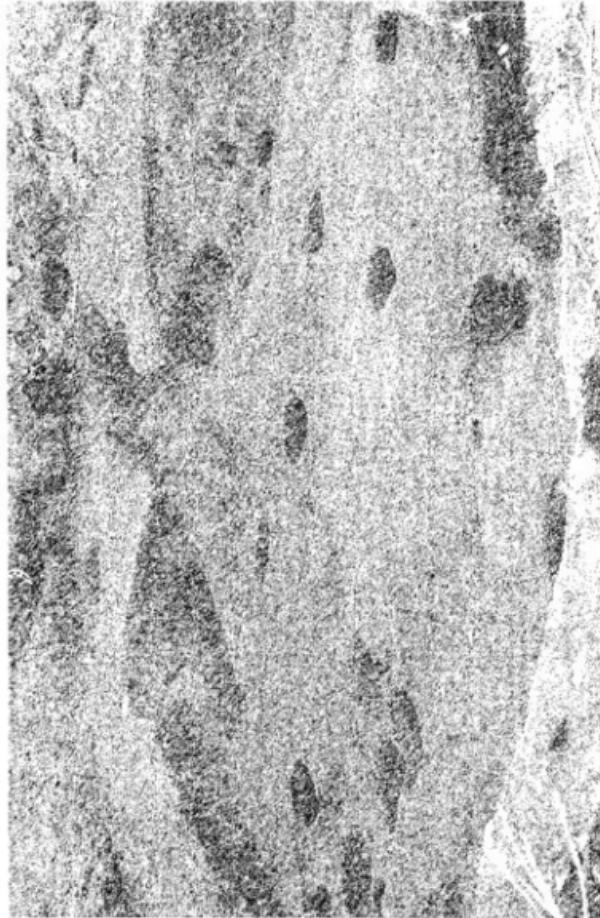


B地区 S42 J 5 住居跡
B地区 S33 J 10 住居跡

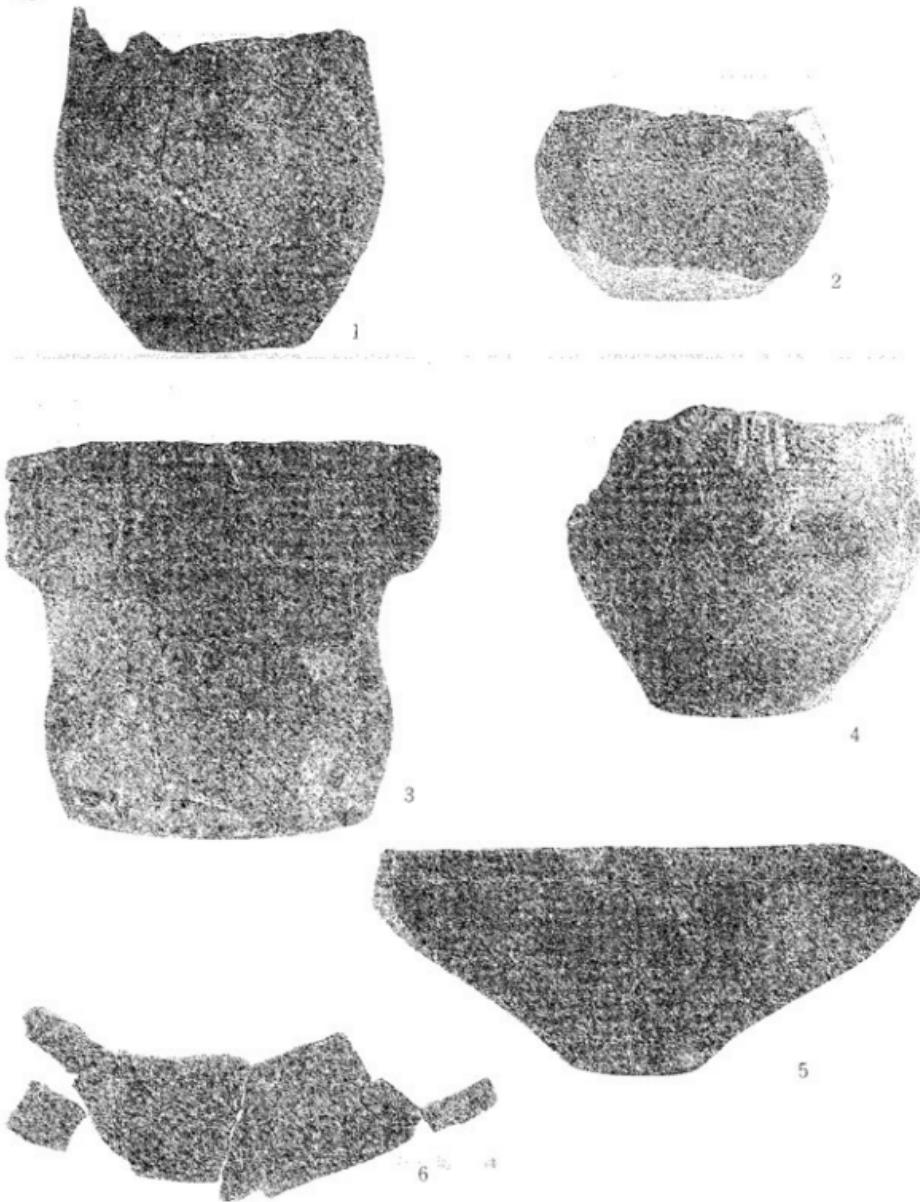




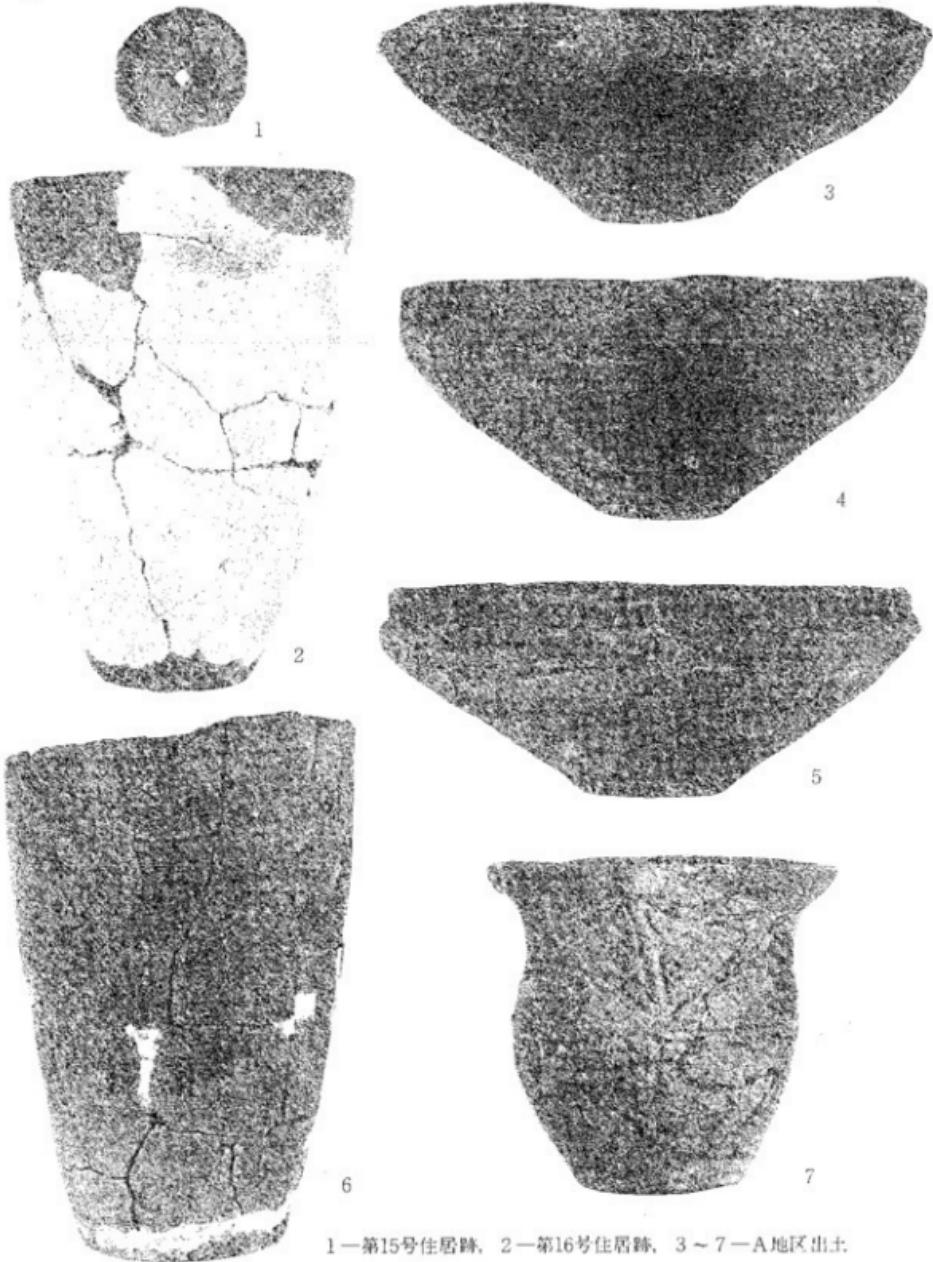
B地区 S26E 10住居跡



C地区住居跡

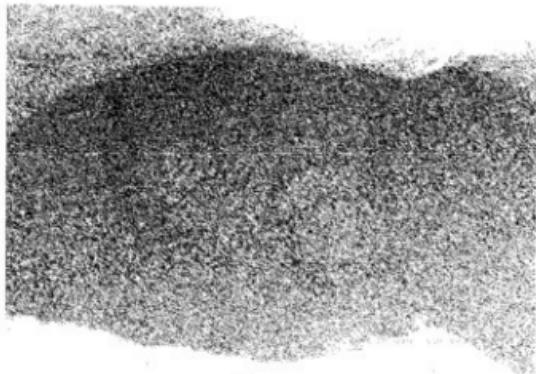


1, 2—第7号住居跡, 3—第8号住居跡, 4—3号フラスコ状ビット,
5—第9号住居跡 6—第11号住居跡



1—第15号住居跡、2—第16号住居跡、3～7—A地区出土

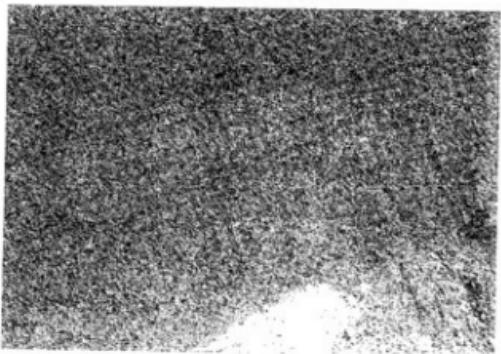




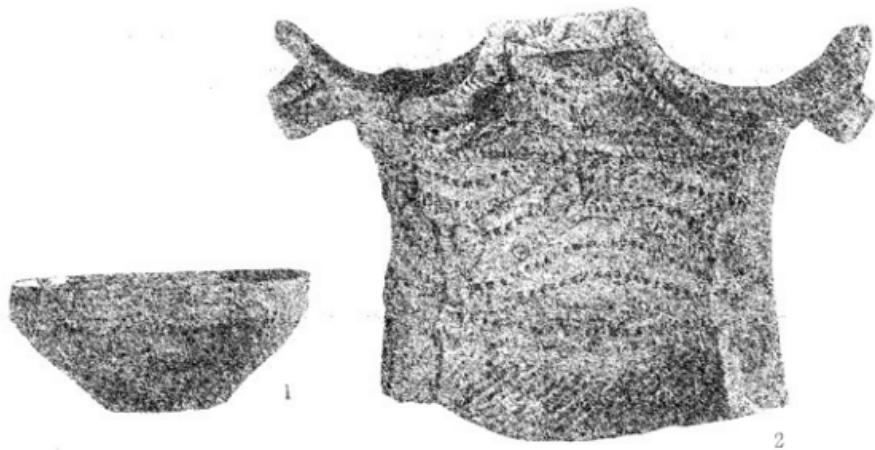
4号 フラスコ状ピット遺物出土状態



5号 フラスコ状ピット遺物出土状態

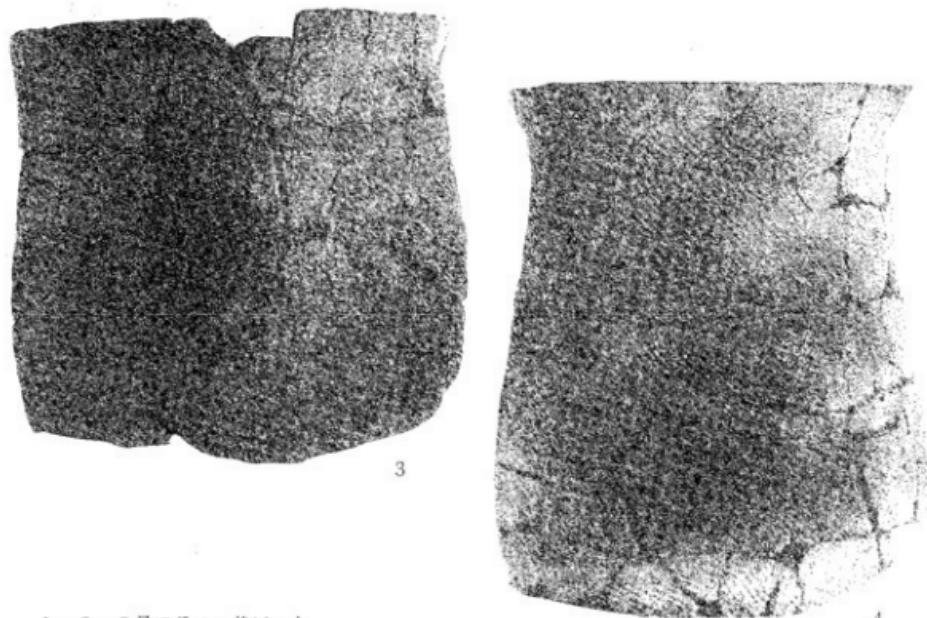


1～2—4号 フラスコ状ピット
3—5号 フラスコ状ピット



1

2



3

4

1～2—5号フラスコ状ピット

3—S34 J 10住居跡

4—S42 J 5住居跡



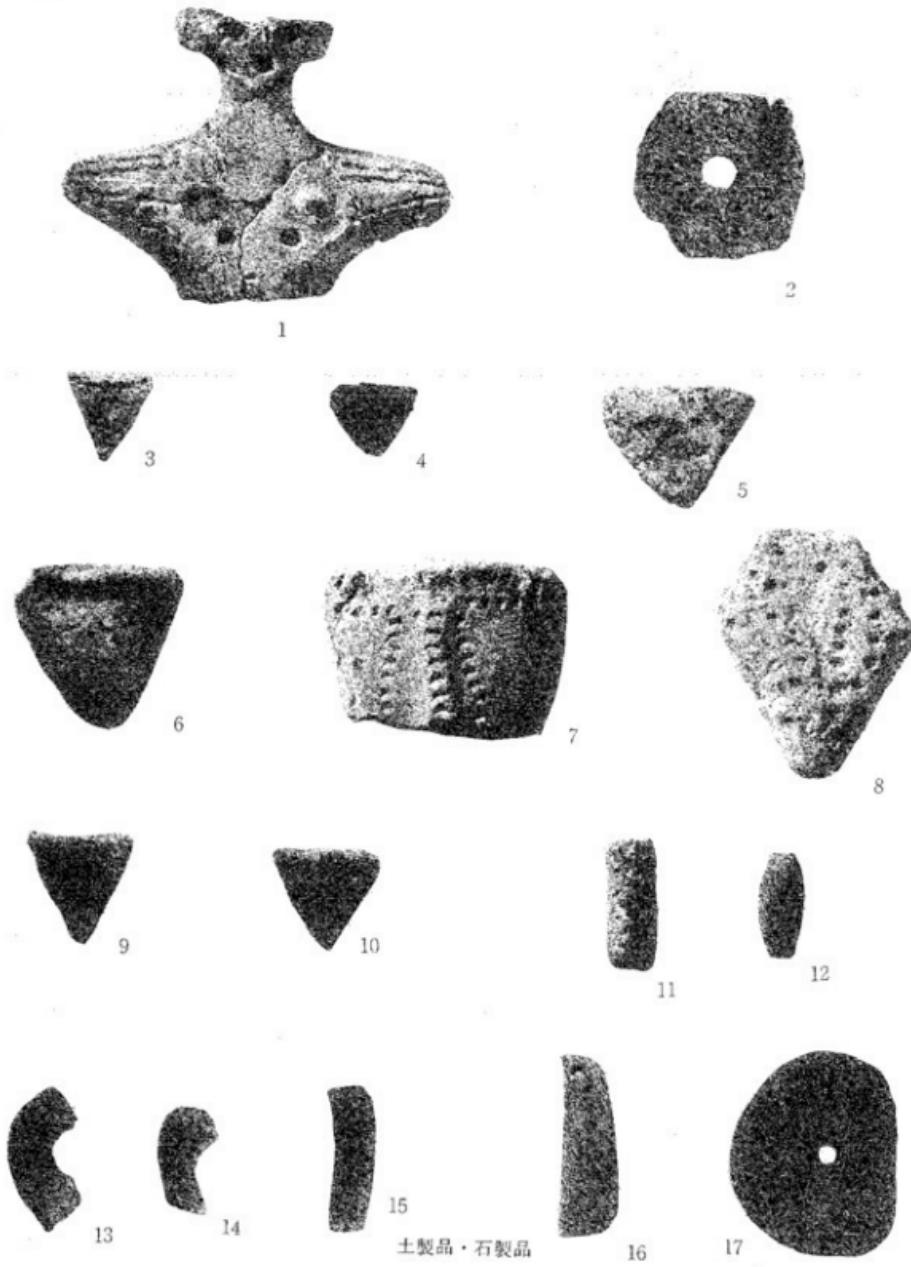
1—S33 J 10住居跡

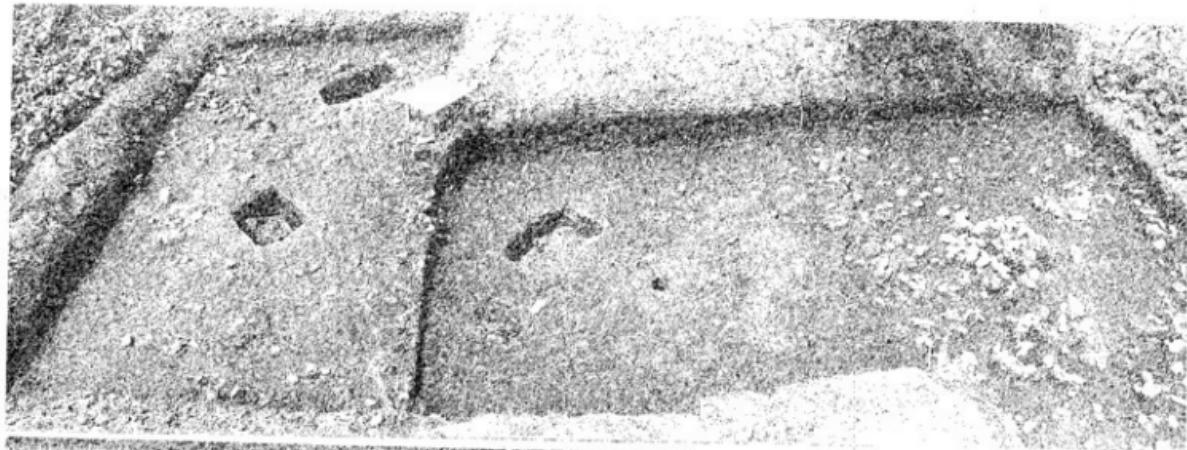
2~5—C地区住居跡

6—A地区出土

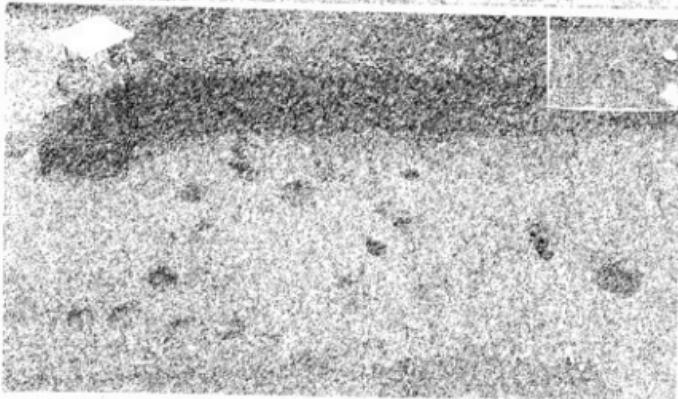
6

5

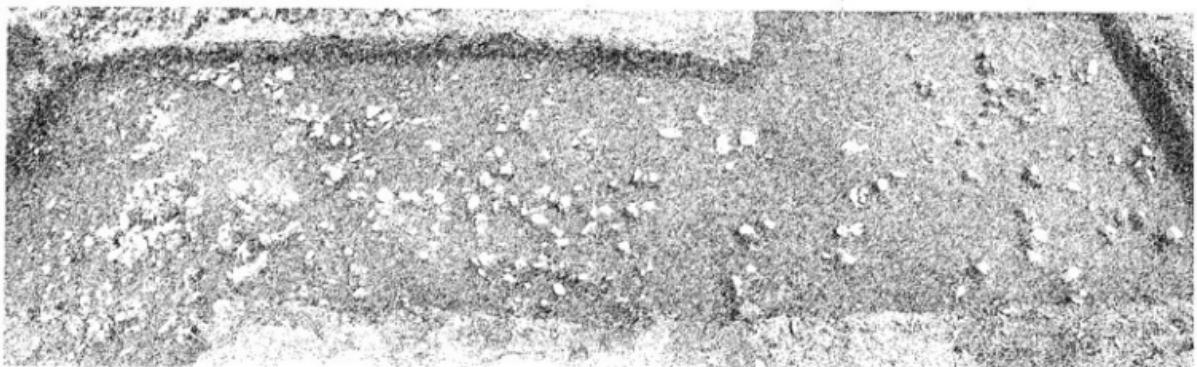




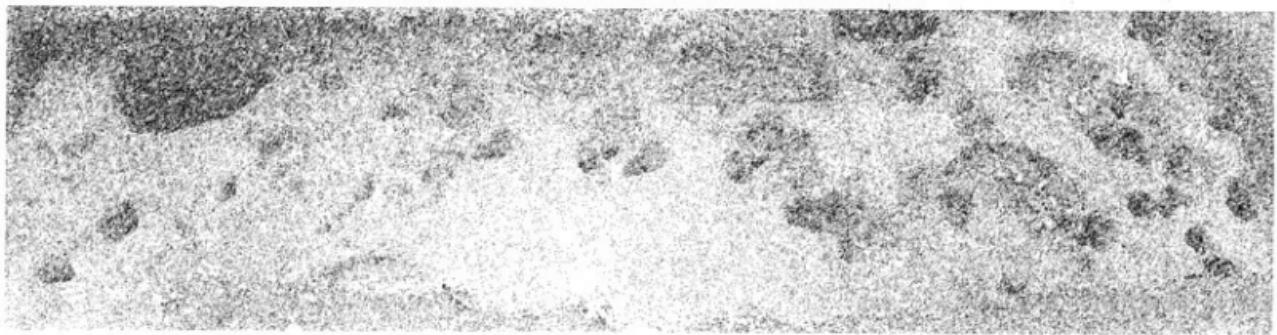
板ノ上遺跡配石遺構・貼床住居跡
(5 J 10・6 A 10・11A 1・11A 2)

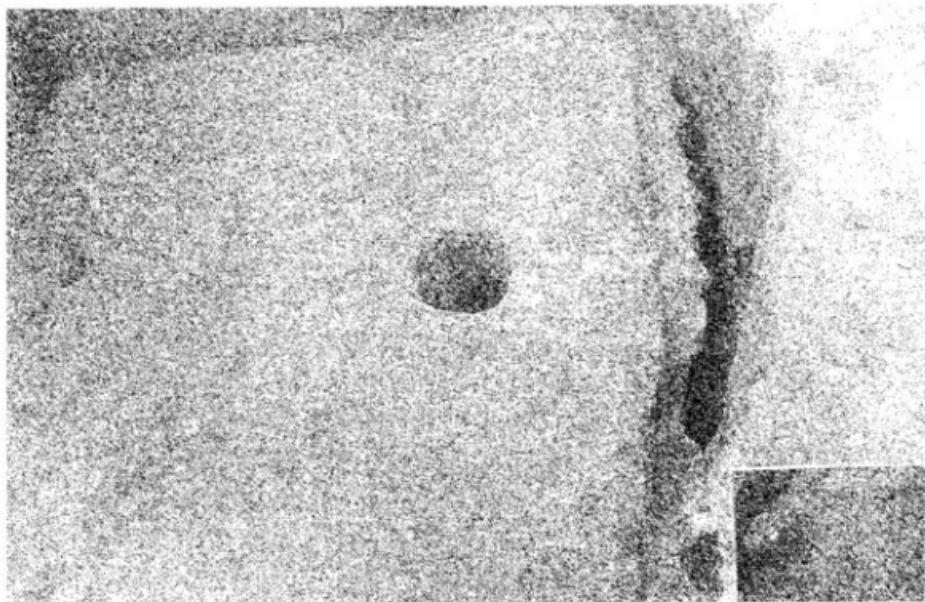


住居跡 (11A)

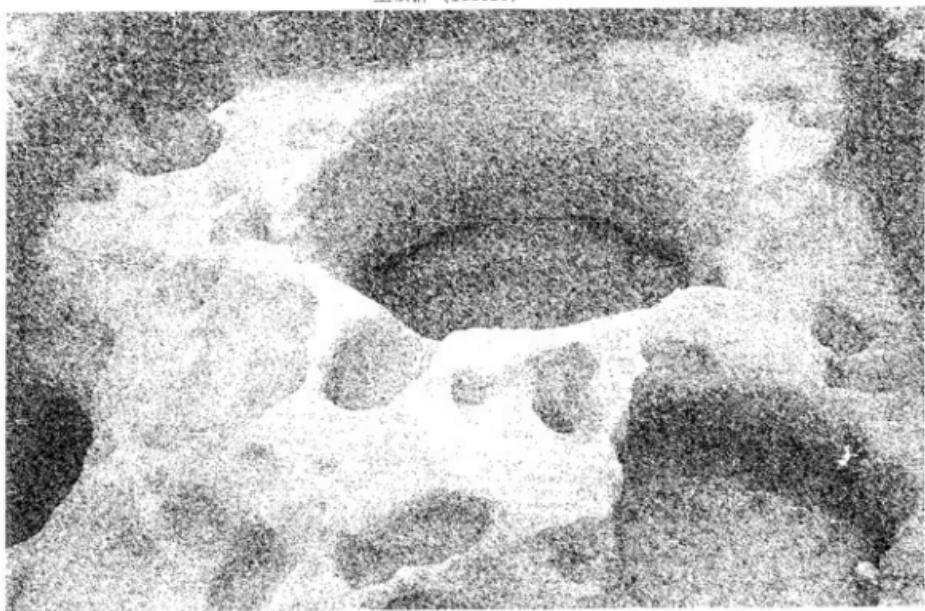


坂ノ上遺跡配石遺構および小豎穴、土壙 (11A 2・11B 2・11C 2)





A地区住居跡 (12B1・7B1)
土壤群 (11A10)





1, 2, 4—坂ノ上遺跡A地区出土

3—12B 1・7 B 1住居跡

4



1



2



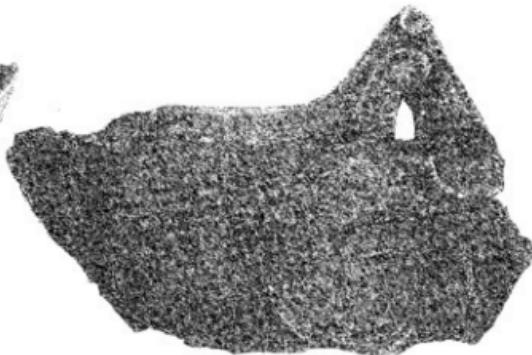
3



4

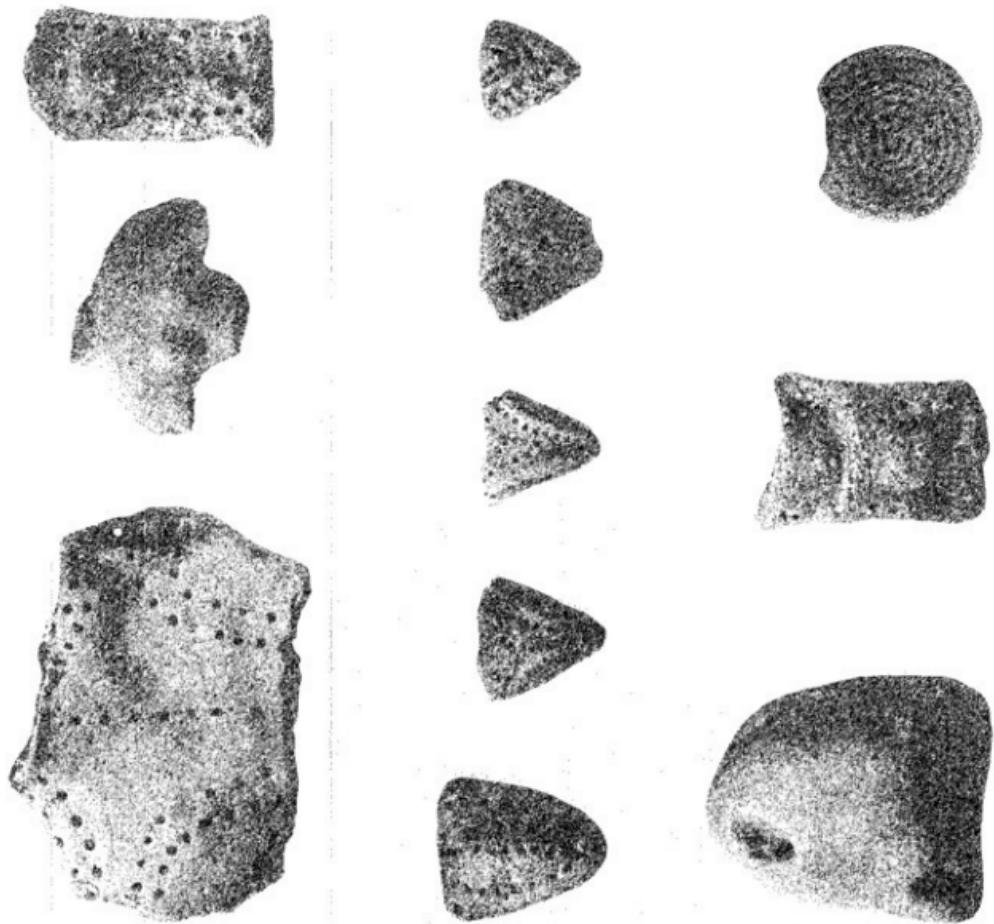


5

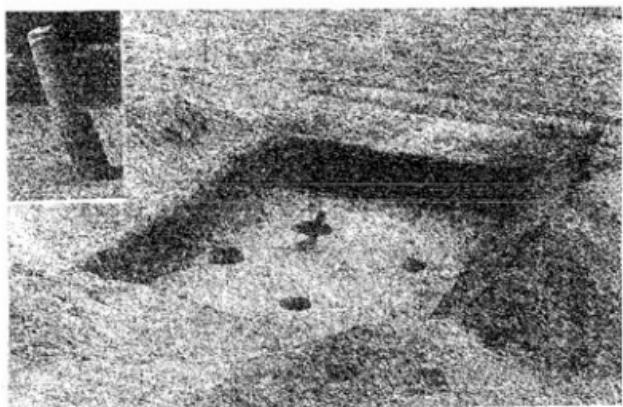


6

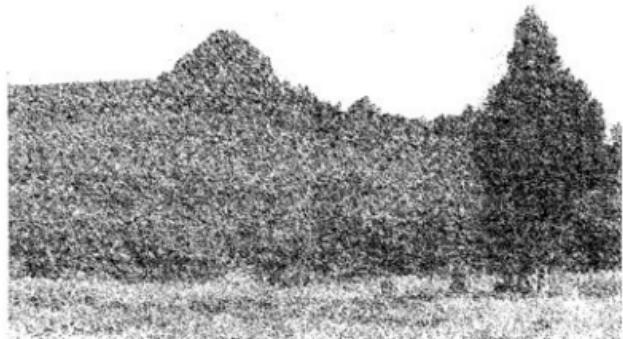
土製品・自然遺物



坂ノ上遺跡B地区
石棒出土状態

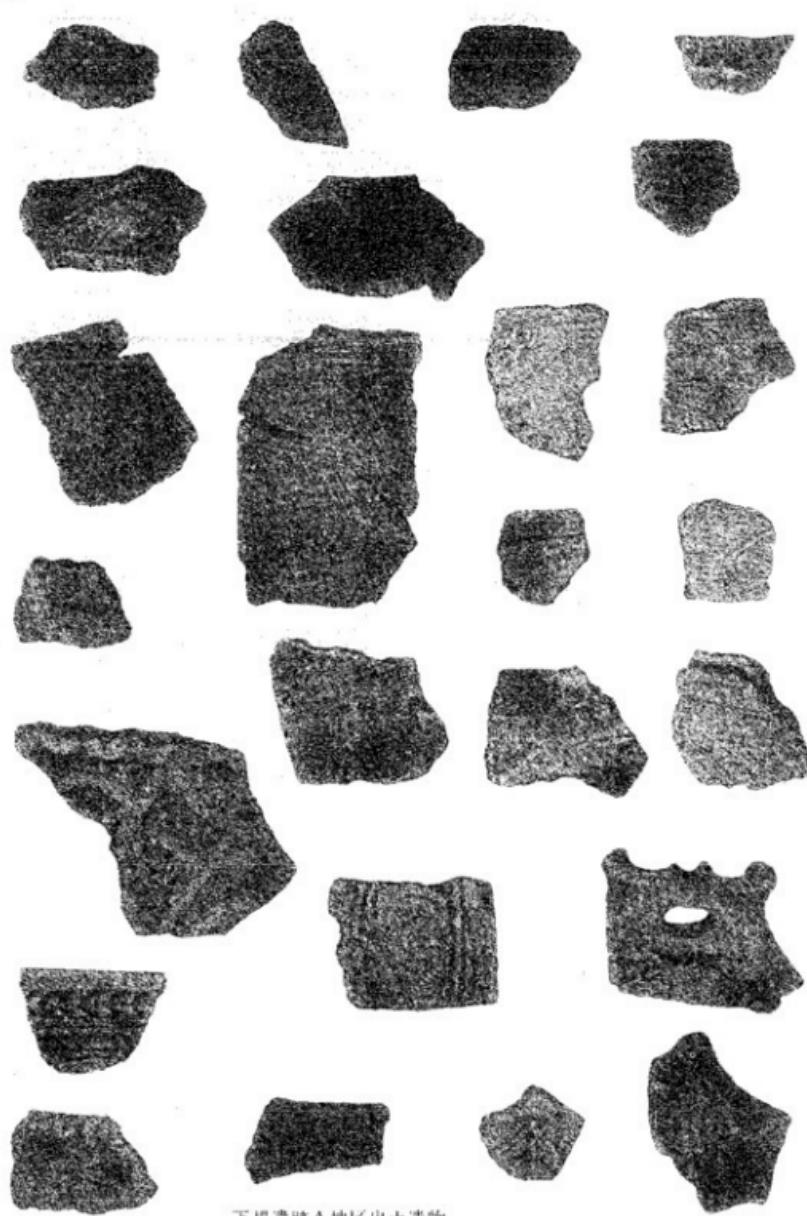


筑紫森遠景

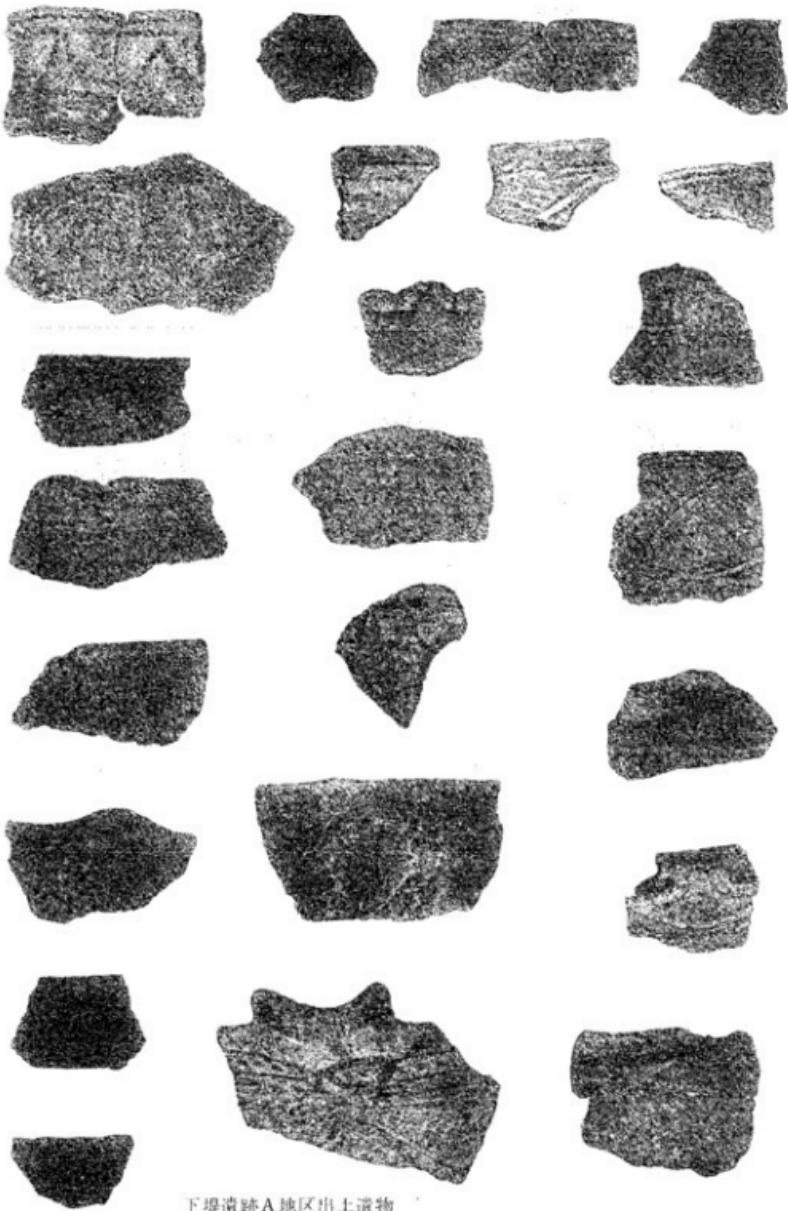


筑紫森千本桙
(流紋岩柱状節理)

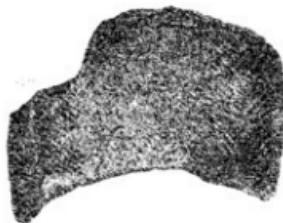




下堤遗址 A 地区出土遗物



下堤遺跡A地區出土遺物



1号

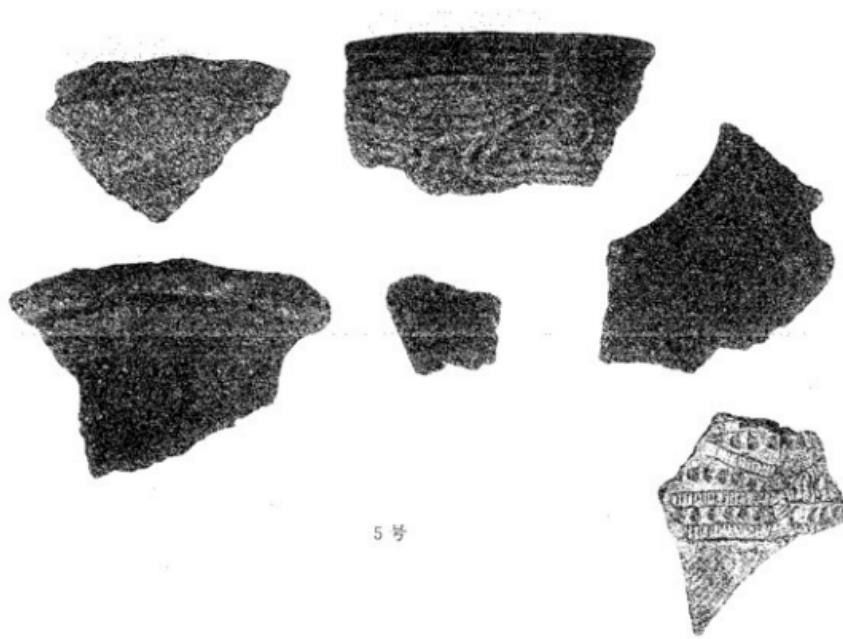


3号

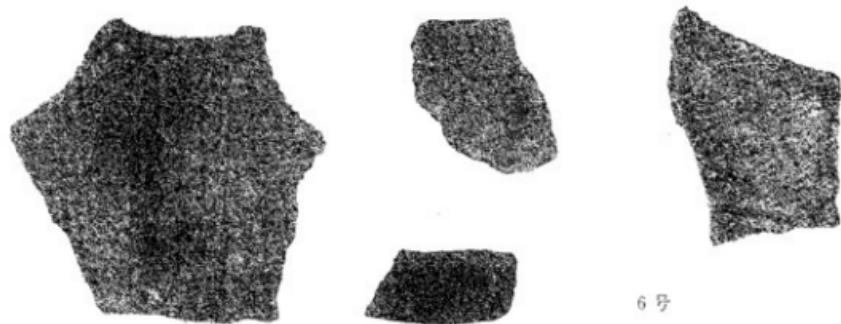


4号

下堤遺跡プラスコ状ビット出土遺物

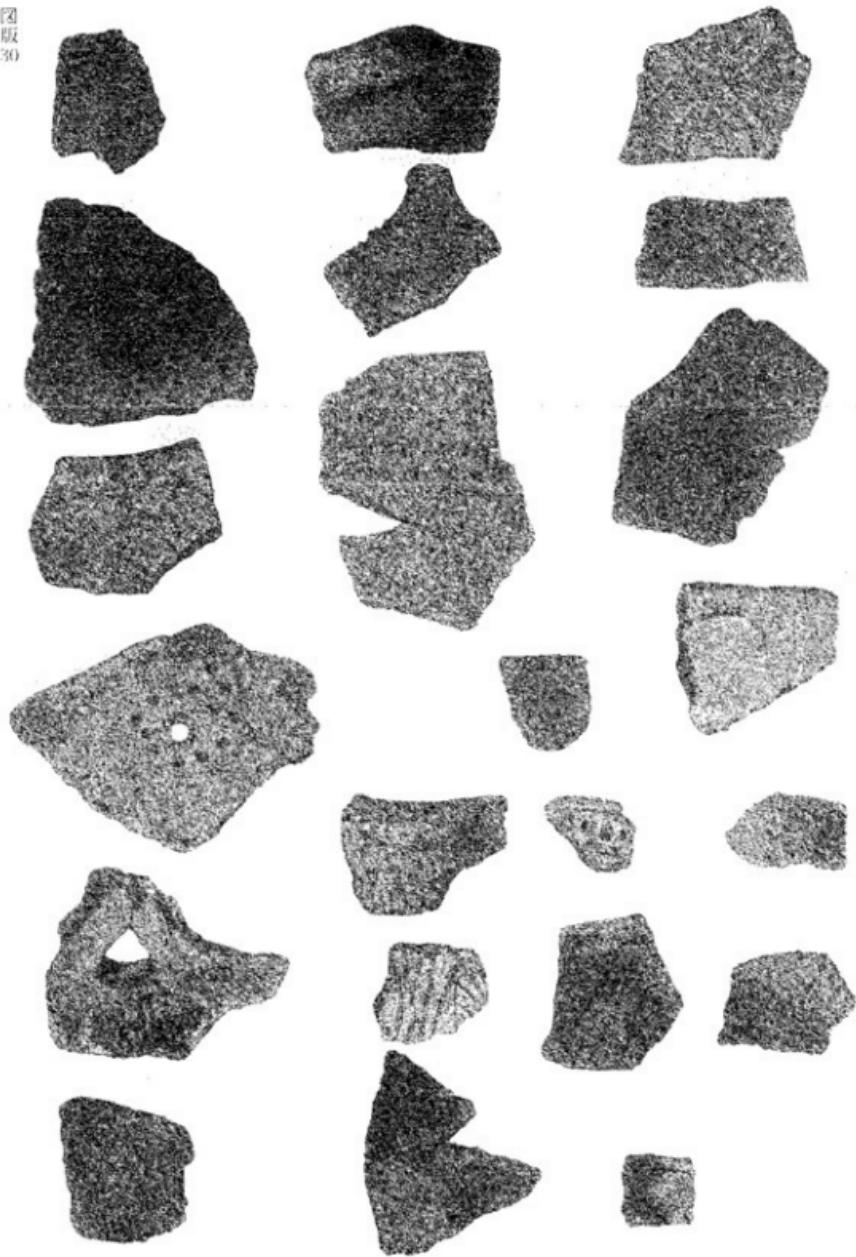


5号

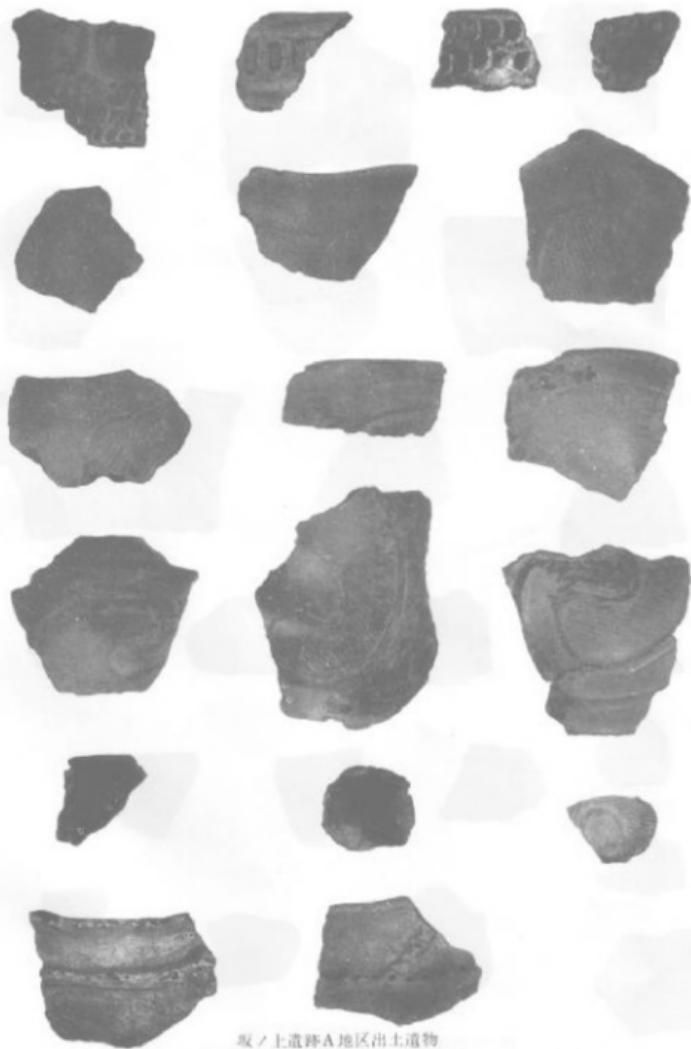


6号

下堤遺跡 フラスコ状ビット出土遺物



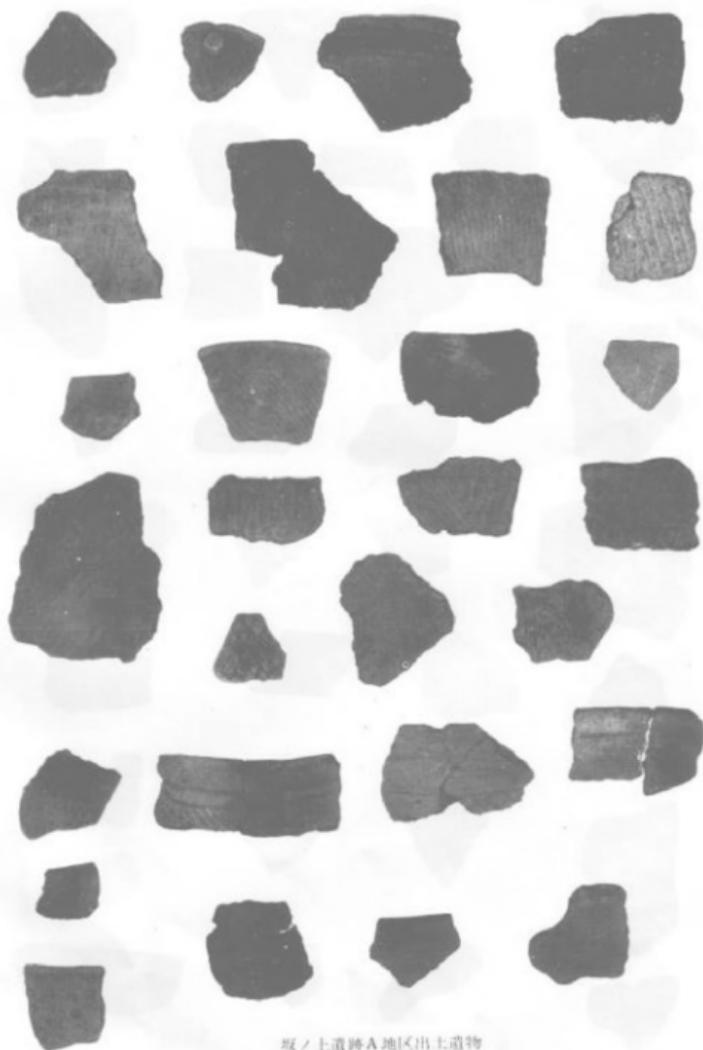
坂ノ上遺跡A地区出土遺物



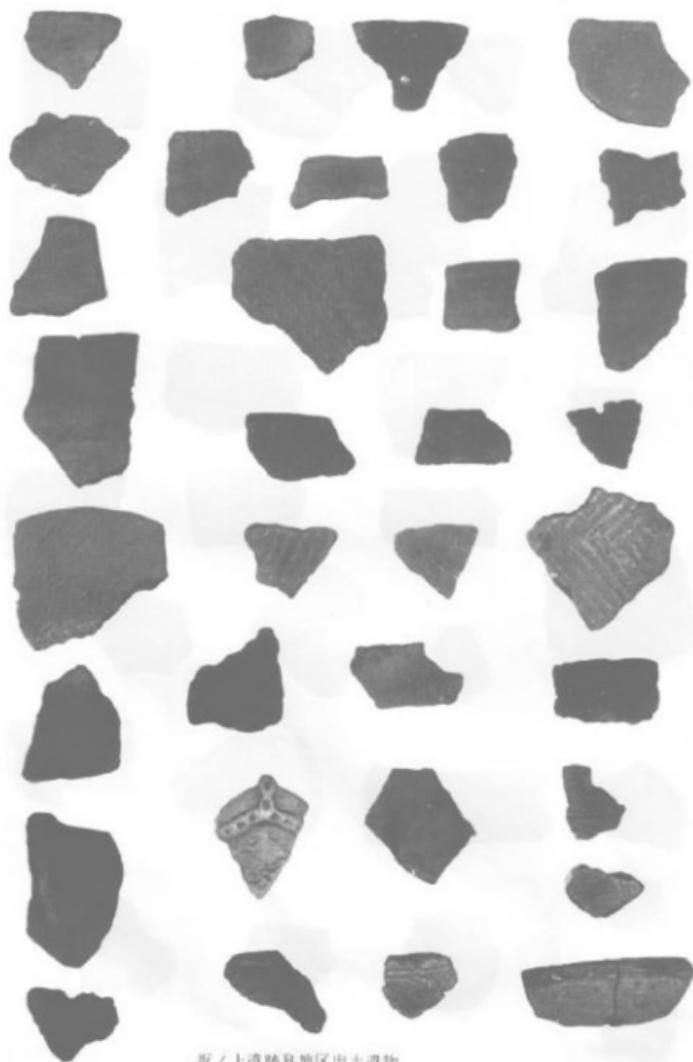
坂ノ上遺跡A地区出土遺物



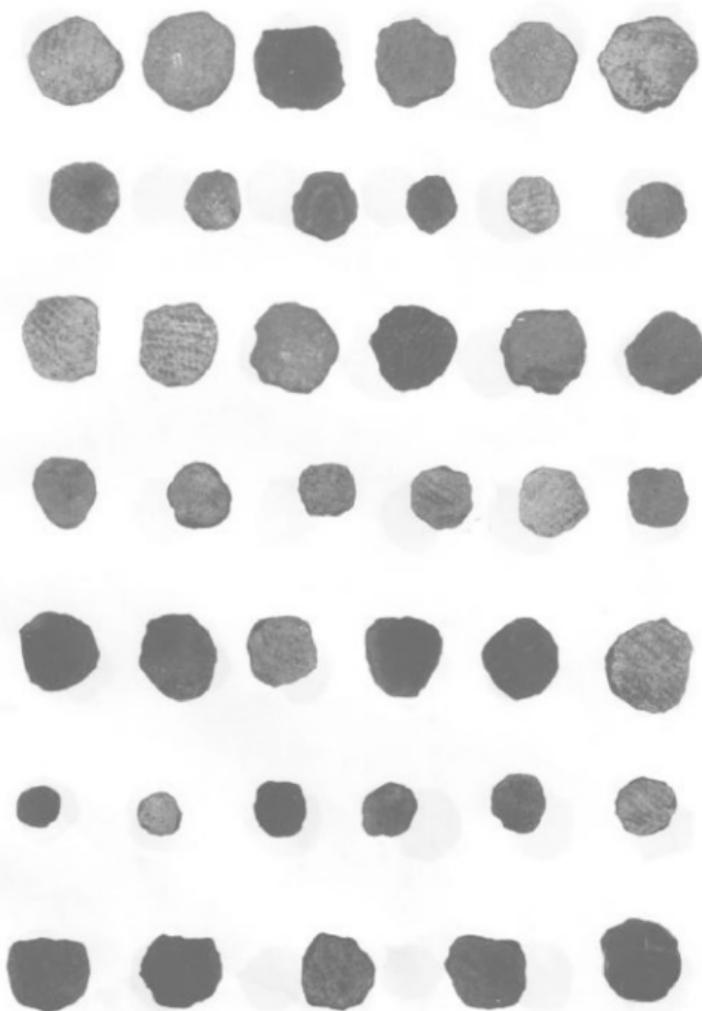
坂ノ上遺跡A地区出土遺物



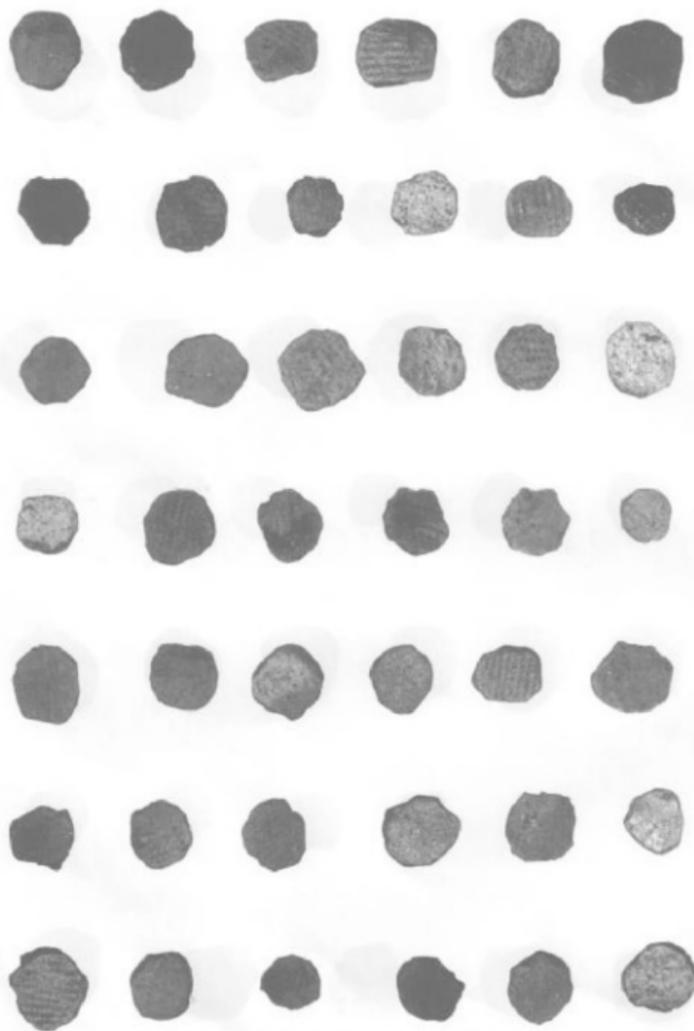
坂ノ上道路A地区出土遺物



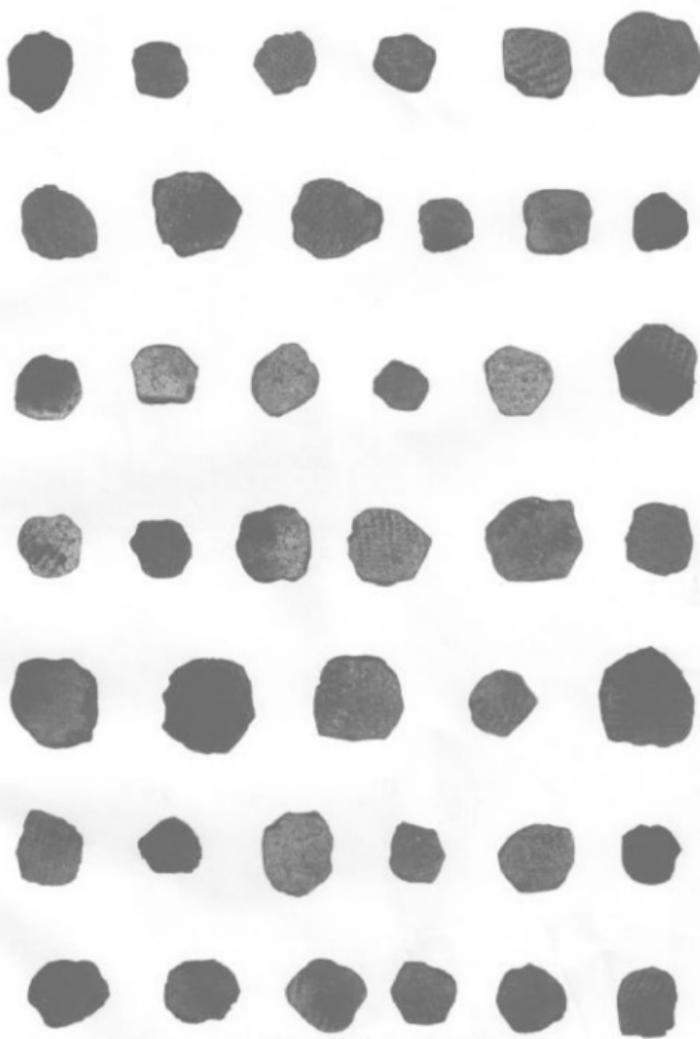
坂ノ上遺跡B地区出土遺物



坂ノ上遺跡A地区出土円板状土製品



坂ノ上遺跡A地区出土円板状土製品



坂ノ上遺跡A地区出土円板状土製品



小阿地下埋蔵物発掘調査報告書

昭和 51 年 3 月

発行 秋田市教育委員会

印刷 秋田マイクロ写真印刷(株)